

# 独立行政法人国立美術館の平成24年度に係る業務の実績に関する評価

## 全体評価

<参考> 業務の質の向上:A 業務運営の効率化:A 財務内容の改善:A

### ①評価結果の総括

- ・第3期中期計画に向けて、事務・事業運営が計画通り実施されていることは、高く評価できる。
- ・美術振興のナショナルセンターとして、充実した企画展・所蔵品展を実現するとともに、多角的な美術情報の発信を実行し、一定の成果を上げている。
- ・業務運営の効率化等の面でも着実な実績を上げており、来館者へのサービス向上のために積極的に取り組んでいると認められる。しかし、我が国の文化的感性の涵養を担うべき本法人が人件費の抑制により人材育成に停滞を招いている事態は、早急な検討が必要である。

### ②平成24年度の評価結果を踏まえた、事業計画及び業務運営等に関して取るべき方策(改善のポイント)

#### (1)事業計画に関する事項

- ・各館が行う展覧会事業については、ほぼ期待どおりの優れた成果を上げており、その上で、5館の連携による企画展示など、引き続き積極的な取組が望まれる。「項目別-p11ほか参照」
- ・企画展の入場者数は、減少傾向を示しており、運営方式について新たな取組の検討が必要である。また、観覧者の増加を図るためには、美術館の空間利用やショップ運営など、観覧者のニーズを把握した新たな運営が求められる。「項目別-p5~9、67~68参照」
- ・収蔵作品、寄託作品も順調に増えており、今後はナショナルギャラリーとして、それらが安全かつ機能的に収蔵されるスペースを確保すべきである。「項目別-p75~78参照」

#### (2)業務運営に関する事項

- ・ナショナルセンターとして、継続的に業務運営を実施していくためには、常勤職員の補充及び人材育成が必須であり、改善に努めるべきである。「項目別-p168~169参照」

#### (3)その他

- ・国際交流については、ナショナルセンターとして中長期計画を策定し、国際会議への参加や誘致を行うなど、アジアにおける中核的な美術館として活動することが必要である。「項目別-p110~119、127~129参照」

### ③特記事項

特になし

文部科学省独立行政法人評価委員会  
文化分科会 国立美術館部会 名簿

<正委員>

前田 富士男 中部大学人文学部教授

<臨時委員>

市川 政憲 茨城県近代美術館館長

金原 宏行 豊橋市美術博物館館長

武田 潔 早稲田大学文学学術院教授

宮島 博和 公認会計士

(以上5名)

# 独立行政法人国立美術館の平成24年度に係る業務の実績に関する評価

## 項目別評価総表

項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※					項目名	中期目標期間中の評価の経年変化※				
	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度		23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
(大項目名)国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成する	A	A				(大項目名)業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A			
(中項目名)美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開	A	A				(小項目名)業務の効率化の状況	A	A			
(小項目名)展覧会への取組	A	A				(小項目名)給与水準の適正化等	A	A			
(小項目名)国立新美術館等の取組	A	A				(小項目名)内部統制	A	A			
(小項目名)情報の発信	A	B				(小項目名)情報安全	A	A			
(小項目名)教育普及活動の実施状況	A	A				(大項目名)財務、人事、施設整備に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A			
(小項目名)調査研究の実施状況	A	A				(小項目名)財務の状況	A	A			
(小項目名)観覧環境の提供	A	A				(小項目名)人事の状況	A	B			
(中項目名)我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・	A	A									
(小項目名)収蔵品の収集	A	A									
(小項目名)収蔵品の保管・管理	A	B									
(小項目名)収蔵品の修理	A	A									
(小項目名)収集・保管のための調査研究	A	A									
(中項目名)我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与	A	A									
(小項目名)ナショナルセンターとしての国内外の美術館等との連携・協力	A	A									
(小項目名)ナショナルセンターとしての人材育成	B	B									
(小項目名)フィルムセンターの取組状況	A	A									

※当該中期目標期間の初年度から経年変化を記載。

※「－」は当該年度では該当がないことを、「／」は終了した事業を表す。

備考(法人の業務・マネジメントに係る意見募集結果の評価への反映に対する説明等)  
 本法人の業務・マネジメントに係る意見募集を実施した結果、意見は寄せられなかった。(意見が無かった場合)

【参考資料1】予算、収支計画及び資金計画に対する実績の経年比較(過去5年分を記載)

(単位:百万円)

区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
収入						支出					
運営費交付金	5,790	5,773	5,859	5,973	7,701	運営事業費	16,133	14,787	15,237	14,010	13,700
展示事業収入	1,311	1,294	1,432	1,150	1,172	人件費	1,112	1,189	1,038	1,087	1,000
受託収入	33	4	0	0	0	管理部門	331	346	285	293	283
寄附金収入	35	17	13	28	16	事業部門	781	843	753	794	717
消費税等還付税額	0	0	0	0	0	業務経費	15,021	12,549	14,199	12,923	12,700
施設整備費補助金	9,250	7,205	7,836	7,026	5,318	一般管理費	1,607	1,467	1,315	1,183	1,161
文化芸術情報電子化推進費補助金	0	1,049	0	0	0	展覧事業費	2,964	2,735	3,642	3,401	5,007
						調査研究事業費	201	198	172	191	208
						教育普及事業費	999	999	1,178	1,101	1,006
						施設整備費補助金	9,250	7,150	7,892	7,047	5,318
						文化芸術情報電子化推進費補助金	0	1,049	0	0	0
計	16,419	15,342	15,140	14,177	14,207	計	16,133	14,787	15,237	14,010	13,700

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

(単位:百万円)

区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
費用						収益					
経常費用	5,930	5,704	5,795	5,444	5,501	運営費交付金収益	4,485	4,297	4,554	4,142	4,134
収集保管事業費	323	341	411	386	364	資産見返運営費交付金戻入	145	156	148	157	145
展覧事業費	1,861	1,714	1,815	1,698	1,947	資産見返寄付金戻入	1	1	3	3	3
調査研究事業費	296	322	302	318	324	資産見返物品受贈額戻入	15	15	14	12	12
教育普及事業費	1,154	1,156	1,288	1,229	1,127	入場料収入	774	786	932	693	677
新館設置対応費	0	0	0	0	0	その他事業収入	533	500	491	451	483
受託事業費	33	4	0	0	0	受託収入	33	4	0	0	0
一般管理費	2,083	1,992	1,810	1,638	1,578	補助金等収益	0	10	0	0	0
減価償却費	164	172	165	174	161	寄附金収益	10	41	8	15	29
臨時損失	16	3	4	1	0	施設費収益	127	66	175	42	14
						雑益	6	7	9	6	12
						臨時利益	8	18	0	0	1
計	5,930	5,704	5,795	5,444	5,501	計	6,137	5,901	6,334	5,521	5,510
						純利益	207	197	539	77	9
						目的積立金取崩額	0	6	0	12	2
						総利益	207	203	539	89	11

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

(単位:百万円)

区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
資金支出						資金収入					
業務活動による支出	6,972	6,681	7,940	7,103	8,370	業務活動による収入	7,111	7,340	8,186	7,158	8,938
投資活動による支出	8,486	7,858	6,610	8,186	5,641	運営費交付金収入	5,790	5,773	5,859	5,973	7,701
財務活動による支出	3	1	0	0	0	入場料収入	774	785	931	694	674
国庫納付金の支払額	0	0	0	1,606	0	その他事業収入	479	575	485	463	546
資金に係る換算差額	0	0	4	0	0	寄附金収入	35	18	13	28	17
翌年度への繰越金	1,777	2,435	2,755	1,300	1,617	受託収入	33	33	4	0	0
						補助金等収入	0	156	894	0	0
						投資活動による収入	8,362	7,858	6,688	8,282	5,390
						前年度よりの繰越金	1,765	1,777	2,435	2,755	1,300
計	17,238	16,975	17,309	18,195	15,628	計		16,975	17,309	18,195	15,628

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

【参考資料2】貸借対照表の経年比較(過去5年分を記載)

(単位:百万円)

区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
資産						負債					
流動資産	2,840	3,692	4,261	1,549	1,813	流動負債	2,061	2,681	2,638	1,453	1,706
固定資産	135,218	142,359	149,765	156,316	163,783	固定負債	1,144	1,085	1,102	968	880
						負債合計	3,205	3,766	3,740	2,421	2,586
						純資産					
						資本金	81,019	81,019	81,019	81,019	81,019
						資本剰余金	52,570	59,805	67,268	73,954	81,511
						利益剰余金	1,264	1,461	1,999	471	480
						(うち当期末処分利益)	(207)	(203)	(539)	(89)	(11)
						資本合計	134,853	142,285	150,286	155,444	163,010
資産合計	138,058	146,051	154,026	157,865	165,596	負債資本合計	138,058	146,051	154,026	157,865	165,596

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

【参考資料3】利益(又は損失)の処分についての経年比較(過去5年分を記載) (単位:百万円)

区分	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
I 当期末処分利益	207	203	539	89	11
当期総利益	207	203	539	89	11
II 利益処分額	207	203	539	89	11
積立金	207	203	539	89	11
独立行政法人通則法第44条第3項により主務大臣の承認を受けた額	0	0	0	0	0
美術作品購入・修理積立金	0	0	0	0	0
設備積立金	0	0	0	0	0

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

【参考資料4】人員の増減の経年比較(過去5年分を記載) (単位:人)

職種※	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
定年制研究系職員	61	61	61	61	61
定年制事務系職員	70	70	70	70	70

※職種は法人の特性によって適宜変更すること

備考(指標による分析結果や特異的なデータに対する説明等)

# 独立行政法人国立美術館の平成24年度に係る業務の実績に関する評価

<b>【(大項目)1】</b>	I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	<b>【評定】</b> A			
		H23	H25	H26	H27
		A			
<b>【(中項目)1-1】</b>	1. 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開	<b>【評定】</b> A			
		H23	H25	H26	H27
		A			

<b>【(小項目)1-1-1】</b>	展覧会への取組	<b>【評定】</b> A			
<b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b>		H23	H25	H26	H27
(1) 多様な鑑賞機会の提供		A			
①-1 中期目標で示された学術的意義、国民の関心、国際文化交流の推進等に配慮しつつ、国立美術館ならではの多様な美術作品の鑑賞機会をより多くの国民に提供するため、各館において魅力ある質の高い所蔵作品展・企画展及び企画上映を実施する。 ①-2 所蔵作品展は、各館におけるコレクションの充実を図りつつ、その特色を十分に発揮したものとする。また、最新の研究成果を基に、美術に関する理解の促進に寄与することを目指すとともに、所蔵作品の鑑賞・理解に資するため作品の展示替えに加え、小企画展・テーマ展などを開催する。 ①-3 企画展は、積年の研究成果に基づき、時宜を得たものを企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、利用者のニーズに対応しつつ、次の観点に留意して実施する。また、入館者数を念頭においた展覧会のみならず、新しい視点・観点を提示する展覧会をも提供する。 (イ) 国際的視野に立ち、アジア諸地域を含め海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。 (ロ) 展覧会テーマの設定や他の芸術文化との連携による展示方法等について方向性を提示することに取り組む。 (ハ) メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。 (ニ) 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に取り組む。 なお、企画展の開催回数は概ね以下のとおりとする。		実績報告書等 参照箇所 <実績報告書> P3~9 1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開 (1) 多彩な鑑賞機会の提供 ①所蔵作品展 ②企画展 ③東京国立近代美術館フィルムセンター映画上映等 ④巡回展			

(東京国立近代美術館)  
 本館 年4～6回程度  
 工芸館 年2～3回程度  
 フィルムセンター 年15回程度(展覧会を含む)

(京都国立近代美術館)

年4～6回程度

(国立西洋美術館)

年3回程度

(国立国際美術館)

年5～6回程度

(国立新美術館)

年5～6回程度(公募展を除く。)

- ①-4 展覧会を開催するにあたっては、実施目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施し、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう取り組む。
- ①-5 5館共同企画展「陰影礼讃—国立美術館コレクションによる—」(平成22年9月開催)の成果を踏まえ、今後の各館連携を引き続き推進する。
- ② 公立美術館等のニーズ等を十分踏まえ、国立美術館が所蔵する美術作品及びそれに関する調査研究の成果を活用して、地方巡回展を積極的に開催する。  
 また、あわせて当該地方巡回展に関連する講演会又はシンポジウムを開催することにより、ナショナルセンターとして地域における鑑賞機会の充実と美術の普及に資する。  
 このほか、公立文化施設等と連携協力して、所蔵映画フィルムによる優秀映画鑑賞会を実施する。
- ③ 入館者数については、展覧会ごとに実施目的、想定する入館者層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境の確保、広報活動、過去の入館者等の状況等を踏まえて、国立美術館としてふさわしい入館者数の目標を設定し、その達成に取り組む。
- ④ 映画フィルム・資料の所蔵作品を活用した上映、展示等の活動に積極的に取り組む。

P21～25

(5) 調査研究成果の美術館活動への反映

① 調査研究一覧

<平成24年度計画>

P1～12

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開

(1) 多様な鑑賞機会の提供

【インプット指標】

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	1,900	1,861	1,714	1,815	1,698	1,947
従事人員数(人)	61	59	59	57	57	54

- 1) 決算額は損益計算書 展覧事業費を計上している。
- 2) 従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。



評価基準	実績	分析・評価
<p>○ 各館において、魅力ある質の高い所蔵作品展・企画展及び企画上映を実施したか。</p> <p>(所蔵作品展)</p> <p>○ 各館におけるコレクションの充実を図りつつ、その特色を十分に発揮したものとしましたか。また、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与することを旨とするとともに、所蔵作品の鑑賞・理解に資するため作品の展示替えに加え、小企画展・テーマ展などを開催したか。</p>	<p>(所蔵作品展)</p> <p>東京国立近代美術館 (本館)</p> <p>平成 24 年度は、10 年ぶりに所蔵品ギャラリーをリニューアルし、特集展示の拡充、解説の拡充、導線の整理、多言語化対応及び休憩スペースの拡充を行った。「美術にぶるっ！」展第 1 部という変則的な運用を行った 10 月から 1 月までの会期を終え、平成 25 年 1 月から、所蔵作品展「MOMAT コレクション」を開始した。</p> <p>「MOMAT コレクション」では、12 室をすべて特集展示の形式とし、当館コレクションの特徴を活かしつつ、新収蔵品の活用や研究成果のいち早い公開を積極的に行うとともに、日本画、洋画、版画、水彩・素描、写真など美術の各分野にわたる 12,000 点(うち重要文化財 13 点、寄託作品 1 点を含む)を越える所蔵作品から、会期毎に約 200 点を選び、20 世紀初頭から今日に至る約 100 年間の日本の近代美術の流れを海外作品も交えて展示した。</p> <p>(工芸館)</p> <p>「寿ぎの『うつわ』—工芸館の漆工コレクションから—」では、海外では日本を代表する工芸の一つとして知られている漆工について、一部の借用作品を交えて、工芸館として初めて特集した。また、「花咲く工芸」では、所蔵作品の中から花を主題にした 159 点を選び、陶磁や染織、漆工、金工、木工、ガラス、人形など、様々な素材による作品を取り上げ、明治期から現代にかけての近代工芸を代表する名品を紹介した。そのほか、毎年度恒例となっている「こども工芸館／おとな工芸館 植物図鑑」を開催した。</p> <p>京都国立近代美術館</p> <p>「コレクション・ギャラリー」では、6 回の展示替えを行うとともに、「すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙」と連動し、「前衛」運動の旗手・村山知義が活動した 1920 年及び 30 年代に展開した動向の一端を紹介した「村山知義と同時代の日本の「前衛」」、「高橋由一展」と連動し、京都で高橋由一にも匹敵する洋画活動を展開した田村宗立の画業を、最初期から晩年に至るまで紹介した「京の由一 田村宗立 — 明治洋画の先覚者」、また、「山口華楊展」に合わせ山口華楊及び関連作家の作品を展示し、画家としてだけでなく、指導者として京都画壇の発展に寄与したことをも紹介する「山口華楊展にちなんで」を開催するなど、平成 24 年度も引き続き、企画展と関連する、コレクションを活用した小企画を開催した。</p> <p>また、「京の由一 田村宗立 — 明治洋画の先覚者」に関して、ポスターの裏面に、展覧会意図や作者・作品などの解説を出品作品の色刷図版を掲載しながら読み物風に印刷し、観覧者に無料で配</p>	<p>国立美術館全体として、計画どおり所蔵作品展、企画展、企画上映を開催し、質の高い展覧会が実施されたが、企画上映については、目標入館者数に及ばなかった。映画史的に価値が高いものの、これまで紹介されることのなかった知名度の低い作品も多く含まれていたため、集客力が必ずしも大きくなかったと考えられるが、ナショナルセンターとしての活動としては、評価できる。</p> <p>近年の各館のコレクションの充実をもとに、現代的関心に対応する展観の実現など魅力ある展覧会が実施されたことは評価できる。</p> <p>また、展示替えや小企画展等の実施も拡充されており、全体として、所蔵作品展への取組の努力が見られる。</p> <p>なお、東京国立近代美術館工芸館のホームページ上のニュースの充実、各館におけるポスターの改善など進展が認められた点について評価できる。</p> <p>所蔵作品展については、目標入館者数を達成しており、今後とも各館の特色を生かした、内容ゆたかな展覧会が期待される。</p>

布して、展覧会の情報提供を行う新たな形式の広報物を作成した。

#### 国立西洋美術館

所蔵作品から約 200 点の絵画・彫刻を選んでおおむね時代順に配列し、中世末期から 20 世紀までの西洋美術の流れを辿ることのできる展示を行った。この間、6 回の展示替えを行ったが、それによる休室は最小限にとどめ、絵画・彫刻コレクションの主要作品を常時公開するよう努めた。

版画素描展示室では、「クラインマイスター：16 世紀前半ドイツにおける小画面の版画家たち」をはじめ計 4 本の小企画展を開催し、素描・版画コレクションの多様な側面を紹介した。

広報の新たな取組として、インターネット上で美術作品の高解像度画像や館内の 360 度画像（ストリートビュー）を提供する Google 社の web サービス「Google アートプロジェクト」に参加し、同サイトを通じて 164 件の所蔵品データの公開を開始した。また、企画展やイベントの告知を行い、常設展への関心を高めることを目指して、公式 facebook ページの公開を開始した。

#### 国立国際美術館

平成 24 年度の所蔵作品展は、共催展及び企画展の開催に合わせて 3 回行った。同時開催の企画展に合わせ展示内容を見直し、企画展に関連する作家及び作品や、近年収蔵された作品による展示構成としている。「宮永愛子：なかそらー空中空ー」と同時期に開催したコレクション展においては、「70 年代日本の美術ー「もの派」を中心にしてー」というタイトルで、これまで重量があるため、展示する機会がなかった作品を一堂に紹介した。

#### 【数値目標の達成状況】

・所蔵作品展入館者数

実績 777,106 人

目標 697,000 人

目標達成率 111.5%

#### 【所蔵作品展 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
開催日数	1,249	1,116	1,264	1,082	1,166	1,200	1,084
展示替回数	24	20	25	24	22	19	21
入館者数	1,032,918	815,042	1,201,234	844,672	1,051,827	864,514	777,106
目標数	740,000	707,000	884,000	709,000	823,000	689,000	697,000

(企画展)

○ 積年の研究成果に基づき、時宜を得たものを企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、利用者のニーズに対応しつつ、特に次の観点到に留意して実施したか。また、入館者数を念頭においた展覧会のみならず、新しい視点・観点を提示する展覧会をも提供したか。

- ・ 国際的視野に立ち、アジア諸地域を含め海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組んだか。
- ・ 展覧会テーマの設定や他の芸術文化との連携による展示方法等について新しい方向性を提示することに取り組んだか。
- ・ メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促したか。
- ・ 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に取り組んだか。

(企画展の開催回数基準)

- ・ 東京国立近代美術館  
本館 年4～6回程度  
工芸館 年2～3回程度  
フィルムセンター年15回程度  
(展覧会を含む)
- ・ 京都国立近代美術館  
年4～6回程度
- ・ 国立西洋美術館

(企画展)

企画展は、来館者のニーズに応え、以下の観点到に留意して実施した。

- イ 国際的視野に立ち、海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。
- ロ 展覧会テーマの設定やその提示方法等について新しい方向性を示すことに努める。
- ハ メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。
- ニ 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に努める。
- ホ その他

なお、東京国立近代美術館では、所蔵品ギャラリーのリニューアル工事に際しての夏期休館中、所蔵品から選りすぐった絵画作品を前に演奏を繰り広げる「Concerto Museo / 絵と音の対話」(平成24年8月10日～8月12日)、建築事務所スタジオ・ムンバイによる日本初の建築プロジェクトである「夏の家」(平成24年8月26日～平成25年5月26日)、「パフォーマンス」をテーマにプログラムを組んだ連続14日間のイベント「14のタペ」(平成24年8月26日～9月8日)を開催した。

【企画展】

※以下の表の( )内は会期全体の数値、(継続)は次年度に継続開催する展覧会

館名	展覧会名	開催日数	入館者数	目標数	企画趣旨	共催者
東京国立近代美術館	① 生誕100年 ジャクソン・ポロック展	33 (79)	63,615 (123,301)	62,000 (150,000)	イ	読売新聞社、日本テレビ放送網
	② 写真の現在4 そのときの光、そのさきの風	51	13,785	17,000	ロ	
	③ 吉川霊華展 近代にうまれた線の探究者	42	12,144	16,000	ニ	
	④ 東京国立近代美術館60周年記念特別展 美術にぶるっ! ベストセレクション 日本近代美術の100年	76	101,647	100,000	ロ	NHK, NHK プロモーション
	⑤ フランシス・ベーコン展【※1】	22 (73)	28,552 (継続)	45,000 (120,000)	イ, ロ	日本経済新聞社
	計	<b>224</b>	<b>219,743</b>	<b>240,000</b>		
東京国立近代美術館	① 原弘と東京国立近代美術館デザインワークを通して見えてくるもの	33 (85)	24,762 (50,020)	10,000 (25,000)	ホ	
	② 「織」を極める 人間国宝 北村武資	14 (63)	5,625 (12,642)	3,000 (14,000)	ロ	
	③ 越境する日本人—工芸家が夢見たアジア 1910s-1945	74	8,242	15,000	ニ	

企画展については、本年度も、よく評価に応え得る活動が展開された。国立新美術館の「セザンヌ——パリとプロヴァンス」は、地道ながら、着実に研究関心に裏打ちされた展観となった。また、具体美術協会の関東地方での最初の本格的回顧展「具体—ニッポンの前衛 18年の軌跡—」は、国際的にも関心を集める運動で、日本現代の幕開けとなった前衛グループの活動を浮き彫りにする重要な再検証となり、東京国立近代美術館の「吉川霊華展 近代にうまれた線の探究者」と京都国立近代美術館の「山口華揚展」は、近代日本画の多様な側面を照らし出し、書と絵画の交通、そして、モチーフ追究の可能性を開示した、また、東京国立近代美術館の「美術にぶるっ! ベストセレクション 日本近代美術の100年」展は、作品品質が高度な水準で確かに鑑賞者の共感を得た。また、確固たる評価を得ている世界美術の紹介や現代美術への取組という点では、国立西洋美術館をはじめ、各館において、優れた展観が実現され、利用者のニーズに対応する成果を上げた。

企画展の開催回数は、各館とも目標回数を達成した。入館者数も全体として目標に達成しており、展覧会内容においても充実した取組であったと認められる。

展覧会・上映会によっては、目標を達していないものがあることから、

年3回程度 ・国立国際美術館 年5～6回程度 ・国立新美術館 年5～6回程度(公募展を除く。)	術	④現代工芸への視点 現代の座標—工芸をめぐる11の思考—	68	9,030	11,000	口		今後のマスコミとの共催展の開催方法及び広報活動について等一層の検討を求めたい。		
	工	⑤東京オリンピック1964 デザインプロジェクト	42 (93)	15,744 (継続)	18,000 (41,000)	二				
	芸	計	231	63,403	57,000					
	京	都	国立近代美術館	①すべての僕が沸騰する—村山知義の宇宙—	33	10,086	10,000		ハ	読売新聞社, 美術館連絡協議会
				②井田照一の版画	30	7,793	8,000		二	京都新聞社
				③KATAGAMI Style—もうひとつのジャポニスム	40	36,337	54,000		イ, 口 二	日本経済新聞社, 京都新聞社
				④近代洋画の開拓者 高橋由一	39	45,954	55,000		ホ	読売新聞社, NHK京都放送局, NHKプラネット近畿
				⑤日本の映画ポスター芸術【※2】	(48)	(35,624)	(18,000)		二, 口 ホ	東京国立近代美術館フィルムセンター
				⑥山口華楊展	39	43,382	42,000		ホ	毎日新聞社, 京都新聞社
				⑦開館50周年記念特別展 交差する表現 工芸/デザイン/総合芸術	14 (46)	2,841 (継続)	10,000 (33,000)		口	京都新聞社
		計	195	146,393	179,000					
	国	立	西洋美術館	①ユベール・ロベール—時間の庭	44 (67)	64,237 (91,897)	23,000 (34,000)		イ, 二	東京新聞
				②ベルリン国立美術館展 学べるヨーロッパ美術の400年	85	399,312	296,000		イ, 二	TBS, 読売新聞社
				③手の痕跡 国立西洋美術館所蔵作品を中心としたロダンとブールデルの彫刻と素描	70	46,876	31,000		口	朝日新聞社
				④ラファエロ	26 (81)	139,611 (継続)	97,000 (317,000)		イ	フィレンツェ文化財・美術館特別監督局, 読売新聞社, 日本テレビ放送網
				計	225	650,036	447,000			
	国	立	国	①草間彌生 永遠の永遠の永遠	7 (80)	39,831 (218,945)	4,000 (44,000)		口	朝日新聞社
				②国立国際美術館35周年記念展 コレクションの誘惑	57	42,826	41,000		ホ	朝日新聞社
				③<私>の解体へ: 柏原えつとむの場合	73	21,527	11,000		二	

際美術館	【※3】					
	④リアル・ジャパネスク:世界の中の日本現代美術 【※3】	71	20,602	17,000	ホ	
	⑤宮永愛子:なかそら—空中空—	63	59,452	52,000	ハ	
	⑥エル・グレコ展	61	191,143	127,000	イ	NHK大阪放送局, NHKプラネット近畿, 朝日新聞社
	⑦夢か、現か、幻か	56	12,473	15,000	ロ, ハ	
	計	<b>388</b>	<b>387,854</b>	<b>267,000</b>		
国立新美術館	①野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿	2 (68)	813 (21,151)	1,000 (18,000)	ニ	
	②セザンヌ—パリとプロヴァンス	63 (67)	290,494 (302,239)	317,000 (331,000)	イ, ロ	日本経済新聞社
	③大エルミタージュ美術館展 世紀の顔・西欧絵画の400年	73	392,949	407,000	イ	日本テレビ放送網, 読売新聞社, エルミタージュ美術館
	④「具体」—ニッポンの前衛 18年の軌跡—	60	26,700	27,000	ロ	
	⑤与えられた形象—辰野登恵子／柴田敏雄	66	15,725	24,000	ロ	読売新聞社
	⑥リヒテンシュタイン 華麗なる侯爵家の秘宝	71	253,569	237,000	イ	朝日新聞社, 東映株式会社, TBS
	⑦未来を担う美術家たち DOMANI・明日展 2013<文化庁芸術家在外研修の成果>	20	14,307	10,000	ハ	文化庁, 読売新聞社, アート・ベンチャー・オフィス・ショウ
	⑧アーティスト・ファイル 2013—現代の作家たち	59 (60)	30,129 (継続)	31,000 (32,000)	ハ, ホ	
	⑨平成24年度[第16回]文化庁メディア芸術祭	11	51,819	45,000	ハ	文化庁メディア芸術祭実行委員会(文化庁, 国立新美術館)
	⑩カリフォルニア・デザイン 1930-1965—モダン・リビングの起源—	11 (67)	15,670 (継続)	6,000 (40,000)	イ, ロ, ハ	ロザンゼルス・カウンティ美術館
計	<b>436</b>	<b>1,092,175</b>	<b>1,105,000</b>			
合計	<b>1,699</b>	<b>2,559,604</b>	<b>2,295,000</b>			

備考:【※1】借用作品経由地となったシドニーの美術館との間でのスケジュール及び便数を調整した結果、開催日数が当初予定の31日間から変更となった。

【※2】コレクション・ギャラリーの一部を使って開催した展覧会のため、開催日数、入館者数及び目標数はそれぞれの合計に含めない。

【※3】台風接近に伴う暴風警報発令により、1日間臨時休館した。

【数値目標の達成状況】

・企画展入館者数

実績 2,559,604 人

目標 2,295,000 人

目標達成率 111.5%

【企画展 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
開催日数	1,526	1,781	1,717	1,778	1,623	1,849	1,699
目標回数	25～31	25～31	25～31	25～31	25～31	23～30	23～30
開催回数	35	43	40	36	41	36	38
入館者数	2,181,090	3,354,198	3,076,557	3,582,458	3,450,921	2,566,205	2,559,604
目標数	1,469,000	2,302,000	2,342,400	2,519,000	2,196,400	1,926,600	2,295,000

東京国立近代美術館フィルムセンター映画上映等

【上映会】

タイトル	会場	上映回数	日数	入館者数	目標数	企画趣旨	共催者
①よみがえる日本映画 vol.4[大映篇] 一映画保存のための特別事業費による	大ホール	60	20	9,105	8,500	ニ	
②生誕百年 映画監督 今井正	大ホール	124	54	18,115	19,500	ニ	
③EU フィルムデーズ 2012	大ホール	42	20	7,862	8,500	ホ	駐日欧州連合代表部, EU加盟国大使館・文化機関
④ロードショーとスクリーンブームを呼んだ外国映画	大ホール	51	17	5,884	6,500	ホ	一般社団法人外国映画輸入配給協会

⑤シネマの冒険 闇と音楽 2012 ロシア・ソビエト無声 映画選集	大ホール	12	6	1,836	1,500	ホ	
⑥第 34 回 PFF ぴあフィ ルムフェスティバル	大ホール 、小ホー ル	35	10	4,576	4,500	ロ、ニ	PFF パートナ ーズ(ぴあ、ホ リプロ、日活) 、公益財団法 人ユニジャパ ン
⑦生誕百年 木下恵介劇 場	大ホール	50	25	5,089	8,500	ニ	
⑧日活映画の 100 年 日 本映画の 100 年	大ホール	138	69	17,728	19,500	ニ	
⑨よみがえる日本映画 vol.5[日活篇]—映画保存 のための特別事業費によ る	大ホール	72	36	10,184	10,000	ニ	
⑩自選シリーズ 現代日 本の映画監督 1 崔 洋一	大ホール	24	12	3,578	3,500	ロ、ニ	
⑪映画の教室 2012 [京 橋映画小劇場 No.23]	小ホール	18	9	1,800	2,000	ホ	
⑫アンコール特集 2011 年度上映作品より [京橋 映画小劇場 No.24]	小ホール	18	9	1,947	1,500	ホ	
⑬東京国立近代美術館 60 周年記念 美術館と映画:フィルムセ ンター以前の上映事業 [京橋映画小劇場 No.25]	小ホール	42	21	2,201	3,500	ホ	
計		<b>686</b>	<b>308</b>	<b>89,905</b>	<b>97,500</b>		

【数値目標の達成状況】

・上映会入館者数(東京国立近代美術館フィルムセンター)

実績 89,905 人

目標 97,500 人

目標達成率 92.2%

※目標未達成の原因・理由

上映会の入館者数が目標を下回った主な理由として、「生誕百年 木下恵介劇場」や「日活映画の100年 日本映画の100年」など日本を代表する巨匠及び映画会社の特集において、これまで紹介されることのなかった巨匠の知られざる作品(テレビドラマやアニメーション)や、採算性に乏しいが、映画史上貴重な戦前作品を中心に上映を行ったが、結果として知名度の高い作品ほどの集客に結びつかなかったことが挙げられる。

【展覧会】

展覧会名	日数	入館者数	目標数	企画趣旨	共催者
①ロードショーとスクリーン 外国映画ブームの時代	89	5,104	4,000	口, 二	一般社団法人外国映画輸入配給協会
②日活映画の100年 日本映画の100年	102	5,738	4,500	口	
③西部劇の世界 ポスターでみる映画史 Part1	72	4,770	3,000	二	
計	263	15,612	11,500		

【数値目標の達成状況】

・展覧会入館者数(東京国立近代美術館フィルムセンター)

実績 15,612人

目標 11,500人

目標達成率 135.8%

【上映会 過去の実績】(東京国立近代美術館フィルムセンター)

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
開催日数	339	350	365	368	328	323	308
目標回数	5~6	5~6	5~6	5~6	5~6	15回程度	15回程度
開催回数	14	15	16	18	15	14	13
入館者数	124,775	127,542	118,111	113,677	109,098	105,163	89,905
目標数	98,500	101,500	111,000	121,500	105,500	99,000	97,500



○ 展覧会を開催するにあたっては、実施目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施し、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう取り組んだか。

○ 5館共同企画展「陰影礼讃—国立美術館コレクションによる—」(平成 22 年 9 月開催)の成果を踏まえ、今後の各館連携を引き続き推進したか。

**【展覧会 過去の実績】(東京国立近代美術館フィルムセンター)**

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
開催日数	291	270	290	276	246	278	263
開催回数	2	3	3	4	4	4	3
入館者数	9,294	14,714	13,906	15,518	13,552	17,301	15,612
目標数	12,000	11,000	11,000	11,500	11,000	13,500	11,500

所蔵作品展(常設展)、企画展、自主企画展等により、それぞれ実施目的、期待する成果、学術的意義は異なるが、各館の研究員の研究結果の反映としての位置づけ(実績報告書 P21～25に各館における調査研究成果の美術館活動(展覧会の開催)への反映を参照)という点では、共通している。実施目的、期待する成果については、年度計画において明確にされており、それに基づいて実施した。

企画展等を開催する場合、専門家や作品貸出館の担当キュレーター等から協力を得た。主な例として、東京国立近代美術館フィルムセンターの上映会「EU フィルムデーズ 2012」では、駐日欧州連合代表部及び EU 加盟国各大使館・文化機関と協議し、近年の EU 加盟各国の映画動向や作品の評価を踏まえながら作品選定を行った。国立西洋美術館の「ラファエロ」展では、フィレンツェ文化財・美術館監督局との共同研究及び共同主催により、展覧会及び講演会を開催した。国立新美術館の「セザンヌ—パリとプロヴァンス」展は、企画と運営において協力を得たパリ市立プティ・パレ美術館及び複数の重要な作品貸出館であるオルセー美術館との緊密な連携の下に実現した。

また、展覧会毎に、入館者に対するアンケート調査を実施し、その意見の中から改善可能なものについては、以降の展覧会における観覧環境の改善等に反映するように取り組んだ。展覧会情報については、インターネットから情報を得ているというアンケートの回答を踏まえ、特設サイトを設置することやソーシャルネットワークサービス(SNS)を活用することなどにより、幅広い情報発信に取り組んだ。

5館の横断的・総合的事業プロジェクトとして、平成 22 年度に初めての合同企画展「陰影礼讃—国立美術館のコレクションによる—」を開催し好評を得た。平成 24 年度は、「記憶と想起—コレクションとリコレクション(仮称)」を企画案として採択し、担当者を決定した。平成 27 年度の開催に向けて、平成 25 年度においても準備を進める予定である。

展覧会開催の実施目的、期待する成果等については、年度計画に明確に位置付けており、展覧会開催の都度、担当研究員等の学術的協力を得て実施されている。

また、展覧会毎にアンケート調査を実施し、その意見の中から改善可能なものについては、以降の展覧会における観覧環境の改善等に反映するように取り組み、特に、アンケート結果から、展覧会情報についてはインターネットから情報を得ているという多数の意見を踏まえ、ホームページに特設サイトを設けるなど、広報面で活用したことは、評価できる。

企画案「記憶と想起—コレクションとリコレクション(仮称)」と担当者が決定し、平成27年度の開催に向けて準備が進められおり、今後の活動が期待される。

(地方巡回展)

○ 公私立美術館等のニーズ等を十分踏まえ、国立美術館が所蔵する美術作品及びそれに関する調査研究の成果を活用して、地方巡回展を積極的に開催したか。また、あわせて当該地方巡回展に関連する講演会又はシンポジウムを開催することにより、ナショナルセンターとして地域における鑑賞機会の充実と美術の普及に寄与したか。

このほか、公立文化施設等と連携協力して、所蔵映画フィルムによる優秀映画鑑賞会を実施したか。

(地方巡回展)

国立美術館コレクションの調査研究成果を反映し、公私立美術館のニーズ等を十分に踏まえ、当該コレクションの地方における鑑賞機会の充実と美術の普及を図るため、これまで道府県の教育委員会等、全国の美術館と連携して「国立美術館巡回展」を実施しているが、同展を開催したことのない美術館も含め、より一層、多くの美術館に応募してもらえるよう、各年度の担当館(出品概要)を募集要項に提示するなど、公募方法を見直した。

【巡回展】

企画館	展覧会名	開催館	開催日数	入館者数
国立西洋美術館	平成24年度国立美術館巡回展 国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術	井原市立田中美術館	45	9,808
		島根県立石見美術館	47	11,459
東京国立近代美術館(工芸館)	東京国立近代美術館コレクション 茶事にまつわる うつわ —陶を中心に— 時計塔 80 年記念 東京国立近代美術館工芸館の名品でみる アール・ヌーヴォーとアール・デコ展—その時代の光—	益子陶芸美術館	54	4,103
		和光ホール(和光本館6階)	11	3,583
計			157	28,953

【巡回展に関連する講演会又はシンポジウム】

セミナー・シンポジウム名	工芸館巡回展ギャラリートーク	開催日	平成24年8月5日
場所	益子陶芸美術館展示室	聴講者数	56人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	唐澤昌宏(東京国立近代美術館工芸課長)		
内容	工芸館巡回展に伴うギャラリートーク。当館所蔵作品の中から選び抜いて構成した「茶事にまつわる『うつわ』」展について、企画意図や出品作品を紹介した。		
セミナー・シンポジウム名	平成24年度国立美術館巡回展「国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」ギャラリートーク	開催日	平成24年10月5日
場所	井原市立田中美術館	聴講者数	40人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	村上博哉(国立西洋美術館学芸課長)		
内容	国立美術館巡回展の岡山展に伴うギャラリートーク。所蔵作品により19世紀から20世紀中葉にかけてのヨーロッパ近代美術の流れを紹介した「国立美術館巡回		

地方巡回展、巡回上映については、入館者数が増加しており、評価できる。

地方巡回展の開催意義は大きいことから、今後も公私立美術館とのより一層の連携・協力による事業の充実が期待される。

	展 国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」展について、企画意図や出品作品を紹介した。		
セミナー・シンポジウム名	平成 24 年度国立美術館巡回展「国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」講演会	開催日	平成 24 年 11 月 10 日
場所	井原市立田中美術館	聴講者数	47 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	陳岡めぐみ(国立西洋美術館学芸課主任研究員)		
内容	国立美術館巡回展の岡山展に伴う講演会。所蔵作品により 19 世紀から 20 世紀中葉にかけてのヨーロッパ近代美術の流れを紹介した「国立美術館巡回展 国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」展について、企画意図や出品作品を紹介した。		
セミナー・シンポジウム名	平成 24 年度国立美術館巡回展「国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」ギャラリートーク	開催日	平成 24 年 12 月 22 日
場所	島根県立石見美術館	聴講者数	30 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	新藤淳(国立西洋美術館学芸課研究員)		
内容	国立美術館巡回展の島根展に伴うギャラリートーク。所蔵作品により 19 世紀から 20 世紀中葉にかけてのヨーロッパ近代美術の流れを紹介した「国立美術館巡回展 国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」展について、企画意図や出品作品を紹介した。		
セミナー・シンポジウム名	平成 24 年度国立美術館巡回展「国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」講演会	開催日	平成 25 年 1 月 13 日
場所	島根県立石見美術館	聴講者数	56 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	村上博哉(国立西洋美術館学芸課長)		
内容	国立美術館巡回展の島根展に伴う講演会。松方コレクションを中心とした近代美術コレクションの形成の歴史や、「国立美術館巡回展 国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」展の企画意図及び出品作品を紹介した。		

【巡回上映】

企画館	タイトル	会場数	開催日数	入館者数
東京国立近代美術館(フィルムセンター)	①平成 24 年度優秀映画鑑賞推進事業	189	357	79,354
	②日本が声を上げる！ 陽が昇る地から来た最初のトーキー映画	1	7	915
	③「喜劇映画の異端児—渋谷実監督特集」巡回事業	2	13	1,093
	④第 5 回中之島映像劇場 浪花の映像【キネマ】の物語	1	2	357

	—東京国立近代美術館フィルムセンター —所蔵作品から—			
	⑤ NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films@home 2012	1	10	575
	⑥日本の映画ポスター芸術	1	48	35,624
計		195	437	117,918

【巡回展 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
事業数	4	7	2	3	4	2	3
会場数	8	7	4	4	5	3	4
開催日数	332	250	168	127	200	141	157
入館者数	109,643	73,792	29,160	26,819	30,667	9,077	28,953

【巡回上映 過去の実績】(東京国立近代美術館フィルムセンター)

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
事業数	1	1	4	6	5	8	6
会場数	179	189	205	205	201	199	195
開催日数	418	352	399	450	473	428	437
入館者数	94,684	93,525	122,059	105,082	100,001	96,621	117,918

(入館者)

○ 入館者数については、展覧会ごとに実施目的、想定する入館者層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境の確保、広報活動、過去の入館者等の状況等を踏まえて、国立美術館としてふさわしい入館者数の目標を設定し、その達成に取り組んだか。

(入館者)

各展覧会の目標入館者数については、年度計画において、近年の同種の展覧会の実績や、共催者の広報活動、作家の特性、作品の内容等にかんがみて算出した。

展覧会開催中は、定期的に入館者数を調査、確認し、一日平均入館者数が、目標値に達していない場合は、大学等へのチラシの追加配布やメールマガジンの配信、特設サイトのコンテンツの充実、また、共催者がある場合は、共催者の協力により新聞広告などを追加で行うなど、さらなる広報活動を検討し、工夫した。

入館者数は、適切な水準の設定であり、またその達成に取り組んだことは評価できる。

<p>(フィルムセンター)</p> <p>○ 映画フィルム・資料の所蔵作品を活用した上映、展示等の活動に積極的に取り組んだか。</p>	<p>(フィルムセンター)</p> <p>フィルムセンターでの上映会のほか、巡回上映等において、今後もより映画作品が活用されるように取り組みたい。</p> <p>継続して取り組んでいる「優秀映画鑑賞推進事業」では、189 の会場で、普段目にする事ができない貴重な作品の上映会を 357 日間開催し、入館者数は約 8 万人となった。京都国立近代美術館での「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films@home」及び国立国際美術館での「中之島映像劇場」は、関西におけるフィルムセンター所蔵作品の定期的な上映拠点ともなっている。</p> <p>また、継続して収集している監督作品や、アニメーション映画、上映企画に合わせて購入した作品、寄贈作品等を積極的に上映した。パンフレット、ポスターなどの貴重な映画関連資料も上映会との連動を考慮して積極的に展示した。</p> <p>近年の映画フィルムのデジタル化や 35mm 映写機が将来的にますます使用できなくなる状況において、我が国の美術館のナショナルセンターとして、フィルムセンター所蔵の映画フィルム上映及び展覧会の開催に積極的に取り組んだ。</p>	<p>継続して収集している監督作品や、アニメーション映画、上映企画に合わせて購入した作品、寄贈作品等を積極的に上映し、パンフレット、ポスターなどの貴重な映画関連資料も上映会との連動を考慮して積極的に展示したことは評価できる。</p> <p>上映会入館者数が目標を下回ったことに関しては、映画上映という鑑賞形態のために展覧会と比べて入館者数の規模が限られ、マスコミ等の協賛を得にくい広報上の課題とされてきた事情も一因として考えられる。</p> <p>今後は SNS の積極的な活用など、コストを抑えつつ有効な広報活動を展開する方途をさらに検討する必要がある。</p>
---	---	--

【(小項目)1-1-2】	国立新美術館等の取組	【評定】																																
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(2)美術創造活動の活性化の推進</p> <p>国立新美術館は、全国的な活動を行っている美術団体等に展覧会会場の提供を行うとともに、新しい美術の動向を紹介することなどを通じて、美術に関する新たな創造活動の展開や芸術家の育成等を支援し、我が国の美術創造活動の活性化に資する。</p> <p>また、メディアアート、アニメ、建築など世界から注目される新しい芸術表現の国内外に向けた拠点的な役割を果たすことを目指し、その取組みを積極的に進める。</p>		A																																
<p>【インプット指標】</p> <table border="1" data-bbox="120 695 1397 868"> <thead> <tr> <th>(中期目標期間)</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H21</th> <th>H22</th> <th>H23</th> <th>H24</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td>2,366</td> <td>2,157</td> <td>2,050</td> <td>2,092</td> <td>1,934</td> <td>1,896</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>9</td> <td>8</td> <td>8</td> <td>8</td> <td>8</td> <td>7</td> </tr> </tbody> </table> <p>1)決算額は、セグメント情報 国立新美術館経常費用を計上している。</p> <p>2)従事人員数は、国立新美術館のすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>		(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24	決算額(百万円)	2,366	2,157	2,050	2,092	1,934	1,896	従事人員数(人)	9	8	8	8	8	7	<table border="1" data-bbox="1599 277 2190 363"> <thead> <tr> <th>H23</th> <th>H25</th> <th>H26</th> <th>H27</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>A</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>実績報告書等 参照箇所</p> <p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P9~12</p> <p>(2)美術創造活動の活性化の推進</p> <p>① 公募団体等への展覧会会場の提供(国立新美術館)</p> <p>②新しい芸術表現への取組み</p>				H23	H25	H26	H27	A			
(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24																												
決算額(百万円)	2,366	2,157	2,050	2,092	1,934	1,896																												
従事人員数(人)	9	8	8	8	8	7																												
H23	H25	H26	H27																															
A																																		
<p><b>評価基準</b></p> <p>○ 全国的な活動を行っている美術団体等に展覧会会場の提供を行うとともに、新しい美術の動向を紹介することなどを通じて、美術に関する新たな創造活動の展開や芸術家の育成等を支援し、我が国の美術創造活動の活性化に寄与したか。</p> <p>また、メディアアート、アニメ、建築など世界から注目される新しい芸術表現の国内外に向けた拠点的な役割を果たすことを目指し、その取組みを積極的に進めたか。</p>	<p><b>実績</b></p> <p>① 公募団体等への展覧会会場の提供(国立新美術館)</p> <p>公募展団体数:69 団体</p> <p>年間利用室数:延べ 3,500 室/年</p> <p>稼働率:100%</p> <p>入館者数:1,259,966 人</p> <p>【公募団体への展覧会会場の提供(国立新美術館)過去の実績】</p> <table border="1" data-bbox="667 1278 1684 1457"> <thead> <tr> <th></th> <th>H18</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H21</th> <th>H22</th> <th>H23</th> <th>H24</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>利用団体数</td> <td></td> <td>69 団体</td> <td>69 団体</td> <td>69 団体</td> <td>69 団体</td> <td>69 団体</td> <td>69 団体</td> </tr> <tr> <td>入館者数</td> <td></td> <td>1,317,508</td> <td>1,309,747</td> <td>1,246,840</td> <td>1,266,989</td> <td>1,253,764</td> <td>1,259,966</td> </tr> </tbody> </table>				H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	利用団体数		69 団体	69 団体	69 団体	69 団体	69 団体	69 団体	入館者数		1,317,508	1,309,747	1,246,840	1,266,989	1,253,764	1,259,966	<p><b>分析・評価</b></p> <p>各館における新しい芸術表現への取組については、入館者数が目標入館者数を下回る事例もあるが、国立新美術館における平成 24 年度[第 16 回]文化庁メディア芸術祭」のような基本的活動の充実や、様々な企画展内にビデオや動画像の資料・作品を展示する場面が増えるなど、新しい芸術表現への取組は着実に成果を収めたと評価する。</p> <p>東京国立近代美術館フィルムセンターが、第 68 回国際フィルム・アーカイブ連盟北京会議において開催されたシン</p>						
	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24																											
利用団体数		69 団体	69 団体	69 団体	69 団体	69 団体	69 団体																											
入館者数		1,317,508	1,309,747	1,246,840	1,266,989	1,253,764	1,259,966																											

- 1 公募団体等から寄せられた意見・要望も参考としつつ、公募展の効率的な開催準備と円滑な運営を図るため、以下のような取組を行った。
  - ・作品搬入出時の車両の入退館時間の指定や駐車場の割振りを団体ごとに実施
  - ・作品用エレベータの使用時間割振りや使用備品の事前配置等の徹底
  - ・審査、展示等に必要な備品の充実
  - ・展示作品の素材や陳列方法等について、施設の管理運営上問題の生じる可能性のある公募団体等との事前協議の徹底
  - ・公募展運営サポートセンターにおいて、使用公募団体等に関する電話(国立新美術館公募展案内ダイヤル)への問い合わせ対応の実施
  - ・公募展のポスター掲示や公募展開催案内チラシの作成及び配布による広報の実施
  - ・館ホームページの公募展紹介ページに、文字情報に加えポスター等の画像情報を掲載することにより広報を充実
  - ・国立新美術館ニュースへ公募団体からの寄稿を掲載することにより、広報の支援を実施
  - ・公募展と企画展の観覧料の相互割引について、実施団体の情報を館内で周知
- 2 公募団体等が行う教育普及活動  
館を使用する公募団体等が実施する教育普及活動に対し、講堂及び研修室の提供や運営管理上必要な助言、参加者の動線の確保等のサポートを行った。また、館ホームページへ情報を掲載し普及・広報の支援を実施した。
- 3 平成 26 年度に展示室(公募展用)を使用する 69 団体(野外展示場のみ使用団体を含む。)を決定した。

②新しい芸術表現への取組み

【東京国立近代美術館本館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
平成 24 年度第 1 回所蔵作品展「近代日本の美術」	33	ビデオ・アート	36,337	—	—
「美術にふるっ！ベストセレクション日本近代美術の 100 年」第 1 部	76	ビデオ・アート(コミッション・ワーク(注文制作)を含む)	101,647	100,000	NHK , NHK プロモーション
平成 24 年度第 2 回所蔵作品展「MOMATコレクション」	59		27,516	—	—
フランス・ベーコン展	22	ビデオ・アート	28,552	45,000	日本経済新聞社

※なお、所蔵品ギャラリーのリニューアル工事に際しての夏期休館中、建築事務所スタジオ・ムンバイに

ポジウム「世界のアニメーション」に参加し、基調講演や報告、及び日本の初期アニメーション作品の上映を通じて、近年注目される日本のアニメーション映画について歴史的な理解を深めた意義は高く評価できる。

よる日本初の建築プロジェクトである「夏の家」、「パフォーマンス」をテーマにプログラムを組んだ連続14日間のイベント「14のタベ」を開催した。

#### 【東京国立近代美術館フィルムセンター】

平成24年4月23日から28日まで中国電影資料館で行われた第68回国際フィルム・アーカイブ連盟北京会議で開催されたシンポジウム「世界のアニメーション」において、フィルムセンター主幹及び研究員がそれぞれ基調講演と講演を行った。あわせて、このシンポジウムに連動した上映会「珍宝級世界動画電影展映」では、『動絵狐狸達引』(1933年)など日本の初期トーキー・アニメーション映画6作品、大藤信郎監督と関連作品7作品に加え、平成23年度にデジタル復元を行った政岡憲三監督『くもとちゅうりっぷ』(1943年)デジタル復元版のプレミア上映を行い、アニメの原点と言える初期アニメーション映画の豊かな創造性と卓抜な技術を、世界各国から参加した多くのアーキビストに紹介した。

海外における日本の初期アニメーション映画については、シネマテーク・ド・グルノーブル(FIAF加盟機関)が主催した第35回グルノーブル野外短篇映画祭に6本、スウェーデン映画協会(FIAF加盟機関)が国内3会場で主催した日本のアニメーション映画特集に6本を貸与し紹介に努めた。

#### 【京都国立近代美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
すべての僕が沸騰する —村山知義の宇宙—	33	アニメーション	10,086	10,000	読売新聞社、 美術館連絡協議会

・我が国映画史上における最初のアニメーション作品としても貴重な村山知義の「三匹の小熊さん」(1931年)を、同展会期中に展覧会場で上映した。

#### 【国立西洋美術館】

・国立西洋美術館本館の世界遺産登録について

平成23年6月にパリのユネスコ本部で開催された第35回世界遺産委員会において、国立西洋美術館を含む「ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献」の推薦案件が「記載延期」と決定されて以降、平成27年2月の改訂推薦書の提出を目指して登録推進事業を継続している。

国立西洋美術館本館は、戦後日本の建築に大きな影響を与えた世界的建築家ル・コルビュジエの作品として国の重要文化財に指定され、同時に世界遺産にも推薦されていることから、建物の「保存管理(活用)計画」がそれぞれにおいて求められている。そのため、外部有識者を含めた国立西洋美術館修理検討委員会を開催し、さらに文化財保存計画協会の協力も得て、平成25年8月の完成を目指し同計画の策定作業を開始した。



また、世界遺産登録においては地元からの支持も重要な要素であるため、地元台東区と協力し様々な形で館の広報活動を行う一方、イコモス関係者やル・コルビュジエ財団関係者との専門家会議等に、ル・コルビュジエ研究者である客員研究員を7回にわたり派遣し、世界遺産登録に係る国際情勢の情報収集を行った。

【国立国際美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
夢か、現か、幻か	56	映像及び写真表現	12,473	15,000	—

・欧米では「time-based media」とされる映像、インスタレーションやパフォーマンスなどの新しい表現様式による作品を収蔵作品としていかに受け入れ、それを管理、保存、修復するかをテーマに調査研究を進め、当該分野では先進国である英国やドイツなど各国の美術館や関係機関などとの連携を進めている。

【国立新美術館】

展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
「具体」—ニッポンの前衛 18年の軌跡—	60	映像、パフォーマンス	26,700	27,000	—
平成24年度[第16回]文化庁メディア芸術祭	11	ビデオ・アート、インタラクティブ・アート、アニメーション、マンガ、ゲーム等	51,819	45,000	文化庁メディア芸術祭実行委員会(文化庁、国立新美術館)
カリフォルニア・デザイン 1930-1965—モダン・リビングの起源—	11	建築、デザイン、映像	15,670	6,000	ロザンゼルス・カウンティ美術館

・アニメーション表現などの新しい視覚表現を紹介するための試みとして、(A)「インターカレッジアニメーションフェスティバル(ICAF)2012」への特別協力を行い、(B)「TOKYO ANIMA!2012 秋」及び「TOKYO ANIMA!2013 春」への共催を実施した。(A)のICAF2012では国内の大学など21機関の学生によるアニメーション作品に加え、韓国とヨーロッパの映像作品を4日間にわたり講堂と研修室ABにて上映し、日本のアニメーション表現のこれからの可能性を紹介する機会となった。4日間の会期中、来場者は808名であった。(B)の「TOKYO ANIMA! 2012 秋」は、約30名の若手映像作家の近作・新作を中心に2日間にわたり上映し、延べ1,301名の来場者があった。

平成25年3月に開催されたアートイベント「六本木アートナイト 2013」に参画し、「TOKYO

	ANIMA!2013 春」を開催し、延べ 686 名の来場者があった。	
--	-------------------------------------	--

【(小項目)1-1-3】	情報の発信	【評定】 <b>B</b>			
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(3)美術に関する情報の拠点としての機能の向上</p> <p>国立美術館として美術に関する情報の拠点としての機能を向上させるため、国立美術館及び各館のホームページの充実のほか、所蔵作品に関する情報や展覧会活動、その他の活動状況を、情報通信技術を活用して積極的に広く社会に紹介し、国立美術館についての理解を得るよう取り組む。</p> <p>また、国内外の美術に関する情報の収集・提供・利用の促進に取り組むとともに、国立美術館が保有する所蔵作品情報等について、関係機関と連携協力し、検索できる環境を構築する。</p> <p>① ICT(情報通信技術)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等の積極的な情報発信やホームページの充実を図り、ホームページのアクセス件数の年間の平均が、前中期目標期間の年間平均を上回る実績となるよう取り組む。</p> <p>②-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料、国内外の美術館や展覧会に関する情報及び資料を収集し、展覧会活動の推進に役立てるとともに、図書室等において芸術文化に関する情報サービスを広く提供し、その利用者数が前中期目標期間の年間平均(新規開館により利用者が著しく増加した年度の実績を除く)を上回るよう取り組む。</p> <p>②-2 所蔵作品データ、所蔵資料データのデジタル化を一層推進し、ネットワークを通じてより良質で多様なコンテンツの提供を進める。特に、各館におけるナショナルコレクションを広く周知するため、所蔵作品総合検索システムの充実を図ることとし、各年度末における掲載作品数(全所蔵作品数に占める掲載件数)の割合が、前中期目標期間の年間平均を上回るよう取り組む。</p> <p>②-3 国立美術館全体の機能として、ネットワーク共有を前提とするIDC(インフォメーションデータセンター)を確立し、美術館における情報技術の活用策を積極的に開発しながら、その知見を広く共有化することに取り組む。</p>		<p>実績報告書等 参照箇所</p> <p>&lt;実績報告書&gt; P12~16</p> <p>(3)美術に関する情報の拠点としての機能の向上</p> <p>①情報通信技術(ICT)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等</p> <p>②美術情報の収集、記録の作成・蓄積、デジタル化、レファレンス機能の充実</p>			

【インプット指標】

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	788	1,153	1,156	1,288	1,229	1,127
従事人員数(人)	61	59	59	57	57	54

1) 決算額は損益計算書 教育普及事業費を計上している。(本項目は教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、教育普及事業費全額を計上している。)

2) 従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価									
<p>○ 国立美術館に関する情報を広く社会に紹介し、国立美術館についての理解を得るよう、以下のことに取り組んだか。</p> <p>また、国内外の美術に関する情報の収集・提供・利用の促進に取り組むとともに、国立美術館が保有する所蔵作品情報等に</p>	<p>① 情報通信技術(ICT)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等</p> <p>ア ホームページアクセス件数</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>アクセス件数 (ページビュー)</th> <th>目標数 (第2期平均)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>本部</td> <td>11,580,546</td> <td>9,076,555</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館</td> <td>13,678,742</td> <td>10,500,075</td> </tr> </tbody> </table>	館名	アクセス件数 (ページビュー)	目標数 (第2期平均)	本部	11,580,546	9,076,555	東京国立近代美術館	13,678,742	10,500,075	<p>ホームページのアクセス件数は、目標数を大きく上回っており、展覧会情報や調査研究成果などの公表も積極的に実施されており、評価できる。また、新たな取組として、新しい情報サービス</p>
館名	アクセス件数 (ページビュー)	目標数 (第2期平均)									
本部	11,580,546	9,076,555									
東京国立近代美術館	13,678,742	10,500,075									

ついて、関係機関と連携協力し、検索できる環境を構築したか。

- ・ICT(情報通信技術)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等の積極的な情報発信やホームページの充実を図り、ホームページのアクセス件数の年間の平均が、前中期目標期間の年間平均を上回る実績となるよう取り組んだか。

(本館・工芸館・フィルムセンター含む)		
京都国立近代美術館	2,199,673	2,244,585
国立西洋美術館	11,243,430	6,313,881
国立国際美術館	2,864,365	2,266,576
国立新美術館	10,403,992	9,372,754
計	<b>51,970,748</b>	<b>39,774,426</b>

【数値目標の達成状況】

- ・ホームページアクセス件数(ページビュー)  
実績 51,970,748 件  
目標 39,774,426 件  
目標達成率 130.7%

【ホームページアクセス件数 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
アクセス件数 合計	18,032,849	34,067,757	47,268,386	50,292,663	49,210,479	46,207,321	51,970,748
目標数	5,724,279(第1期平均)					39,774,426	

※目標数は前中期目標期間のアクセス件数の平均とする。

イ 各館のICT活用の特徴

(ア)本部

平成20年度にリニューアルした法人ホームページにおいては、引き続き国立美術館5館の開催展覧会及び各種催事等トピックスの一覧を維持した。

「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」については、平成23度より「指導者研修Web報告」のページを充実させて、平成24年度も継続してその記録を公開した。

(イ)東京国立近代美術館

平成19年度より稼働のコンテンツ・マネジメント・システム(CMS)を用いて、ホームページ・コンテンツの追加更新を迅速化し、平成24年度は特に「60周年記念サイト」を設けてポスター・アーカイブも公開するなどして、記念事業の広報に努めた。

独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムに新収蔵作品の文字画像データを追加するとともに、同システムへの著作権のある作品画像掲載を進めるため、許諾を得た水彩・素描その他の作品237点について画像を新規登録した。

また、平成24年度から新たに工芸についての著作権者情報を整備するとともに、初年度として

への参加とも評価できる。

美術情報等の基礎資料の収集、デジタル化等については、各館とも着実に進捗しており、今後はこれらの積極的な公開と5美術館の連携を一層進めてもらいたい。

また、フィルムセンターにおいては、フィルム以外の映画関連資料についてテキストデータのデジタル化が進捗しているが、これらのデータを速やかに公開することが望まれる。

さらに、国立美術館5館全体における情報ネットワークも進展している。今後は、研究紀要などの積極的な公開とともに、情報ネットワークや機関リポジトリを活用したより一層充実した情報発信の取組が望まれる。

図書室利用者数については、目標値を下回っており、これは、国立新美術館の新規開設時での利用者の著しい増加が目標値を高く押し上げていることに起因するとしても、一方で情報化時代の図書室の在り方については多様な観点から利用者の期待をよく検討すべきである。

陶磁の著作権許諾申請手続を開始した。

平成 23 年度に着手した東京国立近代美術館所蔵作品管理システム並びに独立行政法人国立美術館総合目録のデータ登録更新とインターフェースの改良を、他の国立美術館各館と連携して実装させた。

平成 23 年度に欧米主要美術図書館横断検索システムである artlibraries.net ([http://artlibraries.net/index\\_en.php](http://artlibraries.net/index_en.php))と国立美術館の図書検索システム(東京国立近代美術館及び国立西洋美術館)の連携可能性について、国立情報学研究所と連携して始めた受託研究の成果により、artlibraries.net への参加を実現させた。

フィルムセンターでは、事業関連の情報を提供する「NFC メールマガジン」の登録者が着実に増加している。NFGD(フィルムセンターデータベース)については、人物情報の統合を進めるとともに、フィルムの運用管理機能、資料整理の深化及びプレス資料(プレスシート、試写状他)をカテゴリーに加えるという重要な改造を行った。

さらに、映画関連資料へのアクセス希望に対しては、図版提供を速やかに行うため、また、識別を容易にするため、適宜デジタル・データへのスキャンや簡易撮影を行い、共有ファイル内に蓄積を進めている。

#### (ウ)京都国立近代美術館

展覧会の内容や案内に関する情報、講演会及び教育普及関連のイベント案内、さらには「友の会」の行事報告に加え、コレクション・ギャラリー(所蔵作品展示)の展示替えごとに出品リストや小企画などのテーマ展示についても解説と出品リストをホームページに掲載し、情報発信に努めた。

また、「開館 50 周年記念特別展」の開催に際しては、展覧会広報の一助として、ホームページ上に、当館独自の展覧会として初めて「特設サイト」を開設した。

さらに、美術館ニュースや研究論集についても、掲載内容をホームページ上に告知した。

#### (エ)国立西洋美術館

収蔵作品情報管理システムに作品関連文書を管理する機能を新たに付加し、作品に関する多様な情報資源を蓄積・公開する基盤を強化した。また、平成 23 年度に引き続き科学研究費補助金を受け、収蔵作品データの充実に努め、平成 24 年度は署名・年記情報の充実に重点的に取り組んだ。ホームページ上に公開している所蔵作品データベース(「作品検索」)を時代の変化に即して改良し、スマートフォン及びタブレット等 Flash 非対応端末の表示不良等の問題解決を図った。さらに、本データベースが平成 25 年度開講の放送大学『博物館情報・メディア論』でデジタル・アーカイブ活用モデルとして取り上げられることとなり、取材に全面的に協力した。

収蔵品情報以外では、従来から要請の多かった松方コレクション関連情報の公開に関連し、その第一段階として科学研究費補助金の助成を受けて、大正から昭和期の松方コレクション展に関する調査を行い、その成果をホームページ上で公開する準備を進めた。このほか急速に拡大しつつあるソーシャル・メディアへの取組として、公式 facebook ページを開設した。「Google アートプロジェクト」への参画も果たし、所蔵品 164 点を同サイトにて公開した。

・美術史その他の関連諸学に関する基礎資料、国内外の美術館や展覧会に関する情報及び資料を収集し、展覧会活動の推進に役立てるとともに、図書室等において芸術文化に関する情報サービスを広く提供し、その利用者数が前中期目標期間の年間平均(新規開館により利用者が著しく増加した年度の実績を除く)を上回るよう取り組んだか。

(オ)国立国際美術館

平成 24 年度は、平成 23 年度に実施したホームページのリニューアルにより充実を図った展覧会情報、関連イベント情報、施設利用案内について、さらなる充実に努めた。

また、引き続き、展覧会ごとに英語版ホームページを作成し、海外への情報発信、外国人来館者への情報提供に努めた。

(カ)国立新美術館

展覧会情報検索サービス「アートコモンズ」において、引き続き日本国内の美術館、画廊、美術団体が開催する展覧会の情報を収集し、検索可能とすることに努めた。平成 24 年度においては 4,067 件の展覧会情報を 1,170 の美術館・美術団体・画廊の協力により収集・公開した。

また、ホームページを通じて、「活動報告」の公開を含め、当館の活動を紹介するとともに、これまでのメールマガジンの発行に加え、ソーシャルネットワークサービス(SNS)の活用により、昨今のインターネットの利用形態の変化に対応した幅広い情報発信の道筋について実践的に試行・検証した。

② 美術情報の収集、記録の作成・蓄積、デジタル化、レファレンス機能の充実

ア 図書資料等の収集

館名		収集件数	累計件数	利用者数	目標利用者数 (第2期平均)
東京国立 近代美術 館	本館	5,309	124,367	2,113	2,921
	工芸館	887	22,888	251	356
	フィルムセンター	3,195	39,374	3,731	3,273
京都国立近代美術館		1,472	22,453	—	—
国立西洋美術館		1,006	46,231	396	399
国立国際美術館		612	36,979	—	—
国立新美術館		7,013	126,311	21,917	44,365※
計		19,494	418,603	28,408	51,314※

注 東京国立近代美術館は本館 4 階、京都国立近代美術館は 4 階、国立西洋美術館は 1 階、国立国際美術館は地下 1 階に図録等が閲覧できる情報コーナーを設け、入館者が自由に閲覧できるようにしており、その場所については、利用者数の把握はしていない。

※ 新規開館により利用者が著しく増加した年度(平成 18 年度及び平成 19 年度)の実績を除く

【数値目標の達成状況】

・図書室利用者数  
実績 28,408 人

目標 51,314 人  
目標達成率 55.4%

※目標未達成の原因・理由

目標未達成の要因として、主に国立新美術館の利用者数が挙げられる。新規開館当初に利用者数が著しく増加した年度(平成 18 年度及び平成 19 年度)以降も、アートルibraryという新規施設の見学を目的とした利用者が多く見られた。近年は調査・研究目的に所蔵資料の閲覧等や複写を行う利用者が定着してきており、利用者数に落ち着きが見られる。

イ 特記事項

(ア)東京国立近代美術館

本館では、平成 18 年度開催の藤田嗣治展の後、19 年度に寄贈された藤田家旧蔵書は平成 22 年度に登録を完了し、検索公開をしているが、その中から 52 点が平成 24 年度開催の「藤田嗣治と愛書都市パリ」展(渋谷区立松濤美術館、北海道立近代美術館巡回、2012 年 7-11 月)に出品された。

60 周年事業の一環である 60 年史のデータ集成及び編集作業を進めて、ミュージアム・アーカイブの整備を合わせて進め、その成果として『東京国立近代美術館 60 年史』を刊行した。あわせて、美術出版社より『美術家たち証言—東京国立近代美術館ニュース『現代の眼』選集』を出版した。

工芸館では、比較的高額な資料の購入があったことにより収集件数は減少したが、内容の一層の充実を図ることができた。

フィルムセンターでは、一定の網羅性を目指して、映画関連の新刊書と雑誌の収集を行うとともに、未所蔵の古書や一般の書籍流通ルートには乗らない刊行物の収集にも努めている。

公開への準備としては、今後のデータベース登録を見越して図書室内の映画雑誌、外国映画祭カタログのリスト化を進めている。映画パンフレットについては OPAC データベースへの登録が進み、当初公開された分の外国映画パンフレットの登録がほぼ終了している。

(イ)京都国立近代美術館

平成 24 年度が、研究の最終年となる科学研究補助金(当館学芸課長が研究代表者となり、4 か年にわたる研究)によって、平成 25 年度開催予定の展覧会に関係する書籍を購入するとともに、研究分担者として外部の研究者と連携して研究を進めている科研費によっても、図書を収集している。

(ウ)国立西洋美術館

欧米の主要美術図書館が構築している国際的な図書館横断検索システム(「artlibraries.net」)への参画を企図し、東京国立近代美術館とともに国立情報学研究所との共同研究に従事した。美術史その他関連諸学に関する資料の収集の一環として、雑誌文献データベースである「Art

Source」を試験的に契約し、レファレンス・サービスの向上を図った。次年度以降、本格的に運用する予定である。このほか研究資料センターの利用者サービス向上のため、電子メールでの予約受付を開始した。

図書資料以外では、展覧会の写真アルバムや関連文書等、国立西洋美術館の事業に関する各種記録の整理に着手し、その成果を『国立西洋美術館名作選』収録の年表に結実させた。

(エ) 国立国際美術館

国内外の現代美術に関連する図書資料等を中心に収集を継続した。特に、企画展や所蔵作家関連の文献に加え、国際展に関する文献なども積極的に収集を行った。(購入:156冊, 寄贈:456冊)

(オ) 国立新美術館

引き続き日本の展覧会カタログを中心に網羅的、遡及的収集に努め、国内約400、国外約100の美術館・博物館と展覧会カタログの相互寄贈関係を構築した。平成23年度までに寄贈された複数の個人からの大口寄贈資料についての整理作業を進め、一部を平成25年度に公開できる状況となった。所蔵資料の増加への対応のため、別館書庫内の書架増設を行うとともに、別館1階アートライブラリー別館閲覧室の開室準備を行った。アートライブラリー別館閲覧室は平成25年度に開室予定であり、これまで予約制だった所蔵資料が当日出納(脆弱な資料等一部を除く)できるようになり、資料提供サービスの向上が実現される予定である。

【図書資料等の収集 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
収集体数	64,243	25,649	25,955	25,495	21,812	23,848	19,494
累計件数	280,299	354,901	379,896	353,351	375,120	398,972	418,603
利用者数合計	52,189	123,700	66,453	45,442	42,044	29,186	28,408

- 所蔵作品データ、所蔵資料データのデジタル化を一層推進し、ネットワークを通じてより良質で多様なコンテンツの提供を進める。特に、各館におけるナショナルコレクションを広く周知するため、所蔵作品総合検索システムの充実を図ることとし、各年度末における掲載作品数(全所蔵作品数に占める掲載件数)の割合が、前中期目標期間の年間平均を上回るよう取り組んだか。

ウ 所蔵作品データ等のデジタル化

館名	画像データ				テキストデータ				
	デジタル化件数	デジタル化累計	累積公開件数(公開率)	目標公開率(第2期平均)	デジタル化件数	デジタル化累計	累積公開件数(公開率)	目標公開率(第2期平均)	
東京国立近代美術館	本館	250	10,559	6,927 (56.1%)	33.0%	162	11,032	10,433 (84.5%)	97.3%
	工芸館	1,108	4,037	425 (12.9%)	5.5%	448	4,353	3,155 (96.0%)	99.5%



フィルムセンター (映画関連資料)	—	—	—	—	33,248	150,758	—	—
京都国立近代美術館	76	7,465	2,028 (17.8%)	11.4%	2,769	13,201	11,895 (104.3%)	85.8%
国立西洋美術館	309	5,627	203 (3.7%)	4.4%	117	4,967	4,599 (83.3%)	94.7%
国立国際美術館	335	6,762	3,629 (51.7%)	19.0%	182	7,691	6,794 (96.8%)	97.6%
計	<b>2,078</b>	<b>34,450</b>	<b>13,212 (33.4%)</b>	<b>17.8%</b>	<b>36,926</b>	<b>192,002</b>	<b>36,876 (93.2%)</b>	<b>93.9%</b>

注「累計公開件数」は、所蔵作品総合目録における画像及びテキストデータの公開件数である。なお、国立西洋美術館は「国立西洋美術館所蔵作品データベース」で画像データ 4,664 点を公開している。京都国立近代美術館では、複数で一揃いの作品を個別に掲載しているため、テキストデータの公開率が高くなっている。フィルムセンターについては、映画フィルムを除いた映画の関連資料についての件数を掲載している。

【数値目標の達成状況】

・所蔵作品データ等のデジタル化(画像データ)

実績 33.4%

目標 17.8%

目標達成率 187.7%

・所蔵作品データ等のデジタル化(テキストデータ)

実績 93.2%

目標 93.9%

目標達成率 99.3%

※目標未達成の原因・理由(テキストデータ)

目標未達成の主な要因は、東京国立近代美術館(本館)及び国立西洋美術館の累積公開率にあるが、東京国立近代美術館においては『東京国立近代美術館 60 年史』の編纂を契機として、一括資料を個別に換算するなど計数方法等の見直しを行ったことにより母数となる所蔵作品数が増加したことによる。国立西洋美術館においては平成 24 年度に一括寄贈を受けた宝飾品コレクション 800 余点について、平成 25 年度以降の公開に向けて、現在、デジタル化作業を進めている。

【所蔵作品データ等のデジタル化 過去の実績】

(画像データ)

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
デジタル化 件数	6,224	3,423	2,484	859	753	1,311	2,078
デジタル化 累計	24,889	28,279	30,425	31,036	31,464	32,614	34,450
公開件数	2,168	3,205	6,415	7,257	10,491	12,297	13,212

(テキストデータ)

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
デジタル化 件数	7,982	10,078	6,700	10,221	5,820	4,141	36,926
デジタル化 累計	116,799	127,717	134,761	144,983	150,797	154,274	192,002
公開件数	28,355	30,215	30,723	31,666	32,276	33,382	36,876

- ・ 国立美術館全体の機能として、ネットワーク共有を前提とするIDC(インフォメーションデータセンター)を確立し、美術館における情報技術の活用策を積極的に開発しながら、その知見を広く共有化することに取り組んだか。

エ インフォメーションデータセンター(IDC)の確立

国立美術館5館全体においてVPN(暗号化された通信網)を採用し、情報ネットワークの安定かつ高速化を実現するとともに、VPNを用いたグループウェア及びテレビ会議システムを継続して稼働させた。

国立美術館所蔵作品総合目録検索システムは引き続きデータの追加更新を行うとともに、画像掲載の増加を図るため、平成23年度許諾を得た水彩・素描その他の作品929点の画像を掲載するとともに、平成24年度から新たに工芸についての著作権者情報を整備するとともに、初年度として陶磁の著作権許諾申請手続を開始した。

平成23年度に着手した東京国立近代美術館所蔵作品管理システム並びに独立行政法人国立美術館総合目録のデータ登録更新とインターフェースの改良を、国立美術館各館と連携して実装させた。

平成23年度に欧米主要美術図書館横断検索システムである artlibraries.net([http://artlibraries.net/index\\_en.php](http://artlibraries.net/index_en.php))と国立美術館の図書検索システム(東京国立近代美術館及び国立西洋美術館)の連携可能性について、国立情報学研究所と連携して始めた受託研究の成果により、artlibraries.netへの参加を実現させた。

【(小項目)1-1-4】	教育普及活動の実施状況	【評定】			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】		A			
<p>(4)国民の美的感性の育成</p> <p>① 国立美術館における美術教育に関する調査研究の成果を踏まえ、学校や社会教育施設等との連携強化により、子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供し、各館の年間の平均参加者数が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう、それらの参加者数の増加に積極的に取り組む。</p> <p>② ボランティアや支援団体の育成と相互協力による教育普及事業の充実を図る。また、ボランティアの参加人数及び活動日数の増加に積極的に取り組む。</p> <p>③ 映画フィルム・資料の所蔵作品を活用し、児童生徒を対象とした「こども映画館」の開催やジュニアセルフガイドの作成など教育普及活動に積極的に取り組む。</p>		H23	H25	H26	H27
		A			
		実績報告書等 参照箇所			
		<p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P16～21</p> <p>(4)国民の美的感性の育成</p> <p>①幅広い学習機会の提供</p> <p>②ボランティアや支援団体の育成等による教育普及事業</p> <p>③映画フィルム・資料を活用した教育普及活動</p>			

【インプット指標】

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	788	1,153	1,156	1,288	1,229	1,127
従事人員数(人)	10	10	11	11	11	12

1)決算額は損益計算書 教育普及事業費を計上している。

2)従事人員数は、教育普及事業を担当するすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価																						
<p>○ 国立美術館における美術教育に関する調査研究の成果を踏まえ、学校や社会教育施設等との連携強化により、子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供し、各館の年間の平均参加者数が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう、それらの参加者数の増加に積極的に取り組んだか。</p>	<p>① 幅広い学習機会の提供(講演会, ギャラリートーク, アーティスト・トーク等)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>実施回数</th> <th>参加者数</th> <th>目標数 (第2期平均)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">東京国立近代美術館</td> <td>本館</td> <td>99</td> <td>17,278</td> </tr> <tr> <td>工芸館</td> <td>39</td> <td>1,679</td> </tr> <tr> <td>フィルムセンタ</td> <td>186</td> <td>13,276</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>63</td> <td>2,725</td> <td>3,724</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>144</td> <td>13,143</td> <td>10,261</td> </tr> </tbody> </table>	館名	実施回数	参加者数	目標数 (第2期平均)	東京国立近代美術館	本館	99	17,278	工芸館	39	1,679	フィルムセンタ	186	13,276	京都国立近代美術館	63	2,725	3,724	国立西洋美術館	144	13,143	10,261	<p>講演会、ワークショップ、ギャラリートーク、アーティストトークなどの幅広い学習機会の提供については、参加者数が目標を大きく上回るなど、その充実是十分に評価できる。</p> <p>特に、各館における児童生徒に向けたきめ細かい教育的配慮、また教職員対象の取組は期待した成果を上げている。ゲスト作家の制作実演や、彫刻技法の</p>
館名	実施回数	参加者数	目標数 (第2期平均)																					
東京国立近代美術館	本館	99	17,278																					
	工芸館	39	1,679																					
	フィルムセンタ	186	13,276																					
京都国立近代美術館	63	2,725	3,724																					
国立西洋美術館	144	13,143	10,261																					

国立国際美術館	61	3,611	3,486
国立新美術館	84	22,539	10,518
計	<b>676</b>	<b>74,251</b>	<b>44,847</b>

【数値目標の達成状況】

・幅広い学習機会の提供(講演会, ギャラリートーク, アーティスト・トーク等)参加者数  
実績 74,220 人  
目標 44,847 人  
目標達成率 165.5%

ア 各館の特徴

(ア)東京国立近代美術館  
(本館)

幅広い層への解説プログラム(所蔵品ガイド, ハイライトツアー, キュレータートーク, 音声ガイド, 子供用セルフガイドやイベント等)や来館者サービス(ライブラリ, ショップ, レストラン, 休憩室, バリアフリー情報, 夜間開館, 無料観覧日, MOMAT パスポート等)を一覧できるリーフレット「活用ガイド」を制作した。

平成 24 年度は, 開館 60 周年を記念して多くの特別プログラムを実施した。とりわけ「Concerto Museo / 絵と音の対話」と「14 のタベ」は企画展ギャラリー内でコンサートやパフォーマンスを実施する全く新しい試みに取り組んだ。「だれでも MOMAT」では, 子どもから大人まで, 誰もが当館のコレクションに親しめることをコンセプトに5つのプログラムを開催した。

(工芸館)

「越境する日本人」展では連続講座を開催した。全 7 回のうち複数の講座に参加する来館者も見受けられ, 一つのテーマを多面的かつ深く掘り下げる試みが好評であった。「寿ぎの『うつわ』」展では出品作家の並木恒延氏によるトークに際して制作の実演も行い, 作品の背景を知る貴重な機会として強い関心が寄せられた。この事業に際しては多数の参加者が見込まれたことから, 国立新美術館の情報担当の研究員の技術協力を得て, 制作中の手元をスクリーンに映し出すとともに, 別室に中継して対応した。

(フィルムセンター)

平成 24 年度は, 大ホールの 3 企画及び展示室の 3 企画等で, 計 69 回のトーク・イベントを行った。これらに加え, 教育普及を目的とする上映イベントでは, 小中学生を対象とする「こども映画館」, 若い観客層の開拓を目的とした「カルト・ブランシュ～期待の映画人・文化人が選ぶ日本映画～」及びユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント(「講演と弁士・伴奏付き上映 日活映画

具体的紹介など、魅力的な内容は高く評価する。

フィルムセンターについては、キャンパスメンバーズの加盟校(東京国立近代美術館利用校)を対象に、フィルムセンターの施設と所蔵映画を利用して講義等を行える制度を導入したことは、大学等との連携を促進する上で有効な方策の一つとして評価できる。

講演会・ワークショップ・ボランティアの活用など、教育普及の分野からの連携や相互依存はますます高まっている。今後は、教育プログラムの経験者や専門家を置くなどきめ細かな対応をすべきである。

の起源)」といった恒例行事に加え、研究員による講演解説付きの特別イベント「『地獄門』デジタル復元版特別上映会」を開催した。

東京国立近代美術館フィルムセンター・大学等連携事業を新たに始め、国立美術館キャンパスメンバーズの加盟校(東京国立近代美術館利用校)が、フィルムセンターの所蔵映画フィルムと施設を利用して講義等を行うための整備を行い、4回の講義を実施したほか、大学等の学生が、フィルムセンターで映画の上映会又は展覧会を観覧したことを証明する「鑑賞証明カード」の配付を開始した。

#### (イ) 京都国立近代美術館

平成24年度は、展覧会関連イベントとして鑑賞と制作を関連付けたワークショップを数多く開催した。世代の異なる参加者同士のコミュニケーションを意識し、年齢制限することなく、参加者を募った。また、三種類の異なるワークショップを企画・開催し、それぞれ2～3回行う機会を設けたことで、当館での学習支援活動が周知されることとなり、参加者の半分以上がリピーターとなった。

一方、学校との連携として、毎年京都市で夏休みに行われている小学校教員の教科別指導講座のうち、図画工作の会場が当館となり、京都市教育委員会の担当者と協力し、講座実現に向けて取り組んだ。京都市の小学校では、「図画工作」科を専科とする教員は配属されていないことから、新鮮な視点で「鑑賞教育」を授業に取り入れてもらう契機となったと思われる。

MoMAK Filmsの映画上映プログラムでは平成23年度に続き、ゲストスピーカーを招いて、上映作に関連したトークイベントを行った。MoMAK Filmsの開催は当館の普及事業の柱ともなっており、映画鑑賞者を美術館に取り込むという意味でも貴重な機会となっている。

#### (ウ) 国立西洋美術館

平成24年度は、「ファン・ウイズ・コレクション」と「ファン・デー」の2つのプログラムを、企画展「手の痕跡—国立西洋美術館所蔵作品を中心としたロダンとブールデルの彫刻と素描」と連携させるという初めての試みによって、来館者に彫刻作品を楽しむ多様な視点と数多くの機会を提供し、好評を博した。ファン・ウイズ・コレクション「彫刻の魅力を探る」では、東京藝術大学彫刻科研究室及び工芸科鑄金研究室の協力を得て、ロダンとブールデルが用いた彫刻制作の技法を紹介する小企画展を「手の痕跡」展内に設け、技法に関連する創作プログラムも実施した。2日間にわたって開催した「ファン・デー」では、常設展と合わせて「手の痕跡」展も無料開放し、常設展関連の定番プログラムとなっている10分トークや建築ツアーを実施したほか、通常は小中学生のみに配布している「手の痕跡」展セルフガイドを希望者へ無料配布した。さらに、同展に関連し、彫刻の技法のデモンストレーションを大理石、ブロンズ、粘土といった素材別に行い、多くの参加者を得た。

#### (エ) 国立国際美術館

引き続き、企画展ごとに講演会、対談、ギャラリートークなどを実施するとともに、小・中・高・特別

支援学校の教職員又は鑑賞教育に取り組んでいる方を対象に、美術館の活用法や子供による鑑賞の取組についての討議の場、情報交換の場として、「先生のための鑑賞ミーティング」を開催した。

また、上記のほか、以下の教育プログラムを実施した。

- ・鑑賞支援教材制作に関連した「ジュニア・セルフガイド」の発行（「国立国際美術館 35 周年記念展コレクションの誘惑」（H24.4.21～H24.6.24 開催）、「コレクション」（H24.7.7～H24.9.30, H24.10.13～H24.12.24, H25.1.19～H25.3.24 開催）で配布）
- ・大学の課外授業及びスクーリングによる団体鑑賞の受入れ（2 校を受入れ）
- ・小・中・高等学校団体鑑賞の受入れ（166 校を受入れ）
- ・教員研修会の実施（3 回）

（オ）国立新美術館

展覧会に関連した講演会やアーティスト・トークのほか、「セザンヌ」展、「大エルミタージュ美術館展」、「具体」展ではシンポジウムを企画し、展覧会の内容をより深く検証するためのイベントの開催に積極的に取り組んだ。

一方、平成 24 年度の新規事業の「カフェアオキ」は、国立新美術館長と様々な分野で活躍する著名人が対談や鼎談を行うトーク・イベントである。カジュアルな雰囲気の中で著名人を迎えてのトークは、一般の人々に分かりやすい言葉で解説し美術や美術館により親しんでもらうことを目的としたもので、大勢の参加者があった。

このほか、開館以来、教育普及事業の柱の一つとなっているアーティスト・ワークショップでは、平成 24 年度に初めて未就学児を対象にしたワークショップ「はじめてのアート」を開催し好評を得た。また、写真家の柴田敏雄氏によるワークショップでは、2 回にわたる講評のみを実施するなど、毎回参加者にとって最も有意義なプログラムを検討・企画し、ワークショップの内容を多様化し、充実させている。

【幅広い学習機会の提供（講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等）過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
実施回数	466	699	694	766	667	671	675
参加者数合計	28,724	53,034	48,940	52,354	41,183	51,653	74,220

○ ボランティアや支援団体の育成と相互協力による教育普及事業の充実を図ったか。また、ボランティアの参加人数及び活動日数の増加に積極的に取り組んだか。

② ボランティアや支援団体の育成等による教育普及事業

ア ボランティアによる教育普及事業

館名	ボランティア登録者数	ボランティア参加者数	事業参加者数
東京国立近代美 本館	41	378	3,627

ボランティアや支援団体による教育普及事業については、ボランティア登録者数が昨年度を上回っており、また、コンサートの開催や企業との連携などの着実な努力を評価する。

術館	工芸館	32	251	1,646
京都国立近代美術館		35	142	—
国立西洋美術館		32	565	5,835
国立国際美術館		42	51	—
国立新美術館		97	97	—
計		279	1,484	11,108

ボランティアによる教育普及については、オリジナル作品を体感的に経験する方法による取り組みの充実も窺える。

#### イ 各館の特徴

##### (ア) 東京国立近代美術館

本館では、リニューアル工事休館に合わせ、「MOMAT ガイドスタッフによる所蔵品ガイド」を 2 ヶ月半休止した。

ガイドスタッフに対するフォローアップ研修では、9 月に奥村高明氏(聖徳大学教授)より「テート・モダンの鑑賞ハンドブックと子どもの鑑賞」、1 月に本間美里氏(大田区立矢口小学校教諭)より「ギャラリートーク分析について」をテーマに講演を依頼し、教育学的側面から鑑賞活動への理解を深めた。

開館 60 周年記念プログラム「だれでも MOMAT」では、日頃の活動での経験を生かし、MOMAT ガイドスタッフが、「MOMATALK」、「アートカード・ワークショップ」及び「MOMAT パズル」の 3 つのプログラムを担当した。

工芸館では、ボランティアガイドの 5 期メンバーが本格的に活動を開始し、平日朝の団体対応がスムーズになった。また、海外(ドイツ及びアメリカ)の専門家によるタッチ&トークの調査希望があり、それぞれ英語タッチ&トークに実際に参加した。

##### (イ) 京都国立近代美術館

企画展ごとに、ボランティアスタッフによるアンケート調査の回収・集計を行った。

##### (ウ) 国立西洋美術館

スクール・ギャラリートークへの参加を希望する学校が年々増えており、平成 24 年度は、平成 23 年度より約 700 名も多くの児童がトークに参加した。特に、台東区の協力により、区内の小・中学校の来館数が増加した。プログラムの開始から 4 年が経過した美術トークもさらに周知されてきたと見られ、参加者数は平成 23 年度より大幅に増えている。平成 23 年度までボランティア・スタッフが行っていた「びじゅつーる」の貸出業務はインターンと都立上野高校奉仕の課外授業の高校生の担当となり、その分ボランティア・スタッフは、人手がより必要なスクール・ギャラリートークなどで大いに活躍した。

##### (エ) 国立国際美術館

学生ボランティアを広く募り、教育普及事業の実施補助、広報資料の発送、図書資料等の整理などの美術館運営の補助業務を実施することを通じて、美術館活動に接する機会を提供した。

なお、平成 24 年度は、「エル・グレコ展」の開催に当たり、ボランティアに協力を依頼し、展示室内の環境整備などを行い、美術館における展覧会活動についての理解を深める機会を提供した。

(オ)国立新美術館

学生ボランティアである「サポートスタッフ」として、開館以来最も多い 97 名が登録した。美術や美術史だけでなく、幅広い分野の専攻の学生が、講演会やシンポジウム、ワークショップの運営補助などの活動に参加した。

ウ 支援団体等の育成と相互協力による事業

(ア)コンサート等の実施

東京国立近代美術館本館では、NPO 法人日本音楽家協会及び日本音楽アカデミーの協力を得て、開館 60 周年を記念するイベントとしてコンサート「Concerto Museo / 絵と音の対話」を 3 日間にわたり開催した(1 階企画展ギャラリー、入場無料)。(計 1 件 3 回)

京都国立近代美術館では、「KATAGAMI Style」展及び「山口華楊展」において、京都市立芸術大学の協力によりコンサートを開催した。(計 2 件、2 回)

国立西洋美術館では、財団法人アルゲリッチ芸術振興財団及び上野のれん会との連携による「ピノキオ コンサート～子どもと大人のための音・学・会 at 国立西洋美術館」、企画展関連企画「ベルリン国立美術館展 学べるヨーロッパ美術の 400 年 レクチャー・コンサート」、東京藝術大学との連携による「Museum X'mas in 国立西洋美術館《美術館でクリスマス》」クリスマスキャロル・コンサート及びジャパンアカデミーフィルハーモニックとの連携による「ファン・デー 前庭コンサート」を開催した。(計 4 件、11 回)

国立国際美術館では、「リアル・ジャパネスク:世界の中の日本現代美術」に関連し、澤野工房と協力した大石学によるピアノコンサートとともに、財団法人ダイキン工業現代美術振興財団と協力した「ミュージアムコンサート Vol.17」を開催した。(計 2 件、2 回)

国立新美術館では、企業協賛金を活用した館主催のロビーコンサート「国立新美術館サマー・ジャズコンサート」及び「国立新美術館クリスマス・オペラコンサート」(制作:新国立劇場)を開催した。(計 2 件、2 回)

(イ)ぐるっとパスへの参加

東京の美術館・博物館等 75 施設が参加する共通入館券事業「東京・ミュージアムぐるっとパス 2012」及び関西の美術館・博物館等 65 施設が参加する「ミュージアムぐるっとパス・関西 2012」に参加し、所蔵作品展観覧料の無料化又は割引や、企画展観覧料の割引などを実施した。

(ウ)NPO 法人との連携

東京国立近代美術館本館では、NPO 法人日本音楽家協会及び日本音楽アカデミーの協力を得て、開館 60 周年を記念するイベントとしてコンサート「Concerto Museo / 絵と音の対話」を 3 日間



にわたり開催した(1階企画展ギャラリー, 入場無料)。(平成24年8月10日～8月12日, 計3回)

国立西洋美術館では, ジャパンアカデミーフィルハーモニックとの連携による「ファン・デー 前庭コンサート」を開催した。(平成24年11月10日, 11日, 計4回)

#### (エ)企業との連携

東京国立近代美術館及び国立西洋美術館では, 三菱商事株式会社と共同で行っている障害者のための鑑賞プログラムを実施した。

東京国立近代美術館では, 「美術にぶるっ!展」(平成24年11月24日)及び「フランス・ベーコン展」(平成25年3月23日)の閉館後に障がい者特別内覧会を実施した。「美術にぶるっ!展」の参加者は102名, 「フランス・ベーコン展」の参加者は98名であった。

国立西洋美術館では, 「ベルリン国立美術館」展(平成24年7月14日)を対象に障がい者特別内覧会を実施し参加者は236名であった。

国立国際美術館では, 企業とのタイアップによる前売券の発券, 企業等が発行する印刷物・ホームページへの展覧会情報の掲載等, 企業との連携を進めた。

①朝日新聞グループ 朝日友の会, ㈱阪急阪神カード, ㈱京阪カード及び大阪市交通局の情報誌・ホームページに展覧会情報を掲載するとともに割引を実施した。

②近隣ホテルと連携し, 広報誌への情報掲載及びホームページのリンク等を実施した。

③「Osaka メセナカード」と連携し, カードの普及広報を行った。

④近畿地方整備局の中之島活性化実行委員会に協力するとともに, 同委員会の実行企業である京阪電鉄の広報誌において, 展覧会及びイベントの広報を行った。

国立新美術館では, 外部協力者(参与)と連携し, 外部資金の募金活動を行い, コンサート事業等の支援を目的に, 企業から協賛金を受け入れた。企業協賛金を活用した事業として, 託児サービスを提供するとともに, JAC(Japan Art Catalog)プロジェクトにより, 海外の日本美術の研究拠点4箇所へ国内で開催された展覧会図録を寄贈した。

#### (オ)その他

東京国立近代美術館では, 近代美術協会との連携により, 平成25年1月2日に工芸館所蔵作品展「近代日本の漆工芸」の観覧料を無料とした。また, 本館及び工芸館の来館者には, 過去の展覧会図録, ポスター及びオリジナルグッズのプレゼントを行った。さらに, 本館では開館60周年を記念して「60周年記念ピンバッジ」のプレゼントも行った。(入館者数 本館2,426人, 工芸館2,443人)

また, 東京国立近代美術館及び国立西洋美術館では, 東京都が実施する「家族ふれあいの日」事業に参加し, 子ども連れ家族来館者の観覧料(フィルムセンターは7階展示室)を無料又は割引にした。

○ 映画フィルム・資料の所蔵作品を活用し、児童生徒を対象とした「こども映画館」の開催やジュニアセルフガイドの作成など教育普及活動に積極的に取り組んだか。

【ボランティアによる教育普及事業 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
事業参加者数	13,656	9,188	7,855	8,229	9,777	12,385	11,108
ボランティア登録者数	228	220	243	212	240	252	279
ボランティア参加者数	1,665	1,518	1,466	1,444	1,756	1,528	1,484

③ 映画フィルム・資料を活用した教育普及活動

「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films@home 2012」は、フィルムセンターが提供する映画コレクションを、京都の会場で上映する趣旨で、平成 19 年度に開始されたが、年に 1 回(各回 1 日)を仮設の会場で開催していた初年度及び第 2 年度から、様々な方法を模索しつつ徐々に拡充している。

「第 5 回中之島映像劇場 浪花の映像【キネマ】の物語—東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵作品から—」は、平成 22 年度より国立国際美術館が始めた表題の事業を、年 1 回フィルムセンターとの共催により行っている事業であるが、平成 23 年度に比べ入館者数を 50 人以上増やすことができた。また、各作品の撮影場所の同定を通して近代建築と映画との親和性を明らかにした、客員研究員による調査結果を反映した当日プログラムの配布や、上映前の解説を通じて、観客の作品理解を一層促進することができた。

これらの共催事業は、関西におけるフィルムセンター所蔵作品の定期的な上映拠点の形成に、堅実な成果を上げている。

<映画フィルム・資料等を活用した教育普及活動>

- ・「こども映画館 2012 年の夏休み」回数:4 回、参加者数:394 人
- ・相模原市内の小・中学生を対象とした上映会(施設見学)(相模原市立由野台中学校)回数:2 回、参加者数:246 人
- ・『6.13「はやぶさ」帰還記念日イベント』(JAXA・相模原市等との共催:フィルムセンター相模原分館での上映会(NFC)及びミニ講演(JAXA)) 回数:2 回、参加者数:380 人
- ・相模原分館「所蔵フィルム上映とフィルム保存庫の施設ツアー」(JAXA 特別公開との共催事業)回数:6 回、参加者数:1,001 人
- ・相模原分館 さがみ風っ子「親子映画鑑賞会」回数:2 回、参加者数:35 人

11 年目を迎えた「こども映画館」では、平成 24 年度も映画上映に施設見学や弁士・伴奏付きの無声映画上映などを組み合わせるスタイルを踏襲しつつ、子供たちが日常のテレビや DVD などでは接する機会を持ちにくい映画遺産に触れる機会を作るとともに、写真画像や手作りの動画等も用いて、分かりやすい解説を行うよう心がけた。

映画フィルム・資料の所蔵作品を活用した教育事業については、「こども映画館」などを開催するなど、着実に教育普及活動の充実に取り組んでいる。特に、フィルムセンター相模原分館におけるJAXAとの連携事業は将来の観客層の育成の視点から今後も継続していくべき事例として評価できる。

	<p>相模原分館では、相模原市及び独立行政法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)と締結した文化事業等協力協定により、相模原市内の小・中学生並びに相模原市及び JAXA との共催事業の参加者を対象に、無料で映画鑑賞と保存施設の案内を実施した。映画フィルムの受入・検査・収納までの工程を解説し、多くの参加者から好評を得、映画フィルムの保存についても普及することができた。</p>	
--	--	--

<b>【(小項目)1-1-5】</b>	調査研究の実施状況	<b>【評定】</b>			
<b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b>		<b>A</b>			
(5)調査研究成果の反映		H23	H25	H26	H27
各館の役割・任務に従い、展覧会開催のための調査研究、教育普及活動のための調査研究、情報の収集・提供のための調査研究等を、外部資金の活用を含めて計画的に実施し、これらの成果を確実に美術館活動に反映させる。なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館及び大学等の機関との連携協力を図り、調査研究成果の共有を図る。		A			
		<b>実績報告書等 参照箇所</b> <実績報告書> P21～33 (5)調査研究成果の美術館活動への反映 ①調査研究一覧 ②展覧会カタログの執筆 ③研究紀要の執筆 ④館ニュース等の執筆 <実績報告書> P62～65 (2)国内外の美術館等との連携 ①シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築 ②我が国の作家、美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力			

**【インプット指標】**

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	382	296	322	302	318	324
従事人員数(人)	61	59	59	57	57	54

- 1) 決算額は損益計算書 調査研究事業費を計上している。
- 2) 従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価						
○ 各館の役割・任務に従い、展覧会開催のための調査研究、教育普及活動のための調査研究、情報の収集・提供のための調査研究等を、外部資金の活用を含めて計画的に実施し、これらの成果を確実に美術	① 調査研究一覧 ア 東京国立近代美術館 <table border="1" data-bbox="672 1364 1646 1476"> <thead> <tr> <th>調査研究テーマ</th> <th>美術館活動への反映</th> <th>連携機関</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>現代の写真作家に関する調査研究</td> <td>「写真の現在4 そのときの光、そのさきの風」展を開催しカタログを発行</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関	現代の写真作家に関する調査研究	「写真の現在4 そのときの光、そのさきの風」展を開催しカタログを発行		展覧会開催のための調査研究等は着実に実施されて、他機関との連携、外部資金の獲得を含め、その達成度は高い水準で成果を上げたと評価する。 特に海外機関との研究水準での交流
調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関						
現代の写真作家に関する調査研究	「写真の現在4 そのときの光、そのさきの風」展を開催しカタログを発行							

<p>館活動に反映させたか。なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館及び大学等の機関との連携協力を図り、調査研究成果の共有を図ったか。</p>	吉川霊華に関する調査研究	「吉川霊華展 近代にうまれた線の探究者」を開催しカタログを発行		<p>や、国際シンポジウムの開催、また国内外の研究者との連携・協力・ネットワーク構築としての研究会ほかの開催、そしてその成果の報告書出版は、高度な研究・調査における実績となった。各館の研究員の業務が過重負担の領域に達していることはよく認知しているが、研究成果については、法人内でのピアレビューを明確化し、また国内外の主要学会などでの成果発表や査読付き学会誌への投稿なども努力してほしい。</p>
	1950年代の日本の美術に関する調査研究	「美術にぶるっ！ベストセレクション日本近代美術の100年」第2部「実験場1950s」を開催しカタログ及び論文集を発行		
	フランシス・ベーコンに関する調査研究	「フランシス・ベーコン展」を開催しカタログを発行	豊田市美術館	
	鑑賞教育に関する美術館と学校の連携や、学校の授業と美術館での鑑賞の連続性に関する調査研究	学校の授業と関連付けた、小・中学校のギャラリートークの受入れ及び全国指導者研修をはじめとした鑑賞教育研修の実施	東京都図画工作研究会、東京都中学美術研究会	
	美術館の教育普及事業（ワークショップ、鑑賞ガイド等）に関する調査研究	セルフガイドの発行、60周年記念「だれでもMOMAT」の実施		
	国立美術館の情報資源を、「想-IMAGINE」において連携して検索・閲覧できるシステムの公開に関する調査研究	「想-IMAGINE 国立美術館」を <a href="http://imagine.artmuseums.go.jp/index.jsp">http://imagine.artmuseums.go.jp/index.jsp</a> において継続して公開		
	1960-70年代の概念芸術：作品の所在調査とデータ・ベース構築	データ・ベース「1960-70年代の概念芸術」を構築		
	美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発	「美術にぶるっ！ベストセレクション日本近代美術の100年ジュニアガイド」の発行		
	工芸の現代的表現に関する調査研究	企画展「現代の座標—工芸をめぐる11人の思考」	敦井美術館、金沢21世紀美術館、豊田市美術館、資生堂アートフォーラム他	
	近代日本工芸の系譜に関する調査研究	フィレンツェ展「日本のわざと美—近代工芸の精華—」	文化庁、ピッティ宮殿銀器博物館、京都国立近代美術館他	
	明治期に海外流出した近代工芸作品の調査	近代初頭の工芸の展開の検証と作品収集及び展示への活用	フィラデルフィア美術館、ボルチモア美術館、国立自然史博物館、フリーア美術館	
	東アジア地域のデザインにみる交流に関する歴史的研究：中国、台湾、韓国、日本	国際シンポジウム「オリエンタル・モダニティ：東アジアのデザイン史 1920-1990」	埼玉大学、津田塾大学、ロンドン芸術大学	
	工芸館のコレクションと所蔵作品展染織作品の鑑賞にかかる調査研究	『東京国立近代美術館60年史 1952-2012』所蔵作品展「植物図鑑」セルフガイドへの活用	実践女子大学	
工芸素材と技法の体験と鑑賞教育の推進にかかる調査	所蔵作品展「植物図鑑」ワークショップへの活用	多摩美術大学		

	研究		
	1900-30年代フランスの美術と建築における軸測投影に関する総合的研究	研究論文を刊行するとともに、研究成果の一部は、平成25年度開催予定の展覧会カタログに反映予定	首都大学東京 国立新美術館
	戦後日本に配給された外国映画に関する調査研究	上映会「ロードショーとスクリーン ブームを呼んだ外国映画」、展覧会「ロードショーとスクリーン 外国映画ブームの時代」の開催	一般社団法人外国映画輸入配給協会
	新収蔵作品とその作者や時代背景に関する調査研究	上映会「よみがえる日本映画vol.4[大映篇]—映画保存のための特別事業費による」「よみがえる日本映画vol.5[日活篇]—映画保存のための特別事業費による」の開催	
	現代欧州映画に関する調査研究	上映会「EUフィルムデーズ2012」の開催	駐日欧州連合代表部及びEU加盟国大使館・文化機関
	今井正監督に関する調査研究	上映会「生誕百年 映画監督 今井正」の開催	
	無声映画に関する調査研究	上映会「シネマの冒険 闇と音楽 2012」の開催	
	木下恵介監督に関する調査研究	上映会「生誕百年 木下恵介劇場」の開催	
	日活の歴史と作品に関する調査研究	上映会「日活映画の100年 日本映画の100年」、展覧会「日活映画の100年 日本映画の100年」及び教育普及事業「講演と弁士・伴奏付き上映 日活映画の起源」の開催	
	現代日本映画監督に関する調査研究	上映会「自選シリーズ 現代日本の映画監督1 崔洋一」の開催	
	戦後日本に配給された外国映画に関する調査研究	上映会「ロードショーとスクリーン ブームを呼んだ外国映画」及び展覧会「ロードショーとスクリーン 外国映画ブームの時代」の開催	社団法人外国映画輸入配給協会
	日活の歴史と作品に関する調査研究	上映会「日活映画の100年 日本映画の100年」、「よみがえる日本映画vol.5[日活篇]—映画保存のための特別事業費による」、ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント「講演と弁士・伴奏付き上映 日活映画の起源」及び展覧会「日活映画の100年 日本映画の100年」の開催	日活株式会社
	ジャンル別の映画ポスターに関する研究	展覧会「西部劇(ウエスタン)の世界 ポスターでみる映画史Part 1」の開催	

「写し絵」に関する調査研究	写し絵実演の記録撮影の実施及び常設展「NFCコレクションでみる日本映画の歴史」での資料展示	
「無声映画の音—帝政期ロシアにおける初期映画興行研究」	美術館が所蔵する帝政ロシア映画のデータベース充実化	

イ 京都国立近代美術館

調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
我が国における1920年代前衛美術の先駆者・村山知義に関する調査研究	展覧会「すべての僕が沸騰する—村山知義の宇宙—」を開催	神奈川県立近代美術館, 高松市美術館, 世田谷美術館
京都で活躍した版画家・井田照一の新収蔵コレクションに関する研究	展覧会「井田照一の版画」を開催するとともに, 図録を「所蔵作品目録Ⅹ」として刊行	
もうひとつのジャポニズムというべき, ヨーロッパにおける「型紙」に関する調査研究	展覧会「KATAGAMI Style — もうひとつのジャポニズム」を開催	三菱一号館美術館, 三重県立美術館, ジャポニズム学会
我が国の近代洋画の先駆者である高橋由一の調査研究	展覧会「近代洋画の開拓者 高橋由一」を開催	東京藝術大学
京都を代表する日本画家・山口華揚に関する調査研究	展覧会「山口華揚展」を開催	笠岡市立竹喬美術館
「日本の映画ポスター芸術」についての調査研究	展覧会「日本の映画ポスター芸術」を開催	東京国立近代美術館フィルムセンター
開館50周年に当たって、「工芸」を中心とする記念展開催のための調査研究	展覧会「交差する表現」を開催	
子どもを対象とした鑑賞教育に関する研究実践	「京都国立近代美術館との連携による鑑賞教育の充実に向けて」の研修会を実施	京都市教育委員会, 京都市図画工作研究会
「東西文化の磁場—日本近代建築・デザイン・工芸の脱—、超—領域的作用史の基盤研究」	国書刊行会から, 研究の集大成として『東西文化の磁場』を出版(平成25年3月)	
「装飾とデザインのジャポニズム—西欧におけるその概念形成と実作の研究」	関連展覧会「KATAGAMI Style — もうひとつのジャポニズム」の会期中にシンポジウムを開催し, 上記『東西文化の磁場』にも研究成果を盛り込む	日本女子大学
「イディッシュ語文化圏における芸術活動の研究」	当該科研による研究会(於明治学院大学)における発表を実施	大阪大学
「1960~70年代の概念芸術: 作品の所在調査とデータ・ベ	平成25年度特別展の内容に研究調査を盛り込む予定	東京国立近代美術館

	ース構築」		
	「オーラルヒストリーによる1960年代前衛美術研究の再構築」	50周年記念展「交差する表現」図録に、元館員の聞き取り調査の記録を盛り込んだ	広島市立大学
	ウ 国立西洋美術館		
	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
	ユベール・ロベール及び18世紀のフランス風景画をめぐる美学的展開に関する調査研究	「ユベール・ロベールー時間の庭」展を開催 同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会及びシンポジウム等による発表を実施	ヴァランス美術館、静岡県立美術館、福岡市美術館
	ベルリン国立美術館所蔵のイタリアと北方の絵画彫刻の比較研究及び15～17世紀イタリア素描の技法に関する調査研究	「ベルリン国立美術館展 学べるヨーロッパ美術の400年」を開催 同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施	ベルリン国立美術館、九州国立博物館
	国立西洋美術館所蔵のロダンとブールデル作品に関する調査研究	「手の痕跡 国立西洋美術館所蔵作品を中心としたロダンとブールデルの彫刻と素描」展を開催 同展の図録を刊行、新聞等への掲載、ギャラリートーク等を実施	
	ラファエロに関する研究	「ラファエロ」展を開催 同展の図録を刊行、新聞等への掲載、講演会等による発表を実施	フィレンツェ文化財・美術館特別監督局
	旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究	作品収集、作品及び文献調査、所蔵作品展・企画展、刊行物、講演発表、解説等	
	中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究	作品収集、作品及び文献調査、所蔵作品展・企画展、刊行物、講演発表、解説等	
	所蔵版画作品に関する調査研究	作品収集、作品及び文献調査、所蔵作品展・企画展、刊行物、講演発表、解説等	
	美術館教育に関する調査研究	教育普及プログラムを実施 鑑賞教育教材制作、インターンシップ、ボランティア指導、解説等(企画展解説パネル制作等)	
	ル・コルビュジエによる国立西洋美術館本館の設計に関する調査研究	教育普及プログラムを実施 文献や図面の調査 本館保存に関する修理検討委員会の実施	
	「国立西洋美術館所蔵作品データベース」に関する研究	国立西洋美術館所蔵作品データベースの構築、整備	



「西洋近世版画史の一次資料調査」	作品収集, 作品及び文献調査, 所蔵作品展・企画展, 刊行物, 講演発表, 解説等	
「共和主義におけるチャールズ・ウィルソン・ピールのミュージアムの教育的役割と視覚による教育の成立」	教育普及活動に関する文献調査, 今後の活動に関する基礎資料	
「ジャン・パオロ・パニーニの風景画に描かれた古代建築と古代彫刻のデータベース構築」	作品及び文献調査, 所蔵作品展・企画展, 刊行物, 解説等	
「エライザ法を用いた膠着材同定の実現のための検討」	所蔵作品の保存のための基礎資料	
「ナショナル・ポートレート・ギャラリー その思想と歴史」	美術館の成立に関する文献調査 刊行物	
「海外における松方コレクション関連資料の収集と公開」	作品及び文献調査, 関連資料のデータベースの構築と整備	

エ 国立国際美術館

調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
所蔵作品についての調査研究	コレクション展	
現代日本美術の動向についての調査研究	「リアル・ジャパネスク:世界の中の日本現代美術」	
柏原えつとむについての調査研究	「<私>の解体へ: 柏原えつとむの場合」	
エル・グレコについての調査研究	「エル・グレコ展」	東京都美術館
宮永愛子についての調査研究	「宮永愛子: なかそらー空中空ー」	
現代の映像表現についての調査研究	「夢か、現か、幻か」	
工藤哲巳に関する調査研究	展覧会の企画構成	
ライアン・ガンダーについての調査研究	所蔵作家の研究	
アンドレアス・グルスキーについての調査研究	展覧会の企画構成	国立新美術館
高松次郎についての調査研究	展覧会の企画構成	
美術館教育に関する調査研究	美術館, 展覧会運営 (ジュニアセルフガイド作成, びじゅつあー／なつやすみびじゅつあー／びじゅつあ	

		ーすべしやる／ワークショップの企画)	
アジアの現代美術並びに美術館運営に関する調査研究	美術館, 展覧会運営		アジア次世代キュレーター会議
フランス国立クリュニー中世美術館所蔵作品についての調査研究	展覧会の企画構成		フランス国立中世美術館, 国立新美術館
工藤哲巳についての調査研究	展覧会の企画構成		
郭徳俊についての調査研究	展覧会の企画構成		
フォートリエについての調査研究	展覧会の企画構成		東京ステーションギャラリー, 豊田市美術館
フィオナ・タンについての調査研究	展覧会の企画構成		東京都写真美術館
高松次郎についての調査研究	展覧会の企画構成		
ジャコメッティについての調査研究	展覧会の企画構成		
ミュージアムと地域活性化ー変容するミュージアムの新たな経営課題	美術館, 展覧会運営		東京国立近代美術館
美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発	美術館, 展覧会運営 (先生のための鑑賞ミーティングの企画)		同志社大学経済学部
<b>オ 国立新美術館</b>			
調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関	
日本の現代美術の動向に関する調査研究	「アーティスト・ファイル2013—現代の作家たち」展を開催		
海外の現代美術の動向に関する調査研究	「アーティスト・ファイル2013—現代の作家たち」展を開催		
野田裕示の芸術とその展開についての調査研究	「野田裕示 絵画のかたち/絵画の姿」展を開催		
セザンヌの芸術と生涯に関する調査研究	「セザンヌ—パリとプロヴァンス」展を開催	パリ市立プティ・パレ美術館	
柴田敏雄の芸術とその展開についての調査研究	「与えられた形象—辰野登恵子/柴田敏雄」展を開催		
辰野登恵子の芸術とその展開についての調査研究	「与えられた形象—辰野登恵子/柴田敏雄」展を開催		
具体美術協会についての調査研究	「『具体』—ニッポンの前衛 18年の軌跡」展を開催		

関西の戦後前衛美術についての調査研究	『『具体』—ニッポンの前衛 18年の軌跡』展を開催	
バロック美術についての調査研究	「リヒテンシュタイン 華麗なる侯爵家の秘宝」展を開催	高知県美術館, 京都市美術館
ロシアにおける西歐美術の収集と受容についての調査研究	「大エルミターージュ展 世紀の顔・西歐絵画の400年」展を開催	エルミターージュ美術館, 京都市美術館, 名古屋市美術館
20世紀中葉のロサンゼルスにおけるデザイン潮流についての調査研究	「カリフォルニア・デザイン 1930-1965—モダン・リビングの起源—」展を開催	ロサンゼルス・カウンティ美術館
美術館の教育普及事業(ワークショップ, 鑑賞ガイド等)に関する調査研究	教育普及事業	
日本の近・現代美術資料に関する調査研究	美術資料の収集・提供事業	
戦後の日本の美術館等における展覧会データの収集及び公開に関する調査研究	美術資料の収集・提供事業	
美術情報の収集・提供システムに関する調査研究	美術資料の収集・提供事業	
美術館におけるデジタル・アーカイブの構築に関する調査研究	美術資料の収集・提供事業	

② 展覧会カタログの執筆

ア 東京国立近代美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	展覧会名
作品解説	主任研究員・大谷省吾	「美術にぶるっ! ベストセレクション日本近代美術の100年」
「静物としての身体、もしくはアンチ・ヒューマニズムについて」	主任研究員・大谷省吾	「美術にぶるっ! ベストセレクション日本近代美術の100年」(論文集『実験場 1950s』)
章解説	主任研究員・鈴木勝雄	「美術にぶるっ! ベストセレクション日本近代美術の100年」
「集団の夢—50年代を貫く歴史的パトス」	主任研究員・鈴木勝雄	「美術にぶるっ! ベストセレクション日

			本近代美術の 100 年」(論文集『実験場 1950s』)
	「吉川靈華について」, 章解説, 作品目録, 作品解説, 年譜, 参考文献	主任研究員・鶴見香織	「吉川靈華展 近代にうまれた線の探研究者」
	作品解説	主任研究員・鶴見香織	「美術にふるっ! ベストセレクション日本近代美術の 100 年」
	「フランシス・ベーコンについての断章、いくつか」, 章解説, 作品解説, 年譜, アンソロジー(編集・翻訳)	主任研究員・保坂健二郎	「フランシス・ベーコン展」
	「政治の絵画から絵画の政治へ—中村宏の場合」	研究員・榎田倫広	「美術にふるっ! ベストセレクション日本近代美術の 100 年」(論文集『実験場 1950s』)
	「うわさのベーコン—日本におけるフランシス・ベーコン受容の歴史のためのノート」, 作品解説	研究員・榎田倫広	「フランシス・ベーコン展」
	「世界に出会う持続的な営為」, 「インタビュー」	主任研究員・増田玲	「写真の現在 4 そのときの光、そのさきの風」
	「時代はめぐる—東京国立近代美術館の 60 年」	副館長・松本透	「美術にふるっ! ベストセレクション日本近代美術の 100 年」
	東京オリンピック 1964 そのデザインワークにおける「日本的なもの」	主任研究員・木田拓也	「東京オリンピック 1964 デザインプロジェクト」
	工芸家が夢みたアジア: 工芸の「アジア主義」	主任研究員・木田拓也	「越境する日本人: 工芸家が夢みたアジア 1910s-1945」
	現代工芸を担う 11 人	主任研究員・諸山正則	「現代の座標—工芸をめぐる 11 の思考—」

イ 京都国立近代美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	展覧会名
「村山知義と建築、バウハウス」についての一断片	学芸課長・山野英嗣	「すべての僕が沸騰する—村山知義の宇宙—」
『京都国立近代美術館作品目録Ⅹ 井田照一の版画』への若干の脚註	客員研究員・河本信治	「井田照一の版画」
「型」を求めて—ドイツにおける型紙受容とその背景	主任研究員・池田祐子	「KATAGAMI Style — もうひとつのジャポニスム」
作者・工房解説	主任研究員・池田祐子 阿佐美淑子（三菱一号館美術館・主任学芸員） 味岡京子（明治学院大学／日本女子大学・非常勤講師） 今井朋（パリ・ルーブル学院博士課程在籍） 糸 和沙（日本女子大学・学術研究員） 高木陽子（文化学園大学・教授） 馬淵明子（日本女子大学・教授） 鈴木暁世（福岡女子大学専任講師） 山崎菜未（東京藝術大学大学院博士課程在籍）	「KATAGAMI Style — もうひとつのジャポニスム」
山口華楊—人と作品	主任研究員・小倉実子	「山口華楊展」
作品解説	主任研究員・小倉実子 上蘭四郎（笠岡市立竹喬美術館館長）	「山口華楊展」
〈工芸〉表現の一断面から見たその諸相	学芸課長・山野英嗣	「開館 50 周年記念特別展 交差する表現 工芸/デザイン/総合芸術」

ウ 国立西洋美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	展覧会名
「サンドロの友」の憂鬱、《フローラ》の涙	主任研究員・高梨光正	「ベルリン国立美術館展 学べるヨーロッパ美術の 400 年」
イタリア素描の技法さまざま	主任研究員・高梨光正	「ベルリン国立美術館展 学べるヨーロッパ美術の 400 年」

松方幸次郎と国立西洋美術館の近代美術コレクション	学芸課長・村上博哉	「平成 24 年度国立美術館巡回展 国立西洋美術館所蔵ヨーロッパの近代美術」
序ーロダンとブールデル、彫刻に残る手の痕跡	主任研究員・大屋美那	「手の痕跡 国立西洋美術館所蔵作品を中心としたロダンとブールデルの彫刻と素描」
松方幸次郎収集のロダンとブールデルの彫刻	主任研究員・大屋美那	「手の痕跡 国立西洋美術館所蔵作品を中心としたロダンとブールデルの彫刻と素描」
ロダンの《エヴァ》について	主任研究員・大屋美那	「手の痕跡 国立西洋美術館所蔵作品を中心としたロダンとブールデルの彫刻と素描」
ラファエロ像の変遷と偶像化への過程	主任研究員・渡辺晋輔	「ラファエロ」

エ 国立国際美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	展覧会名
国立国際美術館のコレクション逍遥	館長・山梨俊夫	「国立国際美術館開館 35 周年記念展 コレクションの誘惑」
国立国際美術館所蔵作品選作品解説	学芸課長・島敦彦	「国立国際美術館開館 35 周年記念展 コレクションの誘惑」
国立国際美術館所蔵作品選作品解説	主任研究員・中井康之	「国立国際美術館開館 35 周年記念展 コレクションの誘惑」
国立国際美術館所蔵作品選作品解説	主任研究員・安來正博	「国立国際美術館開館 35 周年記念展 コレクションの誘惑」
国立国際美術館所蔵作品	主任研究員・中西博之	「国立国際美術館

	選作品解説		開館 35 周年記念 展 コレクションの 誘惑」
	国立国際美術館所蔵作品 選作品解説	主任研究員・植松由佳	「国立国際美術館 開館 35 周年記念 展 コレクションの 誘惑」
	国立国際美術館所蔵作品 選作品解説	主任研究員・藤吉祐子	「国立国際美術館 開館 35 周年記念 展 コレクションの 誘惑」
	国立国際美術館所蔵作品 選作品解説	研究員・橋本梓	「国立国際美術館 開館 35 周年記念 展 コレクションの 誘惑」
	国立国際美術館所蔵作品 選作品解説	客員研究員・竹内万里子	「国立国際美術館 開館 35 周年記念 展 コレクションの 誘惑」
	国立国際美術館所蔵作品 選作品解説	客員研究員・森下明彦	「国立国際美術館 開館 35 周年記念 展 コレクションの 誘惑」
	国立国際美術館所蔵作品 選作品解説	研究補佐員・小野尚子	「国立国際美術館 開館 35 周年記念 展 コレクションの 誘惑」
	国立国際美術館所蔵作品 選作品解説	研究補佐員・福元崇志	「国立国際美術館 開館 35 周年記念 展 コレクションの 誘惑」
	国立国際美術館所蔵作品 選作品解説	研究補佐員・宮田有香	「国立国際美術館 開館 35 周年記念 展 コレクションの 誘惑」
	国立国際美術館所蔵作品 選作品解説	研究補佐員・岡部るい	「国立国際美術館 開館 35 周年記念 展 コレクションの 誘惑」
	ユニークさを求めて	主任研究員・中西博之	「リアル・ジャパネス ク:世界の中の日 本現代美術」

出品作家 9 名の解説	主任研究員・中西博之	「リアル・ジャパネスク: 世界の中の日本現代美術」
<私>の解体へ: 柏原えつとむの場合	研究員・橋本梓	「<私>の解体へ: 柏原えつとむの場合」
年表一般事項	主任研究員・安來正博	「エル・グレコ展」
始まりはあって終わりはないー宮永愛子の芸術ー	主任研究員・中井康之	「宮永愛子: なかそらー空中空ー」
「夢か、現か、幻かーWhat We See」	主任研究員・植松由佳	「夢か、現か、幻か」

オ 国立新美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	展覧会名
「マティスとロシアーロシア・アヴァンギャルドにおける「東方」」	主任研究員・本橋弥生	「大エルミタージュ美術館展 世紀の顔・西欧絵画の 400 年」
「『具体』ー近代精神の理想郷」, 章解説, 年譜, 作家略歴	主任研究員・平井章一	「『具体』ーニッポンの前衛 18 年の軌跡」
「大阪万博というフィナーレへ向かって」, 「主要参考文献」	研究員・山田由佳子	「『具体』ーニッポンの前衛 18 年の軌跡」
「与えられた形象ー序論」	学芸課長・南雄介	「与えられた形象ー辰野登恵子/柴田敏雄」
「辰野登恵子 その展開についての記述の試み」	学芸課長・南雄介	「与えられた形象ー辰野登恵子/柴田敏雄」
「柴田敏雄の写真」	主任研究員・宮島綾子	「与えられた形象ー辰野登恵子/柴田敏雄」
「デキウス・ムス連作ールーベンス芸術マニフェステーション」	主任研究員・宮島綾子	「リヒテンシュタイン華麗なる侯爵家の秘宝」
「利部志穂の作品について」	学芸課長・南雄介	「アーティスト・ファイル 2013ー現代の作家たち」
「ダレン・アーモンド」	主任研究員・西野華子	「アーティスト・ファ



		イル 2013—現代の作家たち」
「ジョン・ヨンドウ」	主任研究員・西野華子	「アーティスト・ファイル 2013—現代の作家たち」
「東亭順」	主任研究員・宮島綾子	「アーティスト・ファイル 2013—現代の作家たち」
「ナリニ・マラニ」	主任研究員・本橋弥生	「アーティスト・ファイル 2013—現代の作家たち」
「志賀理江子：写真における身体とイメージ」	主任研究員・長屋光枝	「アーティスト・ファイル 2013—現代の作家たち」
「《返本還元》から《竜神》へ—國安孝昌の仕事」	副館長・福永治	「アーティスト・ファイル 2013—現代の作家たち」
「中澤英明の絵画」	副館長・福永治	「アーティスト・ファイル 2013—現代の作家たち」
「『パシフィカ』と『ジャパニーズ・モダン』—1950年代カリフォルニアと日本における日本調のモダン・デザイン」	主任研究員・本橋弥生	「カリフォルニア・デザイン 1930-1965—モダン・リヴィングの起源—」

③ 研究紀要の執筆

ア 東京国立近代美術館（本館・工芸館）

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
「山田正亮 life and work 制作ノートを中心に」	企画課長・中林和雄	『東京国立近代美術館研究紀要』第17号	2013年3月31日
松田権六「優品之調査」	主任研究員・北村仁美	『東京国立近代美術館研究紀要』第17号	2013年3月31日
ミュージアム・オブ・アーツ・アンド・デザイン 1956-2008: 工芸/CRAFT の行方	主任研究員・木田拓也	『東京国立近代美術館研究紀要』第17号	2013年3月31日

(フィルムセンター)

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
関東大震災記録映画群の同定と分類—NFC 所蔵フィルムを中心として	研究員・大澤浄	『東京国立近代美術館 研究紀要』第 17 号	2013 年 3 月 31 日
『土』から『家』へ—その政治的権能の変遷に関する考察—	客員研究員・浅利浩之	『東京国立近代美術館 研究紀要』第 17 号	2013 年 3 月 31 日
フィルムセンター所蔵の小型映画コレクション 9.5mm フィルム調査の覚書	技能補佐員・郷田真理子	『東京国立近代美術館 研究紀要』第 17 号	2013 年 3 月 31 日

イ 京都国立近代美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
キュレトリアル・スタディズ 05 ニュー・バウハウスの写真家たち はじめに	研究員・牧口千夏	京都国立近代美術館研究論集 CROSS SECTIONS —VOL.5	2013 年 3 月 20 日

ウ 国立西洋美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
作品調査報告—ルドヴィーコ・カラッチ《ダリウスの家族》	主任研究員・高梨光正	国立西洋美術館 研究紀要 No.17	2013 年 3 月 31 日
ジャン・パオロ・パニーニの風景画に描かれた古代彫刻の同定	研究補佐員・飯塚隆	国立西洋美術館 研究紀要 No.17	2013 年 3 月 31 日
古代末期におけるキリスト教と異教の併存の一例—イタリア国ソマ・ヴェスヴィア—ナ在ローマ時代遺跡	リサーチフェロー・向井朋生	国立西洋美術館 研究紀要 No.17	2013 年 3 月 31 日

④ 館ニュース等の執筆

ア 東京国立近代美術館(本館・工芸館)

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
「ジャクソン・ポロック展におけるく表現+鑑賞」連続授	主任研究員・一條彰子	『現代の眼』593号	2012 年 4 月

	業のとりくみ」			
	「本館の教育普及事業」「独立行政法人国立美術館としての教育普及事業—指導者研修とアートカード」	主任研究員・一條彰子	『東京国立近代美術館 60 年史』	2012 年 12 月
	「開館六〇周年記念プログラム「だれでも MOMAT」」	主任研究員・一條彰子	『現代の眼』598 号	2013 年 2 月
	「須田国太郎が《書齋》の影に込めた想いとは？」	主任研究員・大谷省吾	『現代の眼』593 号	2012 年 4 月
	「12 月 1 日(土)開館記念日の催しのご案内」	主任研究員・大谷省吾	『現代の眼』596 号	2012 年 10 月
	「この六〇年に、何が「名品」として選ばれてきたか」	主任研究員・大谷省吾	『現代の眼』597 号	2012 年 12 月
	各展覧会概説	主任研究員・大谷省吾	『東京国立近代美術館 60 年史』	2012 年 12 月
	「作品研究 影と遠近法—荒川修作と高松次郎」	美術課長・蔵屋美香	『現代の眼』594 号	2012 年 6 月
	「平成 23 年度の新収蔵作品(美術作品)について」	美術課長・蔵屋美香	『現代の眼』596 号	2012 年 10 月
	「整理と壁面—所蔵品ギャラリーリニューアルで、建築家と美術館が考えたこと」	美術課長・蔵屋美香	『現代の眼』597 号	2012 年 12 月
	「本館のコレクションと所蔵作品展」「所蔵作品展における戦争画の展示」	美術課長・蔵屋美香	『東京国立近代美術館 60 年史』	2012 年 12 月
	「60 周年記念企画—夏期休館中の催しについて」	研究補佐員・柴原聡子	『現代の眼』594 号	2012 年 6 月
	展覧会予告「美術にぶるっ！ベストセレクション日本近代美術の 100 年」	主任研究員・鈴木勝雄	『現代の眼』595 号	2012 年 8 月
	「[所蔵作品展特集] 大下藤次郎から中西利雄へ—揺さぶられる水彩画」	主任研究員・都築千重子	『現代の眼』593 号	2012 年 4 月
	「コレクションの画像の保存と活用をめぐる—デジタル完全移行を見据えての共同研究プロジェクト始動」	主任研究員・都築千重子	『現代の眼』595 号	2012 年 8 月
	展覧会予告「吉川霊華展 近代に生まれた線の探究者」	主任研究員・鶴見香織	『現代の眼』593 号	2012 年 4 月
	「吉川霊華にまつわることごと：市田儀一郎氏に聞く」	主任研究員・鶴見香織	『現代の眼』594 号	2012 年 6 月
	「本館の企画展」	企画課長・中林和雄	『東京国立近代	2012 年 12 月

			美術館 60 年史』		
	「60 周年記念事業をふりかえって」	企画課長・中林和雄	『現代の眼』598号	2013 年 2 月	
	「作品研究 川合玉堂《小松内府図》について」	主任研究員・中村麗子	『現代の眼』598号	2013 年 2 月	
	「近代美術館における展示と建築」「建築展の変遷とその問題点」「『オルタナティブ・スペース』としてのギャラリー4」	主任研究員・保坂健二郎	『東京国立近代美術館 60 年史』	2012 年 12 月	
	「展覧会予告「フランス・ペーコン」	主任研究員・保坂健二郎	『現代の眼』597号	2012 年 12 月	
	「六〇周年記念特別展『美術にぶるっ！ベストセレクション 日本近代美術の 100 年』によせて」	研究員・榎田倫広	『現代の眼』596号	2012 年 10 月	
	「展覧会予告「写真の現在 4 そのときの光、そのさきの風」展	主任研究員・増田玲	『現代の眼』593号	2012 年 4 月	
	「平成 23 年度の新収蔵作品（美術作品）について」	主任研究員・増田玲	『現代の眼』596号	2012 年 10 月	
	「本館の写真コレクション」	主任研究員・増田玲	『東京国立近代美術館 60 年史』	2012 年 12 月	
	「東京国立近代美術館の 60 年」「カタログの学術性—『マチス展』のことなど」	副館長・松本透	『東京国立近代美術館 60 年史』	2012 年 12 月	
	「東京国立近代美術館 60 周年記念シンポジウム 近代美術館の誕生—前史から未来へ」	副館長・松本透	『現代の眼』598号	2013 年 2 月	
	「本館の情報資料事業」	主任研究員・水谷長志	『東京国立近代美術館 60 年史』	2012 年 12 月	
	「二冊の六〇周年記念刊行物—『60 年史』と『美術家たちの証言—東京国立近代美術館ニュース『現代の眼』選集』について」	主任研究員・水谷長志	『現代の眼』597号	2012 年 12 月	
	「60 周年記念企画—夏期休館中の催しについて」	主任研究員・三輪健仁	『現代の眼』594号	2012 年 6 月	
	「「ビデオを待ちながら：映像、60 年代から今日へ」展に	主任研究員・三輪健仁	『東京国立近代美術館 60 年	2012 年 12 月	

ついて」		史』	
「寿ぎ」のうつわ展解題	主任研究員・北村仁美	『現代の眼』598号	2013年2月1日
工芸館の教育普及事業	主任研究員・今井陽子	『東京国立近代美術館60年史』	2012年12月1日
展覧会予告「所蔵作品展 こども工芸館/おとな工芸館 植物図鑑」	主任研究員・今井陽子	『現代の眼』594号	2012年6月1日
おとな工芸館「植物図鑑」	主任研究員・今井陽子	植物図鑑展セルフガイド(児童対象)	2012年6月
こども工芸館「植物図鑑」	主任研究員・今井陽子	植物図鑑展セルフガイド(一般対象)	2012年6月
展覧会予告「現代の座標—工芸をめぐる11の思考—」	主任研究員・諸山正則	『現代の眼』595号	2012年8月1日
平成23年度の新収蔵作品(工芸作品)について	工芸課長・唐澤昌宏	『現代の眼』594号	2012年6月1日
工芸館の企画展	工芸課長・唐澤昌宏	『東京国立近代美術館60年史』	2012年12月1日
工芸館のデザインコレクション	主任研究員・木田拓也	『東京国立近代美術館60年史』	2012年12月1日

(フィルムセンター)

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
「日本映画が素晴らしい」という世界の声を聞こう	フィルムセンター主幹・岡島尚志	NFC ニューズレター第105号	2012年10月1日
映画保存の現在と未来(対談)	主幹・岡島尚志, 米議会図書館映画放送録音物部国立視聴覚保管センター(パッカード・キャンパス)チーフ	NFC ニューズレター第105号	2012年10月1日
日活映画——“世紀”の発見	主幹・岡島尚志	NFC ニューズレター第106号	2012年12月1日
映画監督・崔洋一の時代と個性	主幹・岡島尚志	NFC ニューズレター第107号	2013年2月1日
よみがえる大映イーストマン・カラー第一作	主任研究員・榎木章(執筆者名・とちぎあ)	NFC ニューズレター第102号	2012年4月1日

	きら)		
フィルムセンター相模原分館・映画保存棟Ⅱについて	主任研究員・栩木章 (執筆者名・とちぎあきら)	NFC ニューズレター第 103 号	2012 年 6 月 1 日
『幕末太陽傳』デジタル修復版をめぐる断想	主任研究員・栩木章 (執筆者名・とちぎあきら)	NFC ニューズレター第 105 号	2012 年 10 月 1 日
シネマテーク・スイスにおける「マックス・ランデー国際シンポジウム」報告	研究員・大傍正規	NFC ニューズレター第 106 号	2012 年 12 月 1 日
映画というのは自己完結するものではない(上) 崔洋一監督インタビュー	研究員・大澤浄[聞き手・構成]	NFC ニューズレター第 107 号	2013 年 2 月 1 日
戦後外国映画—《通俗》のよるこび	主任研究員・岡田秀則	NFC ニューズレター第 102 号	2012 年 4 月 1 日
101 年目の活動写真	主任研究員・岡田秀則	NFC ニューズレター第 104 号	2012 年 8 月 1 日
FIAF 北京会議報告 映画保存が創る新たなアニメーション史	主任研究員・岡田秀則	NFC ニューズレター第 104 号	2012 年 8 月 1 日

イ 国立西洋美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
ベルリン国立美術館展 学べるヨーロッパ美術の 400 年	主任研究員・高梨光正	ZEPHYROS 第 51 号	2012 年 5 月 20 日
報告 文化財レスキュー事業:東北の美術品・文化財を守る	学芸課長・村上博哉	ZEPHYROS 第 51 号	2012 年 5 月 20 日
小企画展「クラインマイスター:16 世紀前半ドイツにおける小画面の版画家たち」	研究員・中田明日佳	ZEPHYROS 第 51 号	2012 年 5 月 20 日
報告 2011 年度収蔵作品について	主任研究員・渡辺晋輔	ZEPHYROS 第 52 号	2012 年 8 月 20 日
寄附報告と購入作品 ブラングイン作《共楽美術館構想俯瞰図, 東京》—平成 23 年度寄附により購入した作品	主任研究員・大屋美那	ZEPHYROS 第 52 号	2012 年 8 月 20 日
報告 美術館で奉仕活動	主任研究員・寺島洋子	ZEPHYROS 第 52 号	2012 年 8 月 20 日
手の痕跡 国立西洋美術館	主任研究員・大屋美	ZEPHYROS 第	2012 年 11 月 20 日

所蔵作品を中心としたロダンとブールデルの彫刻と素描	那	53号	
『手の痕跡』展と同時開催！「Fun with Collection2012 彫刻の魅力を探る」「セイビまるごとお楽しみ！ FUN DAY 2012」	主任研究員・横山佐紀	ZEPHYROS 第53号	2012年11月20日
マックス・クリンガーの連作版画－尖筆による夢のシークエンス	研究員・新藤淳	ZEPHYROS 第53号	2012年11月20日
企画展「ラファエロ」	主任研究員・渡辺晋輔	ZEPHYROS 第54号	2013年2月20日

ウ 国立国際美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
国立国際美術館の写真コレクションについて	客員研究員・竹内万里子	国立国際美術館ニュース 第189号	2012年4月1日
報告:「Alternating Currents: Japanese Art after March 2011」	研究員・橋本梓	国立国際美術館ニュース 第189号	2012年4月1日
工藤哲巳入門(五)「インポ哲学」の誕生	学芸課長・島敦彦	国立国際美術館ニュース 第189号	2012年4月1日
[表紙] 館蔵品紹介	主任研究員・中井康之	国立国際美術館ニュース 第190号	2012年6月1日
報告 ワークショップ「顔が顔に会うための顔をつくる」	主任研究員・藤吉祐子	国立国際美術館ニュース 第190号	2012年6月1日
工藤哲巳入門(六)「インポ哲学」を引っ提げ、いざパリへ	学芸課長・島敦彦	国立国際美術館ニュース 第190号	2012年6月1日
工藤哲巳入門(七) 勇名を轟かせた「ハプニング男」の六〇年代	学芸課長・島敦彦	国立国際美術館ニュース 第191号	2012年8月1日
シンポジウム「写真の誘惑－視線の行方」を振り返って	客員研究員・竹内万里子	国立国際美術館ニュース 第192号	2012年10月1日
工藤哲巳入門(八) 箱の中の「あなたの肖像」	学芸課長・島敦彦	国立国際美術館ニュース 第192号	2012年10月1日

THIS IS A FILM — 柏原えつとむの映像作品—	客員研究員・森下明彦	国立国際美術館ニュース 第193号	2012年12月1日
工藤哲巳入門(九) 消滅する肉体—変異する人類	学芸課長・島敦彦	国立国際美術館ニュース 第193号	2012年12月1日
工藤哲巳入門(十) 「脱皮」の記念品・郷愁病用・あなたの居間に	学芸課長・島敦彦	国立国際美術館ニュース 第194号	2013年2月1日
写真と記憶	主任研究員・植松由佳	「国立国際美術館開館35周年記念シンポジウム『写真の誘惑—視線の行方』記録集」	2012年12月25日

エ 国立新美術館

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名	発行年月日
「『具体』—ニッポンの前衛18年の軌跡」展関連シンポジウム「『具体』再評価の過去と現在」抄録	研究員・山田由佳子	『国立新美術館ニュース』No.23	2012年8月31日
「国立新美術館の情報検索サービスの展開—展覧会情報と書誌情報のリンク」	主任研究員・室屋泰三	『国立新美術館ニュース』No.23	2012年8月31日
「マイ・フェイヴァリッツ 私の好きな作品 辰野登恵子×柴田敏雄」	学芸課長・南雄介	『国立新美術館ニュース』No.24	2012年11月30日
南北の往復から見るセザンヌ—展覧会史における「セザンヌ—パリとプロヴァンス」展の意義	アソシエイトフェロー・工藤弘二	シンポジウム「セザンヌ—パリとプロヴァンス」展から見る今日のセザンヌ 記録集	2013年3月15日

国内外の美術館等との連携

① シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築

ア 東京国立近代美術館

(本館・工芸館)

セミナー・シンポジウム名	東京国立近代美術館 60周年記念シンポジウム 近代美術館の誕生	開催日	平成24年12月1日
--------------	---------------------------------	-----	------------



	—前史から未来へ		
場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数	117人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	木下直之(東京大学教授), 五十殿利治(筑波大学教授), 高橋裕次(東京国立博物館学芸企画部博物館情報課長), 水沢勉(神奈川県立近代美術館長), 島田紀夫(ブリヂストン美術館長), 松本透(東京国立近代美術館副館長), 蔵屋美香(東京国立近代美術館美術課長)		
セミナー・シンポジウム名	戦後日本美術の新たな語り口を探る—ニューヨークと東京、二つの近代美術館の展覧会を通して見えてくるもの	開催日	平成24年12月23日
場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数	145人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ドリュン・チョン(ニューヨーク近代美術館アソシエイト・キュレーター), ガブリエル・リッター(ダラス美術館アシスタント・キュレーター), 林道郎(上智大学国際教養学部教授), 前山裕司(埼玉県立近代美術館主席学芸主幹), 鈴木勝雄(東京国立近代美術館主任研究員)		
セミナー・シンポジウム名	オリエンタル・モダニティ: 東アジアのデザイン史 1920-1990	開催日	平成24年7月15日
場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数	90人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	樋田豊郎(秋田公立美術短期大学学長), 菊池裕子(ロンドン芸術大学教授), リン・ウェッシー(ロンドン芸術大学准教授), リー・ユナ(ブライトン大学准教授), 菅靖子(津田塾大学准教授), 木田拓也(東京国立近代美術館主任研究員), 井口壽乃(埼玉大学教授)		

(フィルムセンター)

セミナー・シンポジウム名	世界のアニメーション	開催日	平成24年4月23日, 24日
場所	中国電影資料館劇場(中国・北京)	聴講者数	150人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	フィルムセンターから出席した岡島尚志(フィルムセンター主幹), 棚本章(フィルムセンター主任研究員), 岡田秀則(フィルムセンター主任研究員)を含む11の国・地域から参加した26名の講師・パネリスト		

イ 京都国立近代美術館

セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「近代日本画と工芸 1868-1945」	開催日	平成25年2月26日
場所	ローマ日本文化会館	聴講者数	約50人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	尾崎正明(館長), 松原龍一(主任研究員)		

ウ 国立西洋美術館

セミナー・シンポジウム名	国際シンポジウム「時の作用と美	開催日	平成24年4月14日
--------------	-----------------	-----	------------

ウム名	学」		
場所	国立西洋美術館講堂	聴講者数	85人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	高階秀爾(大原美術館館長), 小佐野重利(東京大学教授), バルテレミ・ジョベール(パリ第4大学教授), ギョーム・ファルー(ルーヴル美術館キュレーター), 三浦篤(東京大学教授), 阿部成樹(中央大学教授), 陳岡めぐみ(国立西洋美術館主任研究員)		
セミナー・シンポジウム名	彩色文化遺産の有機物質の分析に関するシンポジウム	開催日	平成25年1月7日
場所	東京文化財研究所 地下会議室	聴講者数	70人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	谷口陽子(筑波大学・助教), Joy Mazurek(Getty保存研究所・Assistant Scientist), 島津美子(東京文化財研究所・特別研究員), 中澤隆(奈良女子大学・教授), 高嶋美穂(国立西洋美術館・研究補佐員)		

### エ 国立国際美術館

セミナー・シンポジウム名	歴代館長によるシンポジウム「国立国際美術館のこれまでとこれから」	開催日	平成24年4月28日
場所	国立国際美術館地下1階講堂	聴講者数	68人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	司会: 山梨 俊夫(国立国際美術館館長) パネリスト: 木村重信(美術評論家・国立国際美術館元館長), 宮島久雄(高松市美術館館長・国立国際美術館元館長), 建畠哲(京都市立芸術大学学長・埼玉県立近代美術館館長・国立国際美術館前館長)		
セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「写真の誘惑－視線の行方」	開催日	平成24年5月12日・13日
場所	国立国際美術館地下1階講堂	聴講者数	758人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	司会: 植松由佳(国立国際美術館主任研究員), 竹内万里子(国立国際美術館客員研究員) パネリスト: 青山勝(大阪成蹊大学芸術学部准教授), 五十嵐太郎(東北大学教授), 笠原美智子(東京都写真美術館事業企画課長), 加治屋健司(広島市立大学芸術学部准教授), 佐藤守弘(京都精華大学デザイン学部准教授), 島敦彦(国立国際美術館学芸課長), 管啓次郎(比較文学者, 詩人), 鈴木理策(写真家), 鷹野隆大(写真家), 畠山直哉(写真家), プブ・ド・ラ・マドレーヌ(現代美術作家), 前田恭二(読売新聞文化部記者), 森村泰昌(美術家), ヨコミゾマコト(建築家), 米田知子(写真家)		

### オ 国立新美術館

セミナー・シンポジウム名	「『セザンヌーパリとプロヴァンス』展から見る今日のセザンヌ」	開催日	平成24年5月26日
場所	国立新美術館	聴講者数	188人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	永井隆則(京都工芸繊維大学准教授), 工藤弘二(国立新美術館アソシエイト・フェロー), 三浦篤(東京大学教授), 新畑泰秀(石橋財団ブリヂストン美術		

	館学芸課長)		
セミナー・シンポジウム名	「現代ロシアとエルミタージュ美術館」	開催日	平成 24 年 6 月 3 日
場所	国立新美術館	聴講者数	166 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	沼野充義(東京大学教授, ロシア・東欧文学者), 鴻野わか菜(千葉大学准教授, ロシア文学者), 青木保(当館館長)		
セミナー・シンポジウム名	「『具体』再評価の過去と現在」	開催日	平成 24 年 7 月 14 日
場所	国立新美術館	聴講者数	105 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	河崎晃一(インディペンデント・キュレーター), ミン・ティアンポ(カールトン大学准教授, グッゲンハイム美術館「具体」展共同キュレーター), マテイヤス・フィッサー(ゼロ・ファンデーション設立ディレクター), 萬木康博(美術評論家), 平井章一(当館学芸課主任研究員)		

## ②我が国の作家, 美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力

### ア 東京国立近代美術館

本館では, 「Yayoi Kusama」(2012 年 2 月 1 日-5 月 20 日, テートモダン, ロンドン/6 月 20 日-9 月 20 日 ホイットニー美術館, ニューヨーク), 「William Klein + Daido Moriyama: New York + Tokyo + Film + Photo」(2012 年 10 月 10 日-2013 年 1 月 13 日, テートモダン, ロンドン), 「Drawing Surrealism, 1915-1945」(2012 年 10 月 21 日-2013 年 1 月 6 日, ロサンゼルス・カウンティ美術館/2013 年 1 月 25 日-5 月 12 日, モルガン図書館・美術館, ニューヨーク), 以上の海外展について, 日本人作家の作品を貸与し, その開催に協力した。

また, 広くアジアの近代美術を収集・展示する計画のシンガポール新美術館(2015 年開館予定)と, 日本近代美術作品の展示について, そのコンセプト, 貸与の実現等に向け, 協議を行った。

さらに, 「国吉康男展」開催準備のため, (公財)直島福武美術館財団, Smithsonian American Art Museum の作品調査に協力した。

工芸館では, 文化庁, イタリア・フィレンツェ国立美術監督局とともに主催したピッツィ宮殿「白の間」における「日本のわざと美—近現代工芸の精華—」展開催に当たり, 同宮殿内の銀器博物館等と連携・協力を行った。

フィルムセンターでは, チネテカ・デル・コムーネ・ディ・ボローニャ(FIAF 加盟機関)との共催による第 26 回チネマ・リトロバート映画祭・特集企画「日本が声を上げる! 陽が昇る地から来た最初のトーキー映画」において, レコードトーキーや活弁トーキーなどのユニークなサウンド形式を持つ作品を含む 13 本の映画フィルム(うち 1 本は, 外国映画に日本語による活弁を付したフィルム)を, すべて英語字幕付きで上映し, 映画の音に挑んだ日本の映画

	<p>監督や技術者による多彩な試みについて、映画祭に参加した世界各国の研究者やアーティストの認識を高めることができた。本番組の一部はその後、ニューヨーク近代美術館(FIAF加盟機関)からの貸与申請を受け、同館が主催する第10回国際映画保存映画祭にて上映が行われた。</p> <p>また、平成23年度、共催によりアメリカ及びフランスの3会場で実施した『日活百年』海外巡回上映会について、平成24年度はオーストラリア国立映画音響アーカイブ(FIAF加盟機関)をはじめとして8カ国、10会場に対し、計38本の映画フィルムを貸与することにより、上映会への協力を行った。</p> <p>イ 京都国立近代美術館</p> <p>当館と国際交流基金との共催で、ローマ国立近代美術館において「近代日本画と工芸の流れ 1868-1945」展を開催し(2013年2月26日から5月5日まで)、当館の尾崎正明館長及び松原龍一主任研究員が、企画及び作品選定を担当した。これは当館をはじめ国内の美術館ほか所蔵する我が国の日本画・工芸作品計170点によって構成されたものであり、我が国の近代美術作品を海外で紹介する貴重な機会となった。また、開会初日には、上記の国際シンポジウムも開催した(パネラーは日本から3名、イタリアから2名)。</p> <p>ウ 国立国際美術館</p> <p>平成25年度開催予定の「あなたの肖像－工藤哲巳回顧展」の準備のため、ニューヨーク近代美術館で開催した企画展「TOKYO 1955-1970－A NEW AVANT」の調査を行い、成果を共有し連携協力した。</p>	
--	--	--

【(小項目)1-1-6】	観覧環境の提供						【評定】			
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】							A			
(6) 快適な観覧環境の提供							H23		H26	H27
①-1 高齢者、障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な鑑賞環境の形成のために展示方法・外国語表示・動線等の改善、施設整備の計画的な実施に取り組む。 ①-2 展示や解説パネルを工夫するとともに、音声ガイド等を導入するなど、鑑賞しやすさ、理解のしやすさに取り組む。 ② 入館者を対象とする満足度調査を定期的実施し、入場料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善に取り組む。 ③ 入館者にとって快適な空間となるよう、利用者ニーズを踏まえてミュージアムショップやレストラン等の充実を図る。							A			
							実績報告書等 参照箇所			
							<実績報告書> P33~37 (6) 快適な観覧環境の提供 ① 高齢者、身体障害者、外国人等への対応 ② 展示、解説の工夫と音声ガイドの導入 ③ 入場料金、開館時間等の弾力化 ④ キャンパスメンバーズ制度の実施 ⑤ ミュージアムショップ、レストラン等の充実			
【インプット指標】										
(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24				
決算額(百万円)	1,900	1,861	1,714	1,815	1,698	1,947				
従事人員数(人)	75	70	71	70	69	64				
1) 決算額は損益計算書 展覧事業費を計上している。(本項目は展覧事業費の一部であり、個別に計上できないため、展覧事業費全額を計上している。) 2) 従事人員数は、すべての研究職員数及び事業担当事務職員を計上している。その際、役員及び事業担当を除く事務職員は勘案していない。										
評価基準	実績						分析・評価			
○ 高齢者、身体障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な鑑賞環境の形成のために展示方法・外国語表示・動線等の改善、施設整備の計画的な実施に取り組んだか。	① 高齢者、身体障害者、外国人等への対応 平成 23 年度に引き続き、各館とも次のような対応を実施している。 ・多目的(身体障害者用)トイレ、エレベータ(エスカレーター)、スロープ(手摺り)の設置 ・車椅子、ベビーカー(国立西洋美術館は除く)の貸出 ・身体障害者用駐車スペース(国立国際美術館は除く)の提供 ・自動体外式除細動器(AED)の設置 ・盲導犬、介助犬の同伴による観覧 ・多言語による館案内表示 ・多言語による館内リーフレット、ミュージアムカレンダー等の配布 ・所蔵作品展(常設展)、企画展(一部を除く)において、作品リスト(日・英)の配布						高齢者、身体障害者、外国人等への対応は、適切になされており、特に筆談ボードの設置は評価できる。			

<p>○ 展示や解説パネルを工夫するとともに、音声ガイド等を導入するなど、鑑賞しやすさ、理解のしやすさに取り組んだか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観覧者の休憩のための椅子を展示室に配置</li> <li>・オストメイト(人工肛門, 人工膀胱保有者)用の設備を設置</li> <li>・キャプションに英語表記を併記</li> <li>・英語版ホームページの公開</li> <li>・東京国立近代美術館(フィルムセンターは平成 23 年 12 月より), 国立西洋美術館においては, 東京都が実施する「ウェルカムカード」に参加し, 外国人来館者の所蔵作品展観覧料を割引</li> <li>・東京国立近代美術館本館では, 所蔵作品展「MOMAT コレクション」英語版音声ガイドを導入</li> <li>・国立西洋美術館では, インフォメーションカウンターに筆談ボードを設置</li> <li>・国立国際美術館では, 貸出用拡大鏡 16 個を設置するとともに, 授乳室及び安全仕様のキッズルームを地下1階に設置し, 幼児向け絵本 400 冊を常設</li> <li>・国立新美術館では, 授乳室(地下1階)の設置, 点字ブロック(正門から正面入口, 地下鉄口から西入口(インターホンを設置))及び点字表示(エレベータ内他)の設置, 補聴器等への磁気誘導無線システムの講堂内への設置(専用受信機10台), ロビー等の館内ディスプレイでの展覧会や講演会等の情報表示, 託児サービスの実施並びに文字を大きくし, 見易やすくしたフロアガイド「大きな文字の利用案内」の館内配布とともに, 平成24年度は新たに館内の各インフォメーションに筆談ボードを設置</li> </ul> <p><b>② 展示、解説の工夫と音声ガイドの導入</b></p> <p>各館とも次のような対応を実施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・共催展における音声ガイドの導入</li> <li>・館内リーフレット, フロアプラン, ミュージウムカレンダー等の配布</li> </ul> <p>その他, 東京国立近代美術館本館においては, 所蔵作品展で「重要文化財」のキャプション表示やホームページに重要文化財作品の解説ページを引き続き設置するとともに, 所蔵作品展のための英語版音声ガイドの貸出しを行った。</p> <p>平成 24 年度に行った所蔵品ギャラリーのリニューアルでは, 2~4 階の順路を整理した上で, 館内サインを拡大・多言語化し, 高齢者, 身体障害者及び外国人等を含むすべての来館者がスムーズに観覧できるようにした。また, 和英ともにホームページを大幅に拡充した。</p> <p>工芸館では, キャプションサイズの拡大, 作品名のふりがな及び素材・技法を記載した。</p> <p>フィルムセンターでは, 常設展「NFC コレクションでみる 日本映画の歴史」において, 児童・生徒向けの「ジュニア・セルフガイド」を配布した。</p> <p>国立西洋美術館においては, 企画展において, 児童・生徒向けの「ジュニア・パスポート」を配布したほか, 国立西洋美術館本館の建築探検マップ(日・英・仏・韓・中国語版)や館広</p>	<p>展示、解説パネル、音声ガイドは適切に措置されており、特に、所蔵品に関する英語版の音声ガイドの運用は、重要文化財のキャプションとともに充実しており、評価できる。</p> <p>今後は、教育普及の一環として、小電力型ラジオマイク・システムなど新しい展示解説機器等の導入・運用が求められる。</p>
---	--	---

<p>○ 入館者を対象とする満足度調査を定期的 に実施し、入場料金及び開館時間の弾力 化などの管理運営の改善に取り組んだ か。</p>	<p>報(国立西洋美術館ニュース Zephyros の最新号及びバックナンバー)の配布及びホーム ページ掲載を行うとともに、常設展ガイドとして利用できる iPhone/iPod Touch・Android 携 帯端末専用アプリ「Touch the Museum」の無料配信を行った。また、企画展の解説パネル を、見易やすいように拡大文字の冊子に加工し、展示室内に配置したほか、版画展開催の 際には、版画の技法を説明した小冊子を展示室内に配置した。</p> <p>国立国際美術館においては、作品紹介キャプションをより見やすくするよう努めた。</p> <p>国立新美術館においては、「「具体」—ニッポンの前衛 18 年の軌跡」鑑賞ガイド『アートのと びら 国立新美術館ガイドブック vol.7』(日英併記)、「アーティスト・ファイル 2013—現代 の作家たち」鑑賞ツール「ちいさなアーティスト・ファイル 2013」(日英併記)及び「カリフォル ニア・デザイン 1930-1965—モダン・リビングの起源—」鑑賞ガイド「国立新美術館ガイドブ ック ハロー！カリフォルニア・デザイン」を配布した。</p> <p><b>③ 入場料金、開館時間等の弾力化</b></p> <p>入館者の展覧会に対しての観覧料や開館時間について、展覧会毎に実施しているアン ケート調査の中で満足度調査を実施した。アンケート結果を踏まえて、入場料金及び開館 時間の弾力化に取り組んだ。</p> <p>各館共通の取組については以下のとおりである。</p> <p>文化の日(11月3日、国立新美術館を除く)及び国際博物館の日(5月18日、東京国立 近代美術館フィルムセンターの上映会を除く。)の所蔵作品展(常設展)の観覧料を無料に するとともに、夜間開館の実施、年始やゴールデンウィーク等休館日の臨時開館を実施し た。また、所蔵作品展及び自主企画展の高校生以下及び 18 歳未満の者の観覧料の無料 化についての周知に努めた。</p> <p>その他平成 24 年度の各館の取組は以下のとおりである。</p> <p>(ア)東京国立近代美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・開館 60 周年を記念して、誕生日当日の来館者(誕生日を証明できるものを提示)に対 して所蔵作品展及び企画展すべての無料観覧を実施</li> <li>本館:平成 24 年 2 月 3 日～平成 25 年 1 月 14 日</li> <li>工芸館:平成 24 年 2 月 7 日～平成 25 年 1 月 14 日</li> <li>フィルムセンター:平成 24 年 2 月 7 日～平成 25 年 2 月 3 日(上映会を含む)</li> <li>・開館記念日(平成 24 年 12 月 1 日)には、展覧会の無料観覧を実施(フィルムセンターの 上映会を除く)</li> <li>・本館、工芸館では、東京メトロ、都営地下鉄ワンデーパスによる観覧料割引</li> <li>・本館・工芸館では、「東京マラソン 2013」イベントガイド持参者は、所蔵作品展の観覧料 (個人一般)を割引</li> </ul>	<p>入館料、開館時間については、アンケ ート調査を踏まえ、文化の日、国際博物 館の日における所蔵作品展の無料化、 高校生以下及び18歳未満者の無料化、 夜間開館、年始・ゴールデンウィーク等の 臨時開館など、管理運営の改善に取り組 んでおり、評価できる。さまざまな機会 で臨機応変にサービスが行われている点 は、入館者へのソフトなサプライズとし て単なる便宜サービス以上のメッセージと なっている。</p> <p>また、展覧会ごとに様々なサービスを行 うとともに、キャンパスメンバーズ制度を 活用した、大学生へのサービスの拡充も 評価できる。</p>
---	--	---

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本館では、年始は1月2日から開館し、図録やオリジナルグッズをプレゼント</li> <li>・本館では、共催展においてペア観覧券等による観覧料割引</li> <li>・本館では、千代田区「秋まつり 2012 公式ガイドマップ」持参者は「美術にぶるっ！展」を、また、「桜まつり 2013 公式ガイドマップ」持参者は「フランス・ベーコン展」の観覧料金を割引</li> <li>・工芸館では、千代田区「桜まつり 2013 公式ガイドマップ」持参者は、所蔵作品展の観覧料金(個人一般)を割引</li> <li>・「ジャクソン・ポロック展」において、政府による美術品補償制度適用の国民への還元策として、平成24年2月から4月の日曜日(12日間)及び祝日(3日間)の15日間(平成24年度は6日間)について、高校生の無料観覧を実施</li> <li>・「フランス・ベーコン展」において、政府による美術品補償制度適用の国民への還元策として、平成25年3月から4月の土曜日、日曜日の16日間(平成24年度は8日間)について、高校生の無料観覧を実施</li> </ul> <p>(イ)国立西洋美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クレジットカード及び電子マネー(Suica 及び PASMO)による観覧券の窓口販売</li> <li>・春の企画展開催日から秋の企画展閉会日までの開館時間を30分延長し、午後5時30分まで開館</li> <li>・「夏休み子供音楽会 2012《上野の森文化探検》」(主催:東京文化会館(公益財団法人東京都歴史文化財団)ほか)に参画し、音楽会参加者について常設展の無料観覧を実施(期間:平成24年7月22日のみ)</li> <li>・教育普及プログラム「ファン・デー」の開催に伴い、常設展及び「手の痕跡」展の無料観覧を実施(期間:平成24年11月10日、11日のみ)</li> <li>・「ベルリン国立美術館展」において、政府による美術品補償制度の適用を想定し、高校生料金を同規模の企画展より安価に設定し、料金を500円としたほか、平成24年7月21日から8月5日の14日間について、高校生の無料観覧を実施</li> <li>・「ベルリン国立美術館展」について、ペア観覧券等による観覧料割引を実施</li> <li>・「ラファエロ」展において、政府による美術品補償制度の還元策として、平成25年3月22日から3月31日の9日間について、高校生の無料観覧を実施(高校生観覧料の無料化は平成25年4月7日まで、計15日間実施)</li> <li>・上野の山文化ゾーンフェスティバル 20周年記念「上野の山ナイトミュージアム」(主催:上野の山文化ゾーン連絡協議会)に参画し、21時まで開館時間を延長(期間:平成24年10月20日のみ)</li> </ul> <p>(ウ)国立国際美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎月第一土曜日に、所蔵作品展のみ観覧料の無料化(B2F)</li> <li>・関西文化の日(11月17日、18日)に、所蔵作品展の観覧料の無料化(B2F)</li> </ul>	
--	--	--



<p>○ 入館者にとって快適な空間となるよう、利用者ニーズを踏まえてミュージアムショップ</p>	<p>(エ) 国立新美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クレジットカード及び電子マネー(Suica 及び PASMO)による観覧券の窓口販売</li> <li>・「平成 24 年度[第 16 回]文化庁メディア芸術祭」の無料観覧</li> <li>・六本木アート・トライアングル参加館との観覧料の相互割引及び共通マップの作成・配布</li> <li>・公募団体展と企画展の観覧料の相互割引</li> <li>・東京メトロ、都営地下鉄ワンデーパスによる観覧料割引</li> <li>・共催展において、ペア観覧券等による観覧料割引</li> <li>・共催展において、高校生無料観覧日の設定を推進</li> <li>・「セザンヌ―パリとプロヴァンス」において、政府による美術品補償制度の還元策として、平成 24 年 3 月 28 日から 4 月 8 日までの 12 日間(平成 24 年度は 8 日間)、及び 4 月 14 日から 30 日までの土・日・祝日(7 日間)について、高校生の無料観覧を実施</li> <li>・「リヒテンシュタイン 華麗なる侯爵家の秘宝」において、政府による美術品補償制度の還元策として、平成 24 年 10 月から 11 月の土・日・祝日(18 日間)について、高校生の無料観覧を実施</li> <li>・「六本木アートナイト 2013」(平成 25 年 3 月 23 日～24 日)において、3 月 23 日の「アーティスト・ファイル 2013—現代の作家たち」及び「カリフォルニア・デザイン 1930-1965—モダン・リビングの起源—」展の開館時間を 22 時まで延長し、観覧料を無料化</li> <li>・5 月 1 日(火)に臨時開館を実施</li> </ul> <p>④ キャンパスメンバーズ制度の実施</p> <p>平成 18 年 12 月に規則を制定し、国立美術館全体の事業として発足した、大学、短期大学、高等専門学校及び専修学校等を対象とした会員制度「国立美術館キャンパスメンバーズ」については、平成 24 年度においてメンバー校は新規 8 校を加え 78 校、各館利用者数は 76,180 名となった。また、平成 22 年度にパソコン版、平成 23 年度にモバイル版を開設したキャンパスメンバーズ入会校学生向け特設サイトにおいて、各館の展覧会情報を提供するとともに、サイトを周知するためのポスター及びチラシを加入校に配布するなど、利用促進に努めた。</p> <p>東京国立近代美術館フィルムセンターでは、東京国立近代美術館フィルムセンター・大学等連携事業を新たに始め、国立美術館キャンパスメンバーズの加盟校(東京国立近代美術館利用校)が、フィルムセンターの所蔵映画フィルムと施設を利用して講義等を行うための整備を行い、4 回の講義を実施したほか、大学等の学生が、フィルムセンターで映画の上映会または展覧会を観覧したことを証明する「鑑賞証明カード」の配付を開始した。</p> <p>⑤ ミュージアムショップ、レストラン等の充実</p> <p>ミュージアムショップについては、所蔵作品の図版を使用したポストカードや図柄を活用し</p>	<p>ミュージアムショップ、レストラン等の付帯設備は、かなり改善され・配慮されてお</p>
--	---	---

<p>やレストラン等の充実を図ったか。</p>	<p>たオリジナルグッズの開発に努め、ホームページにおいて展覧会図録やグッズの情報を紹介するなど広報宣伝を行った。また、レストランについては、企画展にちなんだ特別メニュー等を提供した。</p> <p>東京国立近代美術館本館では、平成 23 年度のピンバッジに続き、ホルダー付き記念切手、トートバック、T シャツなどの 60 周年記念グッズを販売した。また、レストランでは、「美術にぶるっ！展」及び「フランス・ベーコン展」にちなんだ特別メニューや、皇居周辺の桜をテーマにした「桜プレート」など季節にちなんだメニューを開発し提供した。</p> <p>京都国立近代美術館では、幅広い客層から満足を得られるよう、単価・内容を吟味しつつ、多様な商品を展開するよう取り組むとともに、開館 50 周年記念展に合わせ、「上野リチ」オリジナルグッズを企画、作成した。展覧会毎に内容に関連した書籍を充実させ、アートグッズも絶えず新商品を取り入れ、リピーターからも満足してもらえるように仕入れを行った。また、レストランでは、春夏と秋冬でメニューを入れ替え、京都の旬の食材を使った手作りのメニューを提供するとともに、企画展に合わせたテーマランチやテーマデザートの提供を行った。</p> <p>国立西洋美術館では、販売品の充実のため、例年に引き続きオリジナルグッズの開発を行った。平成 24 年度の主な新商品として、ゴッホ「ばら」をモチーフにしたアクセサリーや最新技術の色調校正で作品の色を再現した所蔵作品図版のオリジナル卓上カレンダー、ル・コルビュジエが設計した本館建築図面を元に立体再現をしたペーパークラフトなどを販売した。また、レストランでは、各企画展に関連したメニューを開発し、提供した。</p> <p>国立国際美術館では、所蔵作品の絵葉書、封筒、T シャツや、美術館のロゴ入りマグカップ、T シャツ、キーホルダーなどオリジナルグッズの充実のほか、企画展に合わせて、出版作家に関連した書籍、DVD の販売を行い、来館者のニーズに合わせた運営を行った。また、レストランでは、運営会社を変更し、メニューの種類を増やす等により充実させた。</p> <p>国立新美術館では、ミュージアムショップと連携し、ショップ内のギャラリーの展示について企画協力を行った。「与えられた形象—辰野登恵子/柴田敏雄」及び「カリフォルニア・デザイン 1930-1965—モダン・リビングの起源—」展において、外部事業者の企画によるミュージアムショップを設置し、自主企画展におけるミュージアムショップの充実を図った。また、レストランでは、来館者からの意見等について、業者と協議し、一部メニューの変更を実施するとともに、共催展にゆかりのある特別メニューを企画し、提供した。さらに、「六本木アートナイト 2013」(平成 25 年 3 月 23 日～24 日)では、3 月 23 日の営業時間を 22 時まで延長し、利用者にオリジナルポストカードやオリジナルキャンバスバッグのプレゼント企画を実施するとともに、レストランを会場として使用し、アーティストと空間をともにし、語り、食事ができる「六本木夜楽会(ろくほんもくよらくえ)」と題するアートナイトのプログラムを実施した。</p>	<p>り、引き続き快適な空間にするような努力を期待する。</p> <p>ミュージアムショップについては、情報化社会を視野におき、ナショナル・センターとしての新しい理念に基づく能動的かつ魅力的な美術館の空間作りに取り組むことが期待される。</p>
-------------------------	--	--

【(中項目)1-2】	2. 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承	【評定】			
		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			

【(小項目)1-2-1】	<b>収蔵品の収集</b> <b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b> (1)-1 国民に対して多様な鑑賞機会を提供するとともに、国内外の美術館活動の活性化に資するため、各種制度を有効に活用し、ナショナルコレクションの形成を図る。その際の各館の役割・任務に沿った収集方針は、次に掲げるとおりとし、その収集方針に沿って、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の蓄積を図る。 なお、美術作品の収集に当たっては、その美術史的価値や意義等についての外部有識者の意見等を踏まえ、適宜適切な購入を図る。 また、収集活動を適時適切に行うために、美術作品の動向に関する情報の入手と機動性の向上に取り組む。 (東京国立近代美術館) 近・現代の絵画、版画・水彩・素描、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。 美術・工芸に関しては近代美術全般の歴史的な所蔵作品の展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。 また、映画フィルム等については、残存するフィルムの収集に取り組むとともに積極的に復元を図る。 (京都国立近代美術館) 近代美術史における重要な美術作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。 その際、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した所蔵作品の充実を図る。 (国立西洋美術館) 中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可能となるように、松方コレクションを中心とした近代フランス美術の充実、近世ヨーロッパ絵画の充実及びヨーロッパ版画の系統的収集を行う。 (国立国際美術館) 日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、国際的な交流が極めて盛んになった1945年以降の国内外の美術並びに同時代の先端的な美術を中心に、総合的な影響関係を踏まえつつ、体系的に収集する。 (1)-2 所蔵作品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用に努める。 (1)-3 各館の収集方針に則しつつ、緊密な情報交換と連携を図りながら、国立美術館全体のコレクションの充実を図る。	【評定】			
		A			
		H23	H24		
A					
実績報告書等 参照箇所					
<実績報告書> P37～40 2 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承 (1)美術作品の収集					

【インプット指標】

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	1,034	1,134	2,093	1,694	1,668	2,985
従事人員数(人)	52	51	51	49	49	47

1) 決算額は固定資産の取得、処分、減価償却費及び減損損失累計額の明細における美術工芸品の当期増加額から寄贈による資産の取得額を減じた額を計上している。

2) 従事人員数は、国立新美術館を除くすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価																																																																														
<p>○ 各館の収集方針に沿って、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の蓄積を図ったか。</p> <p>なお、美術作品の収集に当たっては、その美術史的価値や意義等についての外部有識者の意見等を踏まえ、適宜適切な購入を図ったか。</p> <p>また、収集活動を適時適切に行うために、美術作品の動向に関する情報の入手と機動性の向上に取り組んだか。</p> <p>○ 所蔵作品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用に努めたか。</p> <p>○ 各館の収集方針に則しつつ、緊密な情報交換と連携を図りながら、国立美術館全体のコレクションの充実を図ったか。</p>	<p><b>美術作品の収集</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>購入点数</th> <th>購入金額(千円)</th> <th>寄贈点数</th> <th>年度末所蔵作品数</th> <th>年度末寄託品数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館</td> <td>123</td> <td>269,919</td> <td>31</td> <td>12,344<sup>※1</sup></td> <td>235</td> </tr> <tr> <td>工芸館</td> <td>2</td> <td>63,000</td> <td>54</td> <td>3,288<sup>※2</sup></td> <td>108</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>67</td> <td>829,964</td> <td>327</td> <td>11,401</td> <td>819</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>17</td> <td>953,443</td> <td>811</td> <td>5,521</td> <td>122</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>102</td> <td>742,398</td> <td>228</td> <td>7,016</td> <td>132</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>311</td> <td>2,858,724</td> <td>1,451</td> <td>39,570</td> <td>1,416</td> </tr> </tbody> </table> <p>※1 東京国立近代美術館本館では、『東京国立近代美術館 60 年史』の編纂を契機として、所蔵作品の計数方法等の見直しを行った。</p> <p>※2 東京国立近代美術館本館では、『東京国立近代美術館 60 年史』の編纂を契機として、所蔵作品の計数方法等の見直しを行った。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>購入本数</th> <th>購入金額(千円)</th> <th>寄贈本数</th> <th>年度末所蔵本数</th> <th>年度末寄託品本数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館(フィルムセンター)</td> <td>247</td> <td>114,092</td> <td>1,523</td> <td>67,287</td> <td>8,018</td> </tr> </tbody> </table> <p><b>【美術作品の収集 過去の実績】</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>H18</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H21</th> <th>H22</th> <th>H23</th> <th>H24</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>購入点数</td> <td>318</td> <td>174</td> <td>311</td> <td>400</td> <td>286</td> <td>674</td> <td>311</td> </tr> <tr> <td>購入金額(千)</td> <td>762,373</td> <td>817,359</td> <td>832,117</td> <td>836,660</td> <td>1,375,962</td> <td>1,382,245</td> <td>2,037,301</td> </tr> </tbody> </table>	館名	購入点数	購入金額(千円)	寄贈点数	年度末所蔵作品数	年度末寄託品数	東京国立近代美術館	123	269,919	31	12,344 <sup>※1</sup>	235	工芸館	2	63,000	54	3,288 <sup>※2</sup>	108	京都国立近代美術館	67	829,964	327	11,401	819	国立西洋美術館	17	953,443	811	5,521	122	国立国際美術館	102	742,398	228	7,016	132	計	311	2,858,724	1,451	39,570	1,416	館名	購入本数	購入金額(千円)	寄贈本数	年度末所蔵本数	年度末寄託品本数	東京国立近代美術館(フィルムセンター)	247	114,092	1,523	67,287	8,018		H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	購入点数	318	174	311	400	286	674	311	購入金額(千)	762,373	817,359	832,117	836,660	1,375,962	1,382,245	2,037,301	<p>収蔵品の収集については、購入、寄贈ともに全体として、体系的・通史的にバランスのとれたコレクションの充実に努めており、評価できる。</p> <p>関西の歴史的な個人コレクションの購入と受贈や、価値ある作品情報の収集によって、海外流失を防ぎ、収蔵できたことは評価したい。</p> <p>今後も国立美術館5館の全体として、ナショナルコレクションとして体系的であるべきであり、さらに国際的に誇りうる水準とするような努力が求められる。</p>
館名	購入点数	購入金額(千円)	寄贈点数	年度末所蔵作品数	年度末寄託品数																																																																											
東京国立近代美術館	123	269,919	31	12,344 <sup>※1</sup>	235																																																																											
工芸館	2	63,000	54	3,288 <sup>※2</sup>	108																																																																											
京都国立近代美術館	67	829,964	327	11,401	819																																																																											
国立西洋美術館	17	953,443	811	5,521	122																																																																											
国立国際美術館	102	742,398	228	7,016	132																																																																											
計	311	2,858,724	1,451	39,570	1,416																																																																											
館名	購入本数	購入金額(千円)	寄贈本数	年度末所蔵本数	年度末寄託品本数																																																																											
東京国立近代美術館(フィルムセンター)	247	114,092	1,523	67,287	8,018																																																																											
	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24																																																																									
購入点数	318	174	311	400	286	674	311																																																																									
購入金額(千)	762,373	817,359	832,117	836,660	1,375,962	1,382,245	2,037,301																																																																									

円)							
寄贈点数	804	853	427	229	386	1,213	1,451
年度末 所蔵作品数	30,962	31,989	32,729	33,354	34,026	35,913	39,570
年度末 寄託品数	2,517	2,631	1,505	1,529	1,338	1,315	1,416

【映画フィルムの収集 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
購入本数	406	285	375	1,194	413	291	247
購入金額(千 円)	265,056	209,323	289,411	1,259,910	348,086	274,662	114,092
寄贈本数	1,611	2,834	7,671	1,648	852	1,479	1,523
年度末 所蔵本数	48,475	51,594	59,640	62,482	63,747	65,517	67,287
年度末 寄託品本数	7,048	7,048	8,018	8,018	8,018	8,018	8,018

各館における作品の収集は、各館の収集方針及び各館の研究員による調査・研究活動を通じ、収集すべき美術作品を検討し、学芸課長会議において、各館における収集計画について協議した上で、「美術作品購入又は寄贈受入れに関する規程」で定められた外部の有識者による美術作品購入選考委員会の開催を経て、実施した。

また、学芸課長会議において、作品収集についての情報交換を行った。

平成 24 年度に予算措置された美術作品購入費の用途について、各館の調査研究及び収集方針を踏まえ、法人全体で協議し、海外への流出可能性など緊急度の高さ、作品の品質と希少性等の観点から検討し、通常の予算では購入困難な作品を購入した。

各館の収集(購入・寄贈)の方針と実績

(ア)東京国立近代美術館

(本館)

明治から今日に至る美術作品を、日本を中心に、重要な影響を与えた海外の作品も交えて収集することを方針し、絵画、版画、水彩・素描、彫刻・立体造形、写真、映像等の分野を対象とする。

平成 24 年度は、近代日本美術の体系的コレクションの構築を引き続き図りつつ、近代日

本美術に影響を与えた海外作家作品の収集も積極的に行った。特に次の点に留意した。

①1900－1940年代の日本画作品の収集

②1970年代以降の日本人作家の作品の収集

③日本の美術に多大な影響を与えた海外作家の作品の収集

購入作品については、平成22年度より継続して収集を行ってきた国内個人のコレクションより、スペインの世界的画家、ジョアン・ミロ初期の重要作《絵画詩(おお！あの人やっちゃったのね)》を特別購入予算により購入した。作品の重要度はもとより、国内コレクションの海外流出を防ぐ意味でも、収蔵の意義は大きい。また、日本の前衛運動における最重要画家のひとり、瑛九の83点におよぶ貴重な作品・資料を購入・受贈した。加えて、当館のコミッションワーク(注文制作)として、館を舞台に撮影された若手作家、田中功起の映像作品1点を購入した。

寄贈作品については、注目すべき中堅写真家である松江泰治の集大成となる作品群、1点(全343点組)を国内個人より受贈することができた。

(工芸館)

日本工芸の近代化を示す作品の補充と、戦後から現代に至る伝統工芸や造形的な表現、クラフト等の重要作品の収集、そして近・現代の欧米の工芸及びデザイン作品の収集に留意した。

購入作品については、高額作品を2点収集することができた。加守田章二《曲線彫文壺》は、加守田作品を代表する〈曲線彫文〉シリーズの壺であり、本焼で焼き締められた器胎に縄文土器を思わせる波状の曲線が彫りこまれている。長年当館へ寄託され、1987年当館企画展「加守田章二」等でもっとも重要な作品として紹介されてきた作品である。また、二十代堆朱楊成《彫漆六華式平卓》は、1916年第4回農展に出品されたもので、1929年発行の作品集でも最も重要な作品として掲載された作家の代表的作品である。

寄贈作品については、伝統工芸作品が主であったが、槻尾宗一のクラフト作品や、アメリカのジム・レーディの現代陶芸作品の寄贈を受け入れた。また、「原弘と東京国立近代美術館」で取り上げた、東京国立近代美術館の展覧会ポスター等のデザインを長年手掛けた原弘のグラフィック作品165点を、保存分として保管してあった所蔵資料から分類替えを行い、21点を寄贈分として収蔵した。

(フィルムセンター)

購入については、上映企画に合わせ、『今年の恋(全八話)』(1967年)ほか、木下恵介監督に関連するテレビ映画作品全12作品31本、春原政久『女人の館』(1954年)ほか、日活作品全9作品10本、『J・MOVIE・WARS 月はどっちに出ている』(1993年)ほか、崔洋一監督作品全10作品のプリント、及び平成25年度の上映企画に合わせ、毛利正樹『宇治みさ子の緋ぢりめん女大名』(1958年)、和田嘉訓『自動車泥棒』(1964年)ほか、全7作品10本等のフィルムを購入した。

寄贈作品については、新規の受入先からの寄贈として、日本大学藝術学部より、畑中寥坡『寒椿』(1921年)の可燃性染色プリントや日本大学藝術科による文化・記録映画『沈み行く小河内村』(1938年)の可燃性マスター・ポジ等 29 本、国鉄労働組合より、徳永瑞夫『三池—たたかう仲間の心はひとつ—』(1950年)等プリント 101 本、株式会社フィルム・クレセントより、熊井啓『ひかりごけ』(1992年)のオリジナル・ネガ等、原版類及びプリント 48 本を受贈した。一方、公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団からは、同財団が木村正美『—伝統工芸の名匠— うるしを現代にいかす 曲輪造・赤地友哉』(1980年)以来製作してきた工芸・伝統芸能・民俗芸能に関する記録映画 41 作品の全フィルム原版的寄贈を受け入れた。

また、石井岳龍(聰互)、金井勝、藤原智子、松川八洲雄など、長年個人やインディペンデントで活躍してきた映画監督による貴重な作品の原版類及びプリント等をはじめとして平成 24 年度においても寄贈受入れを引き続き活発に行った。

映画関連資料については、川喜多記念映画文化財団より静活株式会社旧蔵の日本映画ポスター 1,114 点、また、「日本の映画ポスター芸術」の出品作家である横尾忠則氏から同氏デザインの映画ポスター 17 点等の寄贈を受けた。

#### (イ) 京都国立近代美術館

国内外の「工芸」作品を中心に、日本画、油彩画、版画、写真、現代美術及び海外の近代美術作品などの代表的作品、並びに美術史上貴重な価値を有する作品・資料の収集を進めるといふ長期的な収集方針の下、平成 24 年度は、一括収蔵することで近代美術史上重要な意味を有する「芝川照吉コレクション」を収集するとともに、引き続き日本及び海外の近代美術作品についても収集した。

購入作品については、「芝川照吉コレクション」に含まれる青木繁の名作《女の顔》、我が国近代美術史上の代表作である村上華岳、速水御舟などの日本画、藤島武二の大作や、工芸においても富本憲吉や加守田章二の優品、継続購入となるハンナ・ヘッヒについては特別購入予算を活用することにより購入することができた。また、萬鐵五郎の油彩画を初めて収蔵することができた。

寄贈作品については、「芝川照吉コレクション」に含まれる青木繁の《女の顔》以外の作品が寄贈され、その中には岸田劉生や藤井達吉、富本憲吉などの作品 170 余点が含まれた。また、当館で個展を開催した井田照一の版画作品及び北村武資の染織作品についても、多数の寄贈があった。

#### (ウ) 国立西洋美術館

平成 24 年度についても、中世末期から 20 世紀初頭に至る西洋美術の流れを概観するコレクションの充実及びヨーロッパ版画の系統的収集を行うことを意図し、次の点を方針として収集に努めた。

①15 世紀～20 世紀初頭のヨーロッパ絵画の収集、②ドイツ・フランドル・イタリア・フランスを中心とするヨーロッパ版画コレクションの充実、③旧松方コレクション作品の情報収集の継

	<p>続, ④西洋工芸美術品(装飾作品・装身具)の収集</p> <p>購入作品については, 特別購入予算によりポール・セザンヌの油彩画《ポントワーズの橋と堰》を購入した。印象派の画風からセザンヌ独自の様式への移行を示す, 非常に質の高い作品であり, 常設展示の中で重要な位置を占めることとなった。</p> <p>寄贈作品については, 個人コレクターより, 古代から現代までの宝飾品コレクション805点の一括寄贈を受けた。これまでの工芸コレクションはタピスリーが中心で, 宝飾品・装身具の収蔵は今回が最初となる。時代, 地域, 技法・材質が極めて多岐にわたり, 今後の調査研究や展示において多様な視点から活用できる可能性のある貴重なコレクションとなった。</p> <p>(エ) 国立国際美術館</p> <p>日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするため, 主として, ①1945年以降の日本の現代美術作品の系統的収集, ②国際的に注目される国内外の同時代の美術作品の収集を行った。</p> <p>購入作品については, 第二次大戦後の抽象芸術を代表する作家でありアンフォルメル之源流となった作家ジャン・フォートリエの作品や, 現代ドイツ写真を代表する作家であるアンドレアス・グルスキーのほか, 日本の現代美術を代表する作家である北山善夫の作品を購入することができた。</p> <p>寄贈作品については, 反芸術世代を代表する作家の一人である工藤哲巳の初期作品, 版画家渡辺千尋の作品並びに内科画廊関連のコレクション, さらに, プレイの関連資料を多数寄贈いただき, 充実させることができた。</p>	
--	---	--



【(小項目)1-2-2】	収蔵品の保管・管理						【評定】																								
【法人の達成すべき目標(計画)の概要】							<b>B</b>																								
<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世に伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵庫等保存施設の狭隘・老朽化への対応に積極的に取り組む。その際、各館における対策はもとより、抜本的な改善に向けた今後の方策として、各館で横断的に活用が可能な形態や方法についても、既存の施設との連携を図りながら、地元自治体や関係機関の協力を得て検討を進める。</p> <p>(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に取り組むとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。</p>											H23	H25	H26	H27																	
							A																								
							実績報告書等 参照箇所																								
<p>【インプット指標】</p> <table border="1" data-bbox="120 671 1397 847"> <thead> <tr> <th>(中期目標期間)</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H21</th> <th>H22</th> <th>H23</th> <th>H24</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>決算額(百万円)</td> <td>339</td> <td>323</td> <td>341</td> <td>411</td> <td>386</td> <td>364</td> </tr> <tr> <td>従事人員数(人)</td> <td>45</td> <td>43</td> <td>43</td> <td>40</td> <td>40</td> <td>39</td> </tr> </tbody> </table> <p>1) 決算額は損益計算書 収集保管事業費を計上している。</p> <p>2) 従事人員数は、収集保管業務に携わるすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。</p>							(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24	決算額(百万円)	339	323	341	411	386	364	従事人員数(人)	45	43	43	40	40	39	<p>＜実績報告書＞</p> <p>P40～43</p> <p>(2)収蔵庫保存施設の狭隘・老朽化への対応と適切な保存環境の整備等</p> <p>①収蔵庫等の狭隘・老朽化への対応</p> <p>②保存環境の整備等と防災対策の推進・充実</p>			
(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24																									
決算額(百万円)	339	323	341	411	386	364																									
従事人員数(人)	45	43	43	40	40	39																									
評価基準	実績						分析・評価																								
<p>○ 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世に伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵庫等保存施設の狭隘・老朽化への対応に積極的に取り組んだか。その際、各館における対策はもとより、抜本的な改善に向けた今後の方策として、各館で横断的に活用が可能な形態や方法についても、既存の施設との連携を図りながら、地元自治体や関係機関の協力を得て検討を進めたか。</p>	<p>① 収蔵庫等の狭隘・老朽化への対応</p> <p>ア 東京国立近代美術館</p> <p>本館では、現在、新・旧二つの収蔵庫はともに収蔵率約125%となっている。年間約250点の作品貸与と年間約800点の所蔵作品展覧により作品が庫外に出ていることで、最低限のやりくりが成り立っている。引き続き収納の効率化(マット装でのマップケースへの収蔵等)、周密化による環境悪化に由来する虫害を防止する虫害検査、定期清掃などの対策を行っている。また、フィルムセンター収蔵庫、ヤマト運輸倉庫、三菱倉庫の3つの外部倉庫を借り、不足を補っている。今後も引き続き収納の効率化、虫害防止等の対策を行う。将来的には外部に収蔵庫を設け、民間倉庫借り上げの費用的、業務的負担を軽減することが望ましいと思われる。</p> <p>工芸館では、収蔵庫 4 室及び一時保管庫として活用している荷解き室の狭隘化は急激に進行している状態である。床面の大方はすでに埋まっているが、棚間の通路にも作品を 2 段重ねにするほどの困難な状態となりつつある。また、企画展や所</p>						<p>収蔵品の保管・管理については、適切な温湿度管理・定期点検とともに、随時、施設の改修工事等を実施することにより、安全な保管・管理が実施されている。</p> <p>収蔵庫等の施設は、年々増加する所蔵品を工夫しながら管理を行っているが、ナショナルセンターとしての機能を損なうことがないよう、早急に新たな保管施設の確保と収蔵品の保管環境の改善に取り組む必要がある。</p>																								

蔵品巡回展, 所蔵品展, 本館 2 階で開催したデザイン展等に関する出品作品の収納が重なった際にスペースの算段に厳しいものがあった。グラフィック・デザイン作品はフィルムセンター内収蔵庫で保管しているが, 平成 24 年度に所蔵資料から寄贈及び分類替えにより作品として収蔵した原弘のグラフィック作品 186 点も収納した。安全な保管を確保するために, 外部倉庫の活用を検討する段階に達してきたように思われる。

フィルムセンターでは, 平成 24 年度までに, 「ビネガー・シンドローム」を極度に発症したフィルムと, 保存庫を寄託映画フィルムと共用していた所蔵映画フィルムについて, 映画保存棟Ⅱへの移動を完了するとともに, ならし室やエレベーター・ホール等の導線部分の温湿度設定について, フィルム素材, 保存科学, 建築の専門家による会議での議論を受け, 次年度以降の本格的な移動・格納計画を準備することが可能になった。

また, 平成 24 年度はこれに加え, 以下のような対応を行った。

- ・京橋に設置していた KEM16 mm検査台に, 画像取り込み装置を付設し, 相模原分館に移設することによって, 分館での十全な検査作業に資することが可能になった。
- ・中古のスティーンベック 35 mm検査台 1 台を取得することにより, 検査作業のバックアップ態勢を整えることができた。
- ・収集されるフィルムの多様化に対応し, フィルム調査カードのフォーマット, 項目, 選択肢等の改訂を行った。
- ・プリント運用の増加に対応し, フィルム検査及び補修の結果をレベルで評価することにより, 運用上の便宜を向上させた。
- ・次年度以降, 所蔵可燃性フィルムの網羅的な調査を行うための準備として, 検査及び補修の作業工程とデータ採取について, 調査研究を行った。

映画関連資料について, 現在, ノンフィルム資料のうち紙素材の資料はフィルムセンター(京橋)の 4 階図書室と地下 3 階収蔵庫にて保管されているが, 収蔵能力が限界に達しつつある。相模原分館の新収蔵庫への部分的な移転計画を検討する必要がある。

今後は, 映画保存棟Ⅱの本格的な運用を目標に, 低温低湿の維持を実行しつつ, 節電等省エネルギー化を図るために契約電力の見直しを行い, ならし室やエレベーター・ホール等の導線部分の温湿度設定の環境条件について, 専門家による委員会の報告をまとめ, 実際に実行する必要がある。また, 映画保存棟Ⅰと映画保存棟Ⅱの機能分担, ⅠからⅡへの移動・格納計画を進めることが必要である。さらに, 画保存棟Ⅰの保存庫棟の外気侵入を妨げる方法についての検討を行い, 根本的な改修を行う必要がある。

<p>○ 環境整備及び管理技術の向上に取り組むとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図ったか。</p>	<p>イ 京都国立近代美術館        収蔵庫内の火災報知設備及び照明設備を改修するための設計業務を実施した。これを受け、今後、より安全で適切な保存環境に改修するための工事に着手する。なお、狭隘状態は慢性化しているため、新たな収蔵場所の確保を検討する。</p> <p>ウ 国立西洋美術館        不具合により使用ができなくなっていた新館第一収蔵庫の絵画ラック 3 面について、修繕を実施した。今後は、引き続き、収蔵庫内の日常的な整理整頓と、適正な温湿度管理、地震対策の徹底を実施していくことが必要である。また、収蔵庫内の適切な保存環境の維持のために、新館・企画館の収蔵庫について、耐用年数を考慮した空調機の更新の検討が望まれる。</p> <p>平成 24 年度、橋本貫志氏旧蔵の宝飾品コレクション 805 点の寄贈を受けたが、初めてのまとまった美術工芸品の取得であることから、素材やサイズ、量、セキュリティを十分考慮した収納、保管の方法を構築する必要がある。</p> <p>エ 国立国際美術館        既に収納率が実質 100%以上となっているが、積み重ねられる作品をまとめて収納したり、ラックの隙間を可能な限り小さくしたりして、適切な保存環境を維持するよう努めた。今後も、引き続き新たな収納ケースの整備、作品梱包の工夫、汚損した額縁を廃棄するなどして、適切な保存環境の整備について検討する。</p> <p>オ その他        収蔵庫狭隘化への対策を検討するため、国立美術館、国立文化財機構及び日本芸術文化振興会の 3 法人で、収蔵施設に関するワーキンググループを関東地区及び関西地区でそれぞれ立ち上げた。</p> <p>② 保存環境の整備等と防災対策の推進・充実</p> <p>ア 東京国立近代美術館        (本館・工芸館)        本館講堂において、平成 24 年 9 月 1 日に、「夏の家」に関する講演会の後、聴講のお客様(約 140 名)を交え、茨城県沖にて大地震発生を想定した避難誘導訓練を実施した。また、平成 24 年 9 月 24 日には、放送訓練、避難訓練、初期消火(模擬)、AED の操作方法を含む総合訓練を実施した。</p> <p>工芸館において、平成 25 年 3 月 27 日に、人員の少ない日直出勤日における放送訓練、避難訓練、初期消火(模擬)を含む総合訓練を実施した。</p> <p>(フィルムセンター)        フィルムセンターでは、以下の点検及び訓練を実施した。        ・消防用設備、自家発電設備など定期点検を実施</p>	<p>適切な水準にあり、今後ともに、防災対策に取り組んで行くことを期待する。</p>
---	---	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フィルムセンター(京橋)での消防訓練を実施(平成 25 年 3 月 6 日)</li> <li>・フィルムセンター(京橋)での消防訓練(部分訓練:地下 3 階収蔵庫)を実施(平成 25 年 3 月 29 日)</li> <li>・フィルムセンター相模原分館での消防訓練を実施(平成 24 年 11 月 20 日)</li> </ul> <p>イ 京都国立近代美術館 平成 24 年 11 月 26 日に消防署指導のもとで避難誘導訓練・消火訓練を実施した。</p> <p>ウ 国立西洋美術館 平成 23 年度に引き続き、常設展示室内での地震による衝撃の被害を軽減するために、すべての作品に衝撃吸収ゴムの取り付けと額装の改善を実施した。</p> <p>エ 国立国際美術館 当美術館は、阪神淡路大震災後、構造体の大きな補修をすることなく建築物を使用できることを目標とし、人命の安全確保、二次災害の防止及び機能保全が図られるよう建築された。また、当館は完全地下型の美術館のため、防水・洪水に対しても地下壁は二重構造及び外防水層を施し、防災上、必要な非常口等開口部には防潮、防水扉を採用している。</p> <p>地下 2 階と地下 3 階にある収蔵庫は、ダイヤル式によりロックされており、防虫のために入口には網戸を設置している。内装は湿気の吸着に優れた天然木材を使用し、下地に不透湿シートをはり、外壁は 2 重壁構造により湿気を防ぎ、湿度・温度調整も 24 時間体勢で実施している。火災発生時には、不活性ガス(窒素)が充填されるシステムにより、作品を傷めることなく消火できる。</p> <p>また、災害対策を維持するための定期点検を実施した。</p>	
--	--	--

<b>【(小項目)1-2-3】</b>	収蔵品の修理	<b>【評定】</b>  <b>A</b>				
<b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b> (3)修理・修復に関しては、各館の連携を図りつつ、外部の保存科学の専門家等とも連携して、所蔵作品の保存状況を確実に把握し、修理・修復の計画的実施に取り組む。		H23	H25	H26	H25	
		A				
		実績報告書等 参照箇所				
		<実績報告書> P43～44 (3)所蔵作品の修理・修復				
<b>【インプット指標】</b>						
(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	339	323	341	411	386	364
従事人員数(人)	52	51	51	49	49	47
1)決算額は損益計算書 収集保管事業費を計上している。(本項目は収集保管事業費の一部であり、個別に計上できないため、収集保管事業費全額を計上している。) 2)従事人員数は、国立新美術館を除くすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。						
<b>評価基準</b>	<b>実績</b>			<b>分析・評価</b>		
○ 各館の連携を図りつつ、外部の保存科学の専門家等とも連携して、所蔵作品の保存状況を確実に把握し、修理・修復の計画的実施に取り組んだか。	<b>所蔵作品の修理・修復</b> ① 東京国立近代美術館 絵画 7 件, 工芸 6 件, 映画フィルムデジタル復元 20 本, ノイズリダクション等 34 本, 不燃化作業 65 本 (本館) 昭和 38 年より長く寄託され、傷みが激しいため展示活用されずに来た日本画家、平福百穂の大型屏風《丹鶴青瀾》の寄贈を受け、この修復に着手した。破損、汚れ、水濡れ、焼け焦げなど重度の傷みが見られたため、大規模な解体修理を、半双ずつ、平成 25 年度までの 2 年をかけて行う計画とし、24 年度分の半双を終了した。なお、修復方針を決定するに当たって、東京藝術大学、練馬区立美術館、横浜美術館の日本画専門家の協力を得た。 (工芸館) 平成 23 年度から修復を継続した漆工の松田権六作品 1 点は、相当の期間と技術を要したが、一応の現状保存修復がなった。平成 23 年度に寄贈された			収蔵品の修理については計画的に取り組んでおり、適切に実施されていると評価できる。 また、フィルムセンターにおける一連の映画フィルムのデジタル復元や不燃化作業は、映画文化の保全・継承に対する意識を喚起した点でも評価できる。 国立美術館として専門修復家の業務を保持・確立しえない体制は、諸外国のナショナル・ミュージアムに比して拙劣であることから、今後は、計画的に研究員のみならず、専門技術者などの人材を確保していくことが必要である。		

野口光彦の御所人形作品 2 点の修復に着手したが、胡粉の大きなヒビがあり、また、カビや汚れが想定以上の困難さが見出され、そのために修復期間が平成 25 年度にも及ぶ結果となった。染織では、引き続き紬織の志村ふくみ作品の現状保存修復を行った。

(フィルムセンター)

・日本アニメーション映画のカラー作品における初のデジタル復元として、大藤信郎監督による戦後の代表作『くじら』(1953 年)と『幽霊船』(1956 年)について、現存素材及び関連資料等に関する綿密な調査研究をもとに、褪色補正を焦点にしたデジタル復元を行うとともに、平成 23 年にアメリカ・アカデミー科学技術賞に輝いたカラー三色分解保存用白黒ネガ・フィルムにレコーディングすることにより、映画フィルムの復元、長期保存における現時点での最善のワークフローを実践した。また、三色分解した 3 本のネガ・フィルムを光学合成することによりプリントを仕上げることによって、優れた色再現性、高解像度、シャープネスを得ることができた。なお、デジタル復元を行うに当たっては、元素材となったフィルムを所有する公益社団法人映像文化製作者連盟から協力を得るとともに、修復及び複製作業を委託した IMAGICA 及び IMAGICA ウェストとの綿密な共同作業を行った。

・次年度以降、本格的な作業に入る小津安二郎監督のカラー作品 4 作品のデジタル復元について、その第 1 作目となる『秋刀魚の味』(1962 年)の褪色補正に必要な調査研究を行った。その際、デジタル復元の元素材となったフィルムを所有する松竹株式会社との連携協力を行った。

・日本大学芸術学部製作『無形文化財 神代舞』(1954 年)の可燃性フィルムからの復元に際し、タイトルと背景など複数枚のフィルムを使用して擬似的に合成する、通称「ヒゲ処理」に対して、該当フィルムよりマスター・ポジを作成し、これらを光学合成することにより、最適な復元を行った。

・映画関連資料については、記録映画作家中村麟子の旧蔵資料をはじめ、劣化・損傷の恐れがあるシナリオ等冊子に対して中性紙の保存ケースを制作して長期保存を図った。

## ② 京都国立近代美術館

絵画 9 件

平成 24 年度も企画競争を導入して、日本画 3 点、洋画 5 点の修理を行い、素描 1 点についてもシミ抜きなどの処置を施した。特に洋画作品については、戦前京都で活躍した貴重なシュルレアリスム作家(伊藤久三郎)の未公開作であり、これまで傷みが激しかったこともあり、作者の全作品集にも未掲載のもので、今後の活用が期待される。企画競争の導入は、保存・修復の担当者がいな

い同館にあつては、研究員がその状態、修理方法を学ぶ絶好の機会でもあり、外部の修理業者から提出された修理にかかる書面を検討し、その知識を得るためにも貴重な場となっている、さらに、実際の修理に際しては、決定された外部の業者と常に修理の状況を確認しつつ、意見交換が行えることもあり、その連携を大切にしていきたい。

③ 国立西洋美術館

絵画 40 件、水彩 7 件、素描 3 件、版画 15 件

平成 24 年度は国立美術館巡回展の準備として、収蔵作品のうち、額装状態の劣悪な作品に関して、改善作業を実施した。また、新収蔵作品の額装改善を実施し、速やかに展示に供する準備をした。さらに、貸出に際してエル・グレコ作品及びルーベンス作品の額装改善とともに、状態に関する詳細な調査を実施した。版画・素描の新収作品について収蔵に適するように処置するとともに、状態の悪い収蔵作品について改善作業を施した。

④ 国立国際美術館

絵画 1 件、彫刻 2 件

平成 24 年度は、外部の彫刻に関する修復家と連携し、当館所蔵作品のコンディションチェックを行い、修復の緊急性が高いと判断した福嶋敬恭《Blue Dots》(1966/89 年)について、表面の清掃、角欠け部分の補填と補彩を行ったほか、ジャン・ティンゲリー《バッタ》(1963 年)について、ワイヤーによるブラッシング、層状の錆の除去、マシンオイルの塗布、プラスチッククリーナーによる清掃を行った。絵画に関しては、ロイ・リキテンスタイン《日本風の橋のある睡蓮》(1992 年)について、作品と一体化している白い額の汚れが目立ってきたため、クリーニングを行った。

<b>【(小項目)1-2-4】</b>	収集・保管のための調査研究	<b>【評定】</b>			
<b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b>		<b>A</b>			
(4)各館の方針に従い、所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究を計画的に行い、その成果を業務に反映させる。なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館等及び大学等の機関とも連携を図る。		H23	H25	H26	H27
		A			
		実績報告書等 参照箇所			
		<実績報告書>			
		P44~48			
		(4)美術作品の保管・修理等に関する調査研究			

**【インプット指標】**

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	310	271	296	276	295	305
従事人員数(人)	52	51	51	49	49	47

1) 決算額は損益計算書 調査研究事業費(国立新美術館を除く)を計上している。(本項目は調査研究事業費の一部であり、個別に計上できないため、収集・保管業務のない国立新美術館を除く、調査研究事業費全額を計上している。)

2) 従事人員数は、国立新美術館を除くすべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価
○ 各館の方針に従い、所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究を計画的に行い、その成果を業務に反映させたか。なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館等及び大学等の機関とも連携を図ったか。	<b>美術作品の保管・修理等に関する調査研究</b> 各館における調査研究の実施状況は、以下のとおりである。 ア 東京国立近代美術館 (本館) (ア)所蔵作品に関する調査研究 『現代の眼』掲載の「作品研究」、『研究紀要』第 17 号、『読売新聞(都内版)』連載「近代の眼」などの執筆記事や、キュレーター・トークなどの催事により、広く所蔵作品に関する研究成果を公開した。 (イ)保管・修理に関する調査研究 洋画家、鬘光の油彩作品《馬》について、引き続き、東京文化財研究所の協力のもと、赤外線撮影による研究・調査を行った。平福百穂作《丹鶴青瀾》の修復に当たっては、東京藝術大学、練馬区立美術館、横浜美術館の協力を仰ぎ、方針の決定を行った。また、リニューアル工事の準備として、LED 照明システムの調査、作品にとって安全な床塗装材の調査等を行った。加えてポジフィルムの生産中止に伴うデ	全体として所蔵作品や保存・修理に関する調査研究が着実になされており、評価できる。 特に、フィルムセンターにおける調査研究は、文献資料の調査からフィルムや機材に関する技術的な探究まで、多数かつ多岐に及んでおり、その幅広い取組が評価できる。 基礎的な調査研究が積み重ねられ、小企画展示にも生かされているが、基礎的な調査研究を速やかに公開する努力も必要である。



	<p>デジタル化の動きを視野に、作品画像の理想的なデジタルデータ作成につき、凸版印刷とともに調査研究を行った。</p> <p>(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <p>調査研究に基づき所蔵作品展において特集展示企画を行うとともに、所蔵作品展関係章解説、作品解説を公開した。また、露光《馬》赤外線撮影による研究の成果は、東京文化財研究所での口頭発表を経て、平成 25 年 7 月、同研究所『美術研究』誌上に発表の予定である。LED 照明システムの調査は継続、床塗料の調査成果はリニューアル工事に反映された。デジタル撮影の調査研究は、画像貸与システムの構築(平成 25 年度見込み)に反映される予定である。</p> <p>(工芸館)</p> <p>(ア)所蔵作品に関する調査研究</p> <p>随時の専門的な調査研究とともに、所蔵作品展や企画展での展示、貸与及び熟覧等において専門家等と研究を行っている。</p> <p>(イ)保管・修理に関する調査研究</p> <p>文化財保存修復の目白漆芸研究所と連携して漆工や人形に関して調査研究を進め、染織では当館染織作品において実績のある浅井エージェンシーによる専門家等と連携を重ね、所蔵作品の保管と現状保存修理について計画的な実施を行っている。</p> <p>(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <p>現状保存修復を実施する作品は活用頻度の高いもの、あるいは緊急度の高いものから計画的に行っている。完了した作品については展示や貸与等に有効に活用している。</p> <p>(フィルムセンター)</p> <p>(ア)所蔵作品に関する調査研究</p> <p>所蔵作品に関する調査研究として、平成 24 年度は以下の通り取り組んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インディペンデント映画が急増し始めた 1980 年以降に製作・公開された日本映画について、今後、映画フィルム等の収集計画を立てる上で役立つ、詳細なフィルムグラフィーを作成するための調査を実施した。</li> <li>・映画保存のための特別事業費により、平成 21 年度に収集した映画フィルムについて、データの採取、静止画像の取り込み、データベースへの登録、文献資料等による調査を完了した。</li> <li>・近年所蔵が増加している小型映画によるホームムービーについて、フィルム検査、文献調査、データベース構築など、一連の作業とデータ管理の標準化を目</li> </ul>	
--	---	--

	<p>標として、荻野茂二監督によるコレクションを具体例に、調査研究を開始した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新収蔵作品とその作者や時代背景に関する調査研究</li> <li>・今井正監督に関する調査研究</li> <li>・木下恵介監督に関する調査研究</li> <li>・日活の歴史と作品に関する調査研究</li> <li>・現代日本映画監督に関する調査研究</li> <li>・戦後日本に配給された外国映画に関する調査研究</li> <li>・日活の歴史と作品に関する調査研究</li> <li>・ジャンル別の映画ポスターに関する研究</li> </ul> <p>平成 23 年度の「映画公社旧蔵資料」に続き、日本のフィルム・アーカイブの初期史を明らかにする当館フィルム・ライブラリー時代の資料のカタログ化を開始した。その成果は、「NFC ニュースレター」第 106 号、107 号所収の論考「フィルム・ライブラリー事始」で発表し、今後の事業にも活用する予定である。</p> <p>(イ) 保管・修理に関する調査研究</p> <p>映画フィルムの保管に関する調査研究として、平成 24 年度は以下のとおり取組んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・映画フィルムの検査及びデータ管理と、これに伴う作業工程に関する調査研究</li> <li>・映画保存棟のならし室等における温湿度環境に関する調査研究</li> </ul> <p>映画フィルムの修理に関する調査研究として、平成 24 年度は以下のとおり取組んだ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カラーフィルムのデジタル修復に関する調査研究</li> <li>・三色分解ネガでの保存に関する調査研究</li> <li>・三色分解ネガからの光学合成に関する調査研究</li> <li>・「ヒゲ処理」の復元に関する調査研究</li> </ul> <p>また、ノンフィルム資料については、寄贈者別に配置されていたプレス資料の現物レベルでの統合を開始した。映画パンフレットなど過去に寄贈されながら未整理であった分野の資料のデータベース登録に取り組むとともに、シナリオについては、これまで未着手だった合本シナリオのリスト化に着手した。</p> <p>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <p>映画フィルムの保管における調査研究成果は以下のとおり反映された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・フィルム調査カードの改訂及び検査・補修結果のレベル評価へ反映</li> <li>・映画保存棟のならし室等の温湿度設定へ反映</li> </ul> <p>映画フィルムの修理における調査研究成果は以下のとおり反映された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・『くじら』(1953 年) 及び『幽霊船』(1956 年) のデジタル復元へ反映</li> </ul>	
--	--	--

- ・『秋刀魚の味』(1962年)のデジタル復元への準備へ反映
  - ・『無形文化財 神代舞』(1954年)の複製作業へ反映
- 所蔵映画資料における調査研究成果は以下のとおり反映された。
- ・企画展「ロードショーとスクリーン 外国映画ブームの時代」、「日活映画の100年 日本映画の100年」及び「西部劇の世界 ポスターでみる映画史 Part1」へ反映
- 映画関連資料の修理における調査研究成果は以下のとおり反映された。
- ・一部のシナリオ等, 劣化した文献資料の修復へ反映

#### イ 京都国立近代美術館

##### (ア) 所蔵作品に関する調査研究

コレクションと展覧会の連動の成果として、『京都国立近代美術館所蔵作品目録 X 井田照一の版画』を刊行した。所蔵作品については、すべてカラー図版とし、作家・作品についての展覧会歴などのデータも網羅して、京都を代表する現代版画家・井田照一についての第一級の資料となった。また、平成24年度末から開催した「開館50周年記念特別展 交差する表現 工芸／デザイン／総合芸術」は、当館の展覧会、コレクションの柱を形成する「工芸」を中心に企画したものであり、その準備過程において、改めて同館の「工芸」作品について調査し、過去の展覧会における出品やコレクションとなった経緯などの整理が進められたことを特筆しておきたい。さらに、開館以来の所蔵作品についても、データベース構築に向けての点検・整理、そして『50年史』にも、コレクションの成果を掲載するため、あわせて所蔵全作品についての調査研究を行った。

##### (イ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映

一括収蔵した井田照一の版画については、展覧会を開催するとともに、所蔵作品目録も刊行した。また、「工芸」についても「50周年記念展」を開催し、展覧会図録にその研究成果の一端を発表した。

#### ウ 国立西洋美術館

##### (ア) 所蔵作品に関する調査研究

所蔵作品に関する調査研究として、平成24年度は以下のとおり取り組んだ。

- ・旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究
- ・中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究
- ・所蔵版画作品に関する調査研究
- ・ル・コルビュジエによる国立西洋美術館本館の設計に関する調査研究
- ・ユベール・ロベール及び18世紀フランス美術に関する調査研究
- ・オーギュスト・ロダンとエミール＝アントワーヌ・ブールデル作品に関する調査研

	<p>究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ジャン・パオロ・パニーニの風景画に関する調査研究</li> <li>・「国立西洋美術館所蔵作品データベース」に関する研究</li> </ul> <p>(イ)保存・修復に関する調査研究</p> <p>所蔵作品の絵画技法調査の参考とするため、古典的な色彩のサンプルを古典絵画技法に従って作成した。</p> <p>LED 照明導入に向けた調査のための色彩見本及びチャートを作成し、色温度の違いによる発色効果を検証し、14w LED 導入を実現した。</p> <p>修復処置過程において紫外線、赤外線等による調査を実施し、絵画作品の状態及び制作過程を検証する調査を実施した。作品によっては周辺部の絵具層を分析し、その材質を明らかにした。</p> <p>(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保存・修復に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <p>調査研究の過程で、15 世紀から 19 世紀までの様々な作品の技法や保存状態を確認し、これまでの処置の歴史を再確認しながら、震災後の被害の状況の確認及び貸出しのための安全／保存処置を実施した。様々な技法の処置／調査は、作品の安全な貸出しを実現すると同時に、こうした調査結果は展覧会のカタログ等に随時反映されている。また、調査・処置後の作品は常設展示に随時反映され、国民へのよりよい鑑賞環境の提供及び安定した状態の作品展示へと還元されている。あわせて、館報や紀要による対外的な情報発信を積極的に進めている。</p> <p>エ 国立国際美術館</p> <p>(ア)所蔵作品に関する調査研究</p> <p>「国立国際美術館 35 周年記念展 コレクションの誘惑」の時期に合わせ、同館の所蔵作品選を刊行した。また、国立国際美術館ニュースにおいて、工藤哲巳作品の調査研究成果の報告を行うとともに、所蔵作品についての解説も行った。</p> <p>(イ)保管・修理に関する調査研究</p> <p>平成 23 年度に引き続き、平成 24 年度は主に彫刻を対象とした所蔵作品のコンディションの確認を行った。</p> <p>(ウ)所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <p>同館が所蔵する写真作品を調査し、「国立国際美術館 35 周年記念展 コレクションの誘惑」において現代の写真に関する展覧会を開催するとともに、写真を巡る調査研究成果を、シンポジウムを開催することによって実現した。また、映像に関する調査研究を進め、その成果として、「夢か、現か、幻か」を開催した。</p>	
--	---	--

【(中項目)1-3】	3. 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与	【評定】			
		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			

【(小項目)1-3-1】	ナショナルセンターとしての国内外の美術館等との連携・協力  <b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b> (1) 所蔵作品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナーやシンポジウムを開催する。 (2)-1 国内外の優れた研究者を招聘しシンポジウムを開催するなど、美術館活動に対する示唆が得られるよう取り組むとともに、人的ネットワークの構築を推進する。 (2)-2 海外の美術館において、我が国の優れた作家や美術作品を世界に広く紹介する展覧会が活発に行われるよう、海外の美術館との連携・協力を積極的に取り組む。 (3) 国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等と保存・修復に関する情報交換を図りながら、修復・保存活動の充実に取り組む。 (4) 所蔵作品については、その保存状況や各館における展示計画等を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に行う。	【評定】			
		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			
		実績報告書等 参照箇所			
		<実績報告書> P48～68 3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与 (1) 所蔵作品等に関する調査研究成果の発信 ① 研究紀要、学術雑誌、展覧会刊行物、学会等での発信 ② 所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催 (2) 国内外の美術館等との連携 ① シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築 ② 我が国の作家、美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力 ③ その他海外の美術館との連携・協力 (3) 国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等との保存・修復に関する情報交換  (4) 所蔵作品の貸与等			
【インプット指標】					

(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24
決算額(百万円)	788	1,153	1,156	1,288	1,229	1,127
従事人員数(人)	61	59	59	57	57	54

1) 決算額は損益計算書 教育普及事業費を計上している。(本項目は教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、教育普及事業費全額を計上している。)

2) 従事人員数は、すべての研究職員数を計上している。その際、役員及び事務職員は勘案していない。

評価基準	実績	分析・評価																																																												
○ 所蔵作品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に関わる刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信したか。また、各種セミナーやシンポジウムを開催したか。	<p><b>(1) 所蔵作品等に関する調査研究成果の発信</b></p> <p><b>① 研究紀要, 学術雑誌, 展覧会刊行物, 学会等での発信</b></p> <p>ア 館の刊行物による研究成果の発信</p> <p>各館において、展覧会図録(計 28 冊), 研究紀要(計 3 冊), 館ニュース(計 7 種, 32 冊発行)等の刊行物により、研究成果を発信した。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>展覧会図録</th> <th>研究紀要</th> <th>館ニュース</th> <th>所蔵品目録</th> <th>パンフレット・ガイド等</th> <th>その他</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立本館</td> <td>4</td> <td rowspan="3">1</td> <td rowspan="3">6</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>近代美術工芸館</td> <td>3</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>館 フィルムセンター</td> <td>0</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>3</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>4</td> <td>1</td> <td>4</td> <td>0</td> <td>4</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>5</td> <td>0</td> <td>10</td> <td>1</td> <td>6</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>0</td> <td>5</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>28</td> <td>3</td> <td>32</td> <td>5</td> <td>19</td> <td>12</td> </tr> </tbody> </table> <p>注1 京都国立近代美術館の所蔵品目録には、「所蔵作品目録X」として刊行した「井田照一の版画」展の図録を含む。</p> <p>注2 「パンフレット・ガイド等」には、小企画展の内容や所蔵作品の解説を掲載したパンフレット、子ども向けの鑑賞ガイド等が含まれる。</p> <p>注3 「その他」には、論文集『実験場 1950s』、『東京国立近代美術館 60 年史』, 研究成果報告書『明治期に海外流出した近代工芸作品の調査』, 「平成 23 年度 独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館活動報告」(東京国立近代美術館), 「京都国立近代美術館 活動報告 MoMAK Report 2011」(京都国立近代美術館), 「国立西洋美術館報 No.46」, 「国立西洋美術館名作選」, 「ポケットガイド 西洋素描の見かた」, 「国立西洋美術館ボランティア活動報告 2008-2011 年度」, 「平成 24 年独立行政</p>	館名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	所蔵品目録	パンフレット・ガイド等	その他	東京国立本館	4	1	6	0	0	3	近代美術工芸館	3	3	4	1	館 フィルムセンター	0	6	0	0	0	京都国立近代美術館	6	1	3	1	0	1	国立西洋美術館	4	1	4	0	4	5	国立国際美術館	5	0	10	1	6	1	国立新美術館	6	0	3	0	5	1	計	28	3	32	5	19	12	<p>学会等発表、雑誌等論文掲載での発信数は昨年度を上回っており、所蔵作品等に関する調査研究成果の発信が日常的な業務としての確に実施されていると評価できる。</p> <p>特に、画廊やスタジオでの小規模なトークの場での発信が積極的に進められているのは、新しい動きとして注目される。</p> <p>他方で、査読有・ピアレビュー制度を持つ学会での報告や発信をしていくことも期待される。</p>
館名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	所蔵品目録	パンフレット・ガイド等	その他																																																								
東京国立本館	4	1	6	0	0	3																																																								
近代美術工芸館	3			3	4	1																																																								
館 フィルムセンター	0			6	0	0	0																																																							
京都国立近代美術館	6	1	3	1	0	1																																																								
国立西洋美術館	4	1	4	0	4	5																																																								
国立国際美術館	5	0	10	1	6	1																																																								
国立新美術館	6	0	3	0	5	1																																																								
計	28	3	32	5	19	12																																																								

法人国立美術館国立西洋美術館概要」(国立西洋美術館),「平成 23 年度国立国際美術館活動報告」(国立国際美術館),「平成 23 年度国立新美術館活動報告」(国立新美術館)が含まれる。

【研究紀要, 学術雑誌, 展覧会刊行物での発信 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
展覧会図録	31	39	36	38	36	28	28
研究紀要	2	3	3	3	3	3	3
館ニュース	29	26	31	33	36	37	32
所蔵品目録	3	1	0	1	1	2	5
パンフレット・ガイド等	17	28	22	18	18	16	19
その他	13	0	5	6	9	9	12

イ 館外の学術雑誌, 学会等における調査研究成果の発信

(ア) 東京国立近代美術館

[学会等発表](本館・工芸館)

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
「美術を見ること、感じること—美術館を活用した鑑賞教育について」	「京都国立近代美術館との連携による鑑賞教育の充実に向けて—平成 24 年度図画工作科指導講座」 京都国立近代美術館・京都市教育委員会・京都市図画工作教育研究会	主任研究員・ 一條彰子	2012 年 8 月 3 日	京都国立近代美術館講堂	80
シンポジウム「誰かと一緒に作品を見るということ」	世田谷美術館	主任研究員・ 一條彰子	2012 年 10 月 8 日	世田谷美術館講堂	80
「川平恵造作品の対話による鑑賞」	美術による学び研究会	主任研究員・ 一條彰子	2012 年 11 月 3 日	名護市 21 世紀の森ビーチ	35
「美術館における鑑賞教育の展開とその意義」	知の広場	主任研究員・ 一條彰子	2012 年 11 月 7 日	お茶の水女子大学	30

	「「博物館における青少年教育」ドイツ派遣事業に参加して」	全国美術館会議 第40回教育普及 研究部会	主任研究員・ 一條彰子	2012年11 月22日	東京都美術 館アートスタ ディールーム	50
	「国立美術館が行う鑑賞教育研修」	釜山文化財団・釜 山大学校	主任研究員・ 一條彰子	2012年12 月6日	釜山文化芸 術教育支援 センター	60
	「巖光《眼のある風景》をめぐって」	東京文化財研究 所	主任研究員・ 大谷省吾	2013年2 月26日	東京文化財 研究所	15
	「『これまでの芸術、これからの芸術』シリーズ プレ・セッション」	四谷アート・ステ ュディウム	美術課長・ 蔵屋美香	2012年4 月22日	近畿大学国 際人文科学 研究所東京 コミュニテ ィカレッジ 東 京アート・ス テュディウ ム	57
	「石川卓磨・宮下さゆり展」トーク	タリオン・ギャラ リー	美術課長・ 蔵屋美香	2012年4 月28日	タリオン・ギ ャラリー	20
	「からだを作る、からだを壊す」	板橋区立美術館	美術課長・ 蔵屋美香	2012年6 月9日	板橋区立美 術館	32
	「『めぐり絵画—日本のヌード 1880-1945』展について」	明治学院大学博 物館実習	美術課長・ 蔵屋美香	2012年6 月22日	明治学院大 学	56
	「Theory Round Table あつく塗る—ゴッホと由一と劉生と」	四谷アート・ステ ュディウム	美術課長・ 蔵屋美香	2012年6 月28日	近畿大学国 際人文科学 研究所東京 コミュニテ ィカレッジ 東 京アート・ス テュディウ ム	19
	「TWS-Emerging 188/189/190/191」トーク	トーキョーワンダ ーサイト	美術課長・ 蔵屋美香	2012年8 月4日	トーキョーワ ンダーサイ ト	42
	「進行中！ヴェネツィア・ビエンナーレに向けての過程公開」	国際交流基金	美術課長・ 蔵屋美香	2012年11 月1日	国際交流基 金	67



	「現代美術—さらわれる展示」	「～博物館 140年、これから語る～多様なニーズにこたえる展示をめぐって」国立教育政策研究所社会教育実践研究センター	美術課長・蔵屋美香	2012年12月7日	国立教育政策研究所社会教育実践研究センター	60
	「ナショナル・アート・ヒストリーを作る：東京国立近代美術館の場合」	第8回次世代アジア・キュレーター会議	美術課長・蔵屋美香	2012年12月20日	国際交流基金	88
	「Who is Kishida Ryusei?: A Case Study of a Yoga Painter」	Taisho Conference 2013	美術課長・蔵屋美香	2013年1月10日	ライデン大学	115
	「座談会 なぜ岸田劉生だったのか？」	青山目黒	美術課長・蔵屋美香	2013年2月9日	青山目黒	30
	聞き手「アーティスト・トーク」	「絵画、それを愛と呼ぶことにしよう」展 (gallery αM)	主任研究員・保坂健二郎	2012年4月14日, 5月26日, 6月30日, 8月18日, 9月21日, 10月27日, 12月1日, 2013年1月20日, 2月13日	gallery αM	30 ~ 60
	公開鼎談「いま、絵画を語るために」	「絵画、それを愛と呼ぶことにしよう」展	主任研究員・保坂健二郎	2012年6月12日	gallery αM	60
	公開鼎談「徹底討論 絵画は本当に愛なのか」	「絵画、それを愛と呼ぶことにしよう」展	主任研究員・保坂健二郎	2012年7月25日	gallery αM	60
	公開鼎談「クロージング・トーク 『エモーショナル & エンピリカル・ドローイング』」	「ドローイング・レックスズ」展	主任研究員・保坂健二郎	2012年10月19日	京都造形芸術大学ギャルリ・オーヴ	30

	公開対談「映画『DUBHOUSE:物質試行 52』について	「特集上映 七里圭」	主任研究員・保坂健二郎	2012年11月12日	新宿 K's cinema	40
	公開鼎談「なにが人を魅了するのか アールブリュット作品のなぞ」	「第12回全国障害者芸術・文化祭さが大会」	主任研究員・保坂健二郎	2012年11月23日	佐賀市文化会館	60
	「日本におけるアウトサイダー・アート」	NPO 法人アーツイニシアティブ東京	主任研究員・保坂健二郎	2012年11月23日	AIT 代官山	30
	公開対談「日本のアール・ブリュットについて語ろう」	「日本のアール・ブリュットについて語ろう 私たちが考えるこれからのアート」展	主任研究員・保坂健二郎	2012年12月22日	みずのき美術館	30
	「日本のアール・ブリュットの現在とこれから」	薬工ミュージアム	主任研究員・保坂健二郎	2012年12月23日	アートゾーン薬工倉庫	40
	公開鼎談「ポコラートで福祉と美術を考える」	「ポコラート全国公募展 vol.3」	主任研究員・保坂健二郎	2013年1月14日	アーツ千代田 3331	70
	公開鼎談「絵画TV」	「絵画、それを愛と呼ぶことにしよう」展	主任研究員・保坂健二郎	2013年1月27日	gallery α M	50
	公開鼎談「クロージング・トーク」	「絵画、それを愛と呼ぶことにしよう」展	主任研究員・保坂健二郎	2013年2月2日	gallery α M	90
	モデレーター「シンポジウム アール・ブリュットの魅力とネットワーク」	「アメニティーネットワークフォーラム 17」	主任研究員・保坂健二郎	2013年2月10日	大津プリンスホテルコンベンションホール淡海	100
	「フランス・ベーコンナイト ベーコンを深く理解するための講座」	6次元	主任研究員・保坂健二郎	2013年3月9日	6次元	30
	公開鼎談「今、「アート」ではないアートが熱い!？」	アートフェア東京	主任研究員・保坂健二郎	2013年3月13日	東京国際フォーラム	80
	特別講義「失敗から考えるアート」	「ANTE TUMOR」展	主任研究員・保坂健二郎	2013年3月26日	アーツ千代田 3331	20

シンポジウム「彫刻の領域 素材とわざ」	中原悌二郎記念 旭川市彫刻美術館	副館長・松本透	2012年6月3日	中原悌二郎 記念旭川市 彫刻美術館 ステーション ギャラリー	50
「Growing Communication in Asian Art Museums in the New Century」	Asian Art Museum Directors' Forum 2012	副館長・松本透	2012年12月19日	Bangladesh Shilpakala Academy	30
「『14のタベ』について」	東京藝術大学映像研究科主催「現代芸術論」	主任研究員・ 三輪健仁	2012年11月28日	東京藝術大学	20
“Japanese-ness” in the Design Works for the Tokyo Olympics: Design Project 1964	AIGA design educators conference	主任研究員・ 木田拓也	2012年12月15日	University of Hawaii at Manoa	約30
東京オリンピック1964 デザインプロジェクト	デザイン史学研究会	主任研究員・ 木田拓也	2013年3月9日	埼玉大学	約20

[学会等発表](フィルムセンター)

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
Animation - an Art, an Entertainment, and a <i>Light Thing</i>	国際フィルム・アーカイブ連盟 (FIAF) 北京会議	フィルムセンター主幹・ 岡島尚志	2012年4月23日	中国電影資料館劇場	150
ブルーシールドと文化財緊急活動-国内委員会の役割と必要性-	文化遺産国際協力コンソーシアム	フィルムセンター主幹・ 岡島尚志	2012年9月7日	東京国立博物館・平成館 大講堂	100
残す?残さない?—35ミリ上映環境の確保について考える	全国コミュニティシネマ会議	フィルムセンター主幹・ 岡島尚志	2012年9月9日	沖縄県・那覇市 桜坂劇場	150
Restoring Japanese Record Talkie Animation	国際フィルム・アーカイブ連盟北京会議	フィルムセンター主任研究員・ 榎木章(発表者名は Akira Tochigi)	2012年4月23日	中国電影資料館劇場	150

	交差する歴史の アリーナー東京 国立近代美術館 フィルムセンター における非劇映 画フィルム・コレク ション	韓国・高麗大学韓 国史センター	フィルムセンタ ー主任研究員・ 栩木章(発表者 名はとちぎあき ら)	2012年6 月23日	韓国ソウ ル・高麗大 学	30
	結節点としてのナ ショナル・フィル ム・アーカイブ フィルムセンター の映画フィルム収 集事業について	第7回映画の復 元と保存に関する ワークショップ 2012	フィルムセンタ ー主任研究員・ 栩木章(発表者 名はとちぎあき ら)	2012年8 月26日	京都府京都 文化博物館 フィルムシ アター	120
	これからのフィル ム上映について	カナザワ映画祭 2012	フィルムセンタ ー主任研究員・ 栩木章(発表者 名はとちぎあき ら)	2012年9 月9日	石川県・金 沢都ホテル・セミナー ホール	150
	Towards the Syn ergy of Photo-C hemical and Digit al: Challenges of Film Preservatio n and Restoratio n at National Ce nter of Tokyo	第2回釜山シネ マフォーラム	フィルムセンタ ー主任研究員・ 栩木章(発表者 名は Akira Tochigi)	2012年10 月8日	韓国釜山・ ソヤン音楽 センター	50
	映画保存の実践 的課題—東京国 立近代美術館フ ィルムセンターに おける映画フィ ルム収集のため のプロセス	記録映画アーカ イブ・プロジェクト 第9回ワークショ ップ	フィルムセンタ ー主任研究員・ 栩木章(発表者 名はとちぎあき ら)	2013年1 月26日	東京大学大 学院情報学 環福武ホー ル	200
	Archiving Moving Image Practice	Japanese Cinema Revisited Works hop	フィルムセンタ ー主任研究員・ 栩木章(発表者 名は Akira Tochigi)	2013年2 月23日	明治学院大 学白金キャン パス	60

	映画作品の原版保存に関する現状と課題	映画演劇労働組合連合会学習会	フィルムセンター主任研究員・榎木章(発表者名はとちぎあきら)	2013年3月14日	文京シビックセンター会議室	50
	映画の復元—技術, 倫理, そして創造	横浜キネマ倶楽部第30回上映会	フィルムセンター主任研究員・榎木章(発表者名はとちぎあきら)	2013年3月17日	神奈川県横浜市・神奈川公会堂	70
	Max au Japon, vers une nouvelle gestualité comique	マックス・ランデー国際シンポジウム	フィルムセンター研究員・大傍正規	2012年10月4日	シネマテーク・スイス	60
	新しい身体性と編集のリズム—越境者マックス・ランデーに注がれたまなざし	東西研	フィルムセンター研究員・大傍正規	2013年2月9日	関西大学千里山キャンパス以文館4Fセミナースペース	40
	演劇博物館所蔵映画フィルムの調査・目録整備と保存活用	早稲田大学演劇博物館 演劇映像学連携研究拠点での成果報告	フィルムセンター主任研究員・入江良郎	2012年12月20日	早稲田大学早稲田キャンパス6号館3階レクチャールーム	30
	Noburo Ofuji, un cinéaste d'animation sauvé de l'oubli(忘却から救われたアニメーション作家 大藤信郎)	国際フィルム・アーカイブ連盟北京会議	フィルムセンター主任研究員・岡田秀則	2012年4月24日	中国電影資料館	約200
	Cultures of Silent Film: Preservation, Reassessment, Digital Reproduction, and Contemporary Performance(セッション名)	第16回日本アジア研究学会	フィルムセンター主任研究員・岡田秀則	2012年6月30日	立教大学	約40

「日本の色彩映画—<1953年>を検証する」	早稲田大学演劇映像学連携研究拠点テーマ研究「日本映画, その史的社会的諸相の研究」主催公開研究会	フィルムセンター主任研究員・岡田秀則	2012年7月21日	早稲田大学	約20
------------------------	--	--------------------	------------	-------	-----

[雑誌等論文掲載](本館・工芸館)

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
「美術館活用術—ロンドン・テート・ギャラリー」	主任研究員・一條彰子	『美育文化』62巻6号	2012年11月
「博物館における青少年教育」ドイツ派遣事業に参加して」	主任研究員・一條彰子	『全美フォーラム』3号(全国美術館会議)	2013年1月
作品解説「古賀春江」「三岸好太郎」「北脇昇」「鬨光」	主任研究員・大谷省吾	『美術手帖』967号(美術出版社)	2012年6月
「浅見貴子」	主任研究員・大谷省吾	『第5回東山魁夷記念日経日本画大賞展』カタログ(日本経済新聞社)	2012年5月
「Pre-history of APN: Kiyoji Ohtsuji and Nobuya Abe」(翻訳: Mélanie Mermod)	主任研究員・大谷省吾	『APN RESEARCH あぶん』カタログ(クンストハレ, ベルン)	2012年8月
「小谷野夏木」	主任研究員・大谷省吾	『VOCA2013』カタログ(上野の森美術館)	2013年3月
「熊谷守一 裸婦をめぐる実験」	美術課長・蔵屋美香	『花美術館』26号	2012年6月
「日本美術と影 十選」	美術課長・蔵屋美香	『日本経済新聞』	2012年9月25日～10月11日
「MOMAT コレクションリニューアルについて」	美術課長・蔵屋美香	『美術手帖』967号(西澤徹夫と共著, 美術出版社)	2012年6月
作品解説「萬鉄五郎」「村山槐多」「関根正二」	美術課長・蔵屋美香	『美術手帖』967号(美術出版社)	2012年6月
「Women's Art 自然と女性—おなじみの主題がもつ意味」	美術課長・蔵屋美香	『ウィラーン』709号(公益財団法人日本女性学習財団)	2012年6月
「Women's Art 自然と女性2—上から目線のそのわけは…」	美術課長・蔵屋美香	『ウィラーン』710号(公益財団法人日本女性学習財団)	2012年7月

	「MOMAT コレクションリニューアルを振り返る」	美術課長・ 蔵屋美香	『美術手帖』976号(西澤徹夫と 共著, 美術出版社)	2012年12月
	「実技 所蔵作品展を見よう」	美術課長・ 蔵屋美香	小沢剛・塚本由晴『線の演習 建築学生のための美術入門』 (小沢剛と共著, 彰国社)	2012年12月
	連載「写真のバックストーリー」	客員研究員・ 小林美香	『ときの忘れもの』ウェブサイト	2012年4月 10日～2013 年2月25日
	「“Ma” and Photography: Four Emerging Female Artists from Japan」	客員研究員・ 小林美香	『Trans Asia Photography Review』(ウェブサイト)	2012年春
	「The Stranger In Marrakech」	研究補佐員・ 柴原聡子	『ANOTHER AFRICA』ウェブサイト	2012年5月
	「夏の家」	研究補佐員・ 柴原聡子	『10+1 website』ウェブサイト (LIXIL 出版)	2013年1月
	「近代美術の眼 長原孝太郎 《残雪》」	主任研究員・ 鈴木勝雄	『読売新聞』都内版	2012年3月 8日
	「近代美術の眼 大下藤次郎 《穂高山の麓》」	主任研究員・ 都築千重子	『読売新聞』都内版	2012年5月 18日
	「近代美術の眼 谷中安規 《春の自転車》」	主任研究員・ 都築千重子	『読売新聞』都内版	2013年1月 11日
	「武田史子」	主任研究員・ 都築千重子	『第1回 PAT in Kyoto 京都版 画トリエンナーレ 2013』カタログ (京都市美術館)	2013年2月
	「吉川霊華展 究極の線を求めて」	主任研究員・ 鶴見香織	『美術の窓』366号(生活の友 社)	2012年7月
	「吉川霊華展 近代にうまれた 線の探究者」	主任研究員・ 鶴見香織	『月刊水墨画』279号(ユーキャ ン)	2012年6月
	「近代美術の眼 狩野芳崖 《仁王捉鬼》」	主任研究員・ 鶴見香織	『読売新聞』都内版	2012年11月 9日
	コラム, 作品解説, 作家解説	主任研究員・ 鶴見香織	『Arte In Giappone 1868-194 5』カタログ(ローマ国立近代美 術館)	2013年2月
	作品解説「徳岡神泉」「小林 古径」	主任研究員・ 中村麗子	『美術手帖』967号(美術出版 社)	2012年6月
	連載「美術」	主任研究員・ 保坂健二郎	『すばる』(集英社)	2012年4月 ～2013年3 月

	連載「視線」	主任研究員・保坂健二郎	『朝日新聞』	2012年4月22日, 6月3日, 7月8日, 8月12日, 9月16日, 10月21日, 12月2日, 2013年1月13日, 2月17日, 3月24日
	「The Possibilities of Japanese Art Brut」	主任研究員・保坂健二郎	『Art Brut from Japan』(Het Dolhuys)	2012年4月
	「勇敢と格好悪さのはざままでフロネーシスを持つデザイナーとしての中島英樹」	主任研究員・保坂健二郎	『DAIWA PRESS VIEWING ROOM 13 HIDEKI NAKAJIMA』(Daiwa Press)	2012年5月
	「アートインスパイアデザイン」	主任研究員・保坂健二郎	『倉俣史朗読本』(エクスナレッジ)	2013年7月
	「なぜスーパー・ワールド・オン・ペーパーなのか」	主任研究員・保坂健二郎	『スーパー・ワールド・オン・ペーパー 古久保憲満と松本寛庸』(ボーダレス・アートミュージアム NOMA)	2012年8月
	「時評 建築(展)と美術館のこれからの“感じ”」	主任研究員・保坂健二郎	『凶区』(BOOK PEAK)	2012年9月
	「建築家とキュレーターの新しい関係」	主任研究員・保坂健二郎	『「山下保博×アトリエ・天工人」展覧会レポート』(TOTO ギャラリー・間ウェブサイト)	2012年10月
	「アール・ブリュットとはなにか」	主任研究員・保坂健二郎	『手をつなぐ』(全日本手をつなぐ育成会)	2012年10月
	「なぜヴァレリオ・オルジャティは「建築」に立ち向かえるのか? :カール・バルトの神学を手掛かりに」	主任研究員・保坂健二郎	『a+u』(新建築社)	2012年12月
	「A propos des cartes de Robert Coutelas」(翻訳:岸真理子・モリア)	主任研究員・保坂健二郎	『Les monde de Robert Coutelas 1930-1985: La collection Jeanne Matossian』(Musée des beaux-arts de Chartres)	2012年12月
	「東京ブロック 再生・ボーダレス・初」	主任研究員・保坂健二郎	『ZENBI』vol.3(全国美術館会議)	2013年1月
	「ポコラートと日本のアート」	主任研究員・保坂健二郎	『アール・ブリュット? アウトサイダー・アート? ポコラート! 福祉×表現×美術×魂』(3331 Arts Chiyoda)	2013年1月



	連載「月評」	主任研究員・保坂健二郎	『新建築』(新建築社)	2013年1月、3月
	「戦略家としてのフランシス・ベーコン」, 解説, 鼎談	主任研究員・保坂健二郎	『美術手帖』980号(美術出版社)	2013年3月
	「近代美術の眼 恩地孝四郎『あるヴァイオリニストの印象(諏訪根自子像)』」	主任研究員・保坂健二郎	『読売新聞』(都内版)	2012年6月15日
	「MOMAT コレクション こどもセルフガイド」	研究補佐員・細谷美宇	『教育美術』(教育美術振興会)	2012年11月
	「国立美術館 アートカード・セット」	研究補佐員・細谷美宇	『教育美術』(教育美術振興会)	2012年11月
	「装置としての作品—高松次郎の《点》／《紐》シリーズ再考」	研究員・榎田倫広	『Jiro Takamatsu Critical Archive』(ユミコチバアソシエイツ)	2012年6月
	「イラストレーションならざる絵画とは?」, 解説, 鼎談(特集フランシス・ベーコン)	研究員・榎田倫広	『美術手帖』980号(美術出版社)	2013年3月
	「近代美術の眼 石井茂雄《戒厳状態》」	研究員・榎田倫広	『読売新聞』都内版	2012年12月14日
	「近代美術の眼 瑛九《青の中の丸》」	研究員・榎田倫広	『読売新聞』都内版	2013年2月8日
	「近代美術の眼 伊藤義彦《imagery 728500007》」	主任研究員・増田玲	『読売新聞』都内版	2012年7月13日
	「近代美術の眼 植田正治《パパとママと子供たち》」	主任研究員・増田玲	『読売新聞』都内版	2012年10月12日
	「道を横から撮る—北井一夫の写真について」	主任研究員・増田玲	『北井一夫 いつか見た風景』展カタログ(東京都写真美術館)	2012年11月
	「発見され続ける植物写真群—カール・ブロスフェルトの写真について」	主任研究員・増田玲	『カール・ブロスフェルト展』カタログ(Fuji Xerox Art Space)	2013年1月
	「Tohoku について」	主任研究員・増田玲	Hans-Christiaan Schink 『Tohoku』(Hatje Cantz)	2013年3月
	「独立行政法人国立美術館による文化財レスキュー活動」	副館長・松本透	『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会 平成23年度活動報告書』	2012年10月
	「日本の同時代美術 1970年代以後—その歴史性について」, 作家解説(村岡三郎, 河口龍夫, 伊藤隆介)	副館長・松本透	『Re: Quest—1970年代以降の日本現代美術』展カタログ(国際交流基金)	2013年2月
	「審査講評」	副館長・松本透	『損保ジャパン美術賞展 FACE 2013』展カタログ(損保ジャパン東郷青児美術館)	2013年2月

	「物質と空間——鈴木久雄と多和圭三の彫刻」	副館長・松本透	『武蔵野美術大学共同研究 日本現代彫刻における素材・技法の制作的・理論的研究』	2013年3月
	(編集)	主任研究員・水谷長志	『美術家たちの証言—東京国立近代美術館ニュース『現代の眼』選集』(美術出版社)	2012年10月
	「メディア連携を企図する館史としての『東京国立近代美術館 60年史』—「美術館の歴史を一冊の参考図書とする」試み再論」	主任研究員・水谷長志	『アート・ドキュメンテーション通信』96号(アート・ドキュメンテーション学会)	2013年1月
	「Art Libraries and art documentation in Japan, 1986-2012: progress in networking in museums, libraries and archives and the ALC: Art Libraries' Consortium」	主任研究員・水谷長志	『Art Library Journal』vol.38, no.2(ARLIS/UK & Ireland)	2013年3月
	「話題提供 アート・ミュージアムからの課題の提起」	主任研究員・水谷長志	『地域に生きるミュージアム』(現代企画室)	2013年3月
	書評「『パウル・クレー 造形の宇宙』(著 前田富士男)」	主任研究員・三輪健仁	『美術の窓』352号(生活の友社)	2013年1月
	「神村恵」(「この劇団がすごい! 2013」)	主任研究員・三輪健仁	『ユリイカ』(青土社)	2013年1月
	「画家とアーカイブズの関係についての覚え書き パウル・クレーを事例として」	研究補佐員・渡邊美喜	『GCAS Report』Vol.2(学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻)	2013年3月
	翻訳 キム・エバーハード, ステイーブ・ステファノブロス「第16章 図面、写真、モノ資料」	研究補佐員・渡邊美喜	オーストラリア・アーキビスト協会『キーピング・アーカイブズ』(勉誠出版ウェブサイト連載, 第17回~第24回)	2012年7月~10月
	Japanese Crafts and Cultural Exchange with the USA in the 1950s: Soft Power and John D. Rockefeller III during the Cold War	主任研究員・木田拓也	Journal of Design History (Oxford University Press)	2012年10月
	Japanese Art Crafts—From Modern to Contemporary	主任研究員・諸山正則	L' eleganza Della Memoria The Elegance of Memory (sillabe s.r.l.) (フィレンツェ・ピッティ宮殿「日本のわざと美—近現代工芸の精華—」展図録)	2012年4月
	バーナード・リーチと日本—個人作家の使命—	主任研究員・諸山正則	バーナード・リーチ(朝日新聞社)	2012年8月

茶事にまつわる“うつわ”－陶を中心に－	工芸課長・唐澤昌宏	「茶事にまつわる“うつわ”－陶を中心に－」展リーフレット	2012年6月
作家作品解説	唐澤昌宏(工芸課長)・諸山正則(主任研究員, 以下同じ)・今井陽子・木田拓也・北村仁美	L'eleganza Della Memoria The Elegance of Memory (sillabe s.r.l.) (フィレンツェ・ピッティ宮殿「日本のわざと美－近現代工芸の精華－」展図録)	2012年4月
京都の染織	主任研究員・今井陽子	美しいキモノ(ハースト婦人画報社)	2012年8月

[雑誌等論文掲載](フィルムセンター)

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
<座談会>記録映画の保存と活用にむけて	フィルムセンター主任研究員・榎木章(執筆者名はとちぎあきら)	記録映画アーカイブ 1 岩波映画の1億のフレーム(東京大学出版会)	平成24年5月30日
CIE 映画フィルムのアーカイビング	フィルムセンター主任研究員・榎木章(執筆者名はとちぎあきら)	占領する眼・占領する声 CIE/USIS 映画と VOA ラジオ(東京大学出版会)	平成24年7月31日
共鳴する身体と音－喜劇映画の「笑い」を増幅する音響効果	フィルムセンター研究員・大傍正規	『メディア文化論』(ナカニシヤ出版)	平成25年3月30日
『還ってきた文楽フィルム『日本の人形劇－人形浄瑠璃』研究報告』	フィルムセンター主任研究員・岡田秀則	『映像学』第88号(日本映像学会)	2012年5月25日
映画史の中の岩波科学映画	フィルムセンター主任研究員・岡田秀則	『岩波映画の1億フレーム』(東京大学出版会)	2012年5月30日
《ノンフィルム》－もう一つの映画のアーカイブ	フィルムセンター主任研究員・岡田秀則	『アーカイブのつくりかた 構築と活用入門』(勉誠出版)	2012年11月30日

(イ) 京都国立近代美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
ドイツにおける型紙の受容とモダン・デザインの誕生『シンポジウム「KATAGAMI Style もうひとつのジャポニスム」』	日仏会館フランス事務所主催	主任研究員・池田祐子	2012年5月16日	日仏会館ホール	120
世紀転換期の〈植物表現〉—ユーゲントシュティールからモダンデザインへ『シンポジウム《植物を描く／植物で描く》—ドイツ語圏の美術でたどる植物表現の可能性—』	明治学院大学言語文化研究所・明治学院大学文学部芸術学科・ドイツ語圏美術史研究連絡網主催	主任研究員・池田祐子	2012年12月2日	明治学院大学白金校舎	53
「装飾とフォルムに見られる日本と自然に関する言説—ドイツの世紀転換期を中心に」『国際シンポジウム「装飾とデザインのジャポニスム」』	日本女子大学文化学科主催	主任研究員・池田祐子	2012年12月15日	日本女子大学新泉山館大会議室	48

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
海外に渡った染め型紙とその影響—(KATAGAMI Style) 展をめぐって	主任研究員・池田祐子	染織情報 α (染織と生活社)	2012年7月号
根源性の憧憬—ドイツ表現主義とプリミティヴィスム	主任研究員・池田祐子	「ゴッホの夢」美術館(小学館)	2013年3月21日
ドイツ世紀転換期のデザインにおける自然の言説をめぐる試論	主任研究員・池田祐子	東西文化の磁場(国書刊行会)	2013年3月
世紀転換期の〈植物表現〉—ユーゲントシュティールからモダンデザインへ	主任研究員・池田祐子	『言語文化』第30号(明治学院大学言語文化研究所)	2013年3月

上野伊三郎・リチの活動に見る「東西文化の磁場」	学芸課長・ 山野英嗣	東西文化の磁場(国書刊 行会)	2013年3月
Gutai and Its Internationalism	主任研究員・ 平井章一	Destroy the Picture: Pain ting the Void, 1949-1962 (The Museum of Contemp orary Art, Los Angeles, S kira Rizzoli Publications)	2012年10月
Prewar Kansai Cosmopolita nism and Postwar Gutai	主任研究員・ 平井章一	Gutai: Splendid Playgroun d(Guggenheimu Museum, N.Y.)	2013年2月

(ウ)国立西洋美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講 者数
チャールズ・ウィルソン・ピールのミュージアムとアメリカ	アメリカ学会 第46回年次大会, 文化・芸術史分科 会	主任研究 員・ 横山佐紀	2012年6 月3日	名古屋大学	20
ナショナル・ポートレート・ギャラリーにおける思想・歴史	文化資源学会 第2回博士号取得 者研究発表会	主任研究 員・ 横山佐紀	2012年12 月8日	東京大学	50
作品情報の収集・整理・発信 ―現状と課題―	全国美術館会議 第27回学芸員研 修会	主任研究 員・ 川口雅子	2013年3 月25日	国立西洋美 術館講堂	100

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
ミロの寡黙な絵画	学芸課長・ 村上博哉	日仏美術交流シンポジウ ム シュルレアリスムの時 代―越境と混淆の行方(日 仏美術学会)	2012年6月20 日
ニューヨークのさまざまなミュージアムとアクセス・プログラム	主任研究員・ 横山佐紀	『博物館研究』Vol.48 No.1 (日本博物館協会)	2013年1月25 日
レファレンスブック・ガイド 13	主任研究員・ 川口雅子	アート・ドキュメンテーション 通信 96号	2013年1月25 日
部会報告 情報・資料研究部 会	主任研究員・ 川口雅子	Zenbi(全国美術館会議)	2013年1月31 日

ナショナル・ポートレート・ギャラリー その思想と歴史	主任研究員・横山佐紀	『ナショナル・ポートレート・ギャラリー その思想と歴史』(三元社)	2013年2月28日
----------------------------	------------	-----------------------------------	------------

(エ)国立国際美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
Curatorial Practice	Curators' Incubator Program at Hong-gah Museum	主任研究員・植松由佳	2012年6月24日	台北(台湾)	—
インサイド・アウトサイド	高松コンテンポラリー・アニュアル vol.02	主任研究員・植松由佳	2012年7月28日	高松	—
レッツトークアバウトアート	CCA キュレーター・ミーティング 2012	主任研究員・植松由佳	2012年9月28日～9月30日	北九州	—
モホイ=ナジ・ラースローと日本—戦前を中心に—	日本建築学会シンポジウム「近代建築史の最先端」第8回 近代(日本)×近代(西洋)—中東欧のモダニズムとその拡がり	客員研究員・森下明彦	2013年3月6日	大阪	約35名

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
「世界と人間」	主任研究員・中西博之	「高柳恵里 不意打ち」 TIME & STYLE MIDTOWN, 東京	2013年3月1日
「現代美術展を開催するということ」	主任研究員・植松由佳	『高松コンテンポラリー・アニュアル vol. 02』(高松市美術館, 香川)	2012年9月9日
「夢か、現か、幻か」	主任研究員・植松由佳	『文化庁月報』(文化庁)	2013年1月1日
「美術館での語らいの時間」	主任研究員・藤吉祐子	『文化庁月報』(文化庁)	2012年9月1日

「作品と鑑賞者をつなぐために～『ジュニア・セルフガイド』一枚の小さなシートから～」	主任研究員・藤吉祐子	『教育美術』(教育美術振興会)	2012年11月1日
モホイ=ナジ・ラースローと戦前の日本	客員研究員・森下明彦	Cross Sections Vol. 5(京都国立近代美術館研究論集)	2013年3月1日

(オ)国立新美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
「時代と絵画」/造形大プロジェクト「組替え絵画 私たちの作品を見てください Cathy project」	東京造形大学レクチャー	学芸課長・南雄介	2012年12月7日	東京造形大学	—

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
「大平實の新作」	副館長・福永治	『大平實展』展覧会リーフレット	2012年10月
「「新進アーティスト作品展 vol.11」総評、作品評」	副館長・福永治	『新進アーティスト作品展 vol.11』財団法人富士市文化振興財団	2013年3月
「展評「中村と村上」展」(再録)	学芸課長・南雄介	美術手帖編『村上隆完全読本 美術手帖全記事 1992-2012』(美術出版社)	2012年6月
「国立新美術館 与えられた形象—辰野登恵子/柴田敏雄」	学芸課長・南雄介	『文化庁月報』9月号 No. 528(WEB版)	2012年9月
「日本の現代美術——その国際性について」	学芸課長・南雄介	『組替え絵画 私たちの作品を見てください Cathy project』(学校法人桑沢学園 東京造形大学)	2013年1月
「マルセル・デュシャン」(再録)	学芸課長・南雄介	美術手帖編『現代アートの巨匠 先駆者たちのく作品・ことば・人生』(美術出版社)	2013年2月

	「フランス国立クリュニー中世美術館所蔵 貴婦人と一角獣展」	学芸課長・南雄介	『美術の窓』(生活の友社)	2013年2月	
	「アメリカン・ポップ・アート展」	学芸課長・南雄介	『美術の窓』(生活の友社)	2013年2月	
	「よみがえるニッポンのチャレンジ精神と創造的エネルギー」	主任研究員・平井章一	『文化庁月報』7月号 No.526(文化庁)	2012年7月	
	「前衛グループ『具体』回顧展」	主任研究員・平井章一	東京新聞(中日新聞, 北陸中日新聞, 日刊県民福井)	2012年8月29日	
	「西欧絵画をめぐる400年」	主任研究員・本橋弥生	『文化庁月報』4月号 No.523(文化庁)	2012年4月	
	「第4章 19世紀 ロマン派からポスト印象派まで 進化する世紀」, 「第5章 20世紀 マティスとその周辺 アヴァンギャルドの世紀」, 「パブロ・ピカソ」	主任研究員・本橋弥生	『ぶらぶら美術・博物館 おさんぽアートブック 2012-2013』(日本テレビ放送網株式会社)	2012年5月25日	
	「大エルミタージュ美術館展 世紀の顔・西欧絵画の400年」	主任研究員・本橋弥生	『新美術新聞』(No.1281)6月1日号	2012年6月	
	「国立新美術館『アーティスト・ファイル 2013—現代の作家たち』展に寄せて」	主任研究員・西野華子	『文化庁月報』2月号 No.533(文化庁)	2013年2月	
	「南北の往復から見るセザンヌ—展覧会史における『セザンヌ—パリとプロヴァンス』展の意義」	アソシエイト・フェロー・工藤弘二	『シンポジウム記録集「セザンヌ—パリとプロヴァンス」展から見る今日のセザンヌ』	2013年3月	
	「フィンランドの話、始めます。」「フィンランドのライフスタイル—くらしとデザインにまつわる4つの話」/「フィンランドのくらしとデザイン—ムーミンが住む、森の生活」展覧会カタログ(第2刷)	アソシエイト・フェロー・吉澤菜摘	株式会社キュレイターズ	2012年10月	
	『国立新美術館ガイドブック ハロー!!カリフォルニア・デザイン』(共著)	アソシエイト・フェロー・吉澤菜摘	国立新美術館	2013年3月	
	「綜観東京国立新美術館之圖書與資訊服務」(Overview of the Library and Information Services at the National Art Center, Tokyo)	アソシエイト・フェロー・谷口英理	『美術論叢』(第87号)台北市立美術館	2012年8月	



【学会等発表、雑誌等論文掲載での発信 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
学会等発表	7	36	39	51	48	61	68
雑誌等論文掲載	2	67	57	63	53	79	114

ウ インターネットによる調査研究成果の発信

(ア) 東京国立近代美術館

『研究紀要』の収録論文をホームページ上に掲載した。

また、本館所蔵作品展のリニューアルに伴い、同館 HP 内の紹介記事を一新し、展示室内の写真を変えながら、特集展示の内容、見どころ、その他ファシリティーなどを分かりやすくアピールする作りとした。

(イ) 京都国立近代美術館

当館ホームページ上に、開催各展覧会の概要を掲載するとともに、コレクション・ギャラリーについても、「小企画」の概要を掲載した。さらに、「50周年記念特別展 交差する表現」展については、特設サイト上に、展覧会の概要及び当館の「50年の歩み」についての解説文を掲載した。

(ウ) 国立西洋美術

「国立西洋美術館ニュース Zephyros」をホームページ上に掲載した。

また、研究資料センターで提供している電子ジャーナルやマイクロ資料等の情報源を案内した、美術館学芸員・西洋美術史研究者向けの西洋美術分野のレファレンス・ガイドである「国立西洋美術館研究資料センター 学術情報案内」をホームページ上で発信した。

(エ) 国立新美術館

「国立新美術館活動報告」及び「国立新美術館ニュース」を、当館ホームページにおいて公開した。

エ その他

(ア) 京都国立近代美術館

当館の研究員が中心になって平成 21 年度から 4 か年にわたって研究を進めてきた科学研究費補助金(基盤研究 A)「東西文化の磁場 日本近代建築・デザイン・工芸の脱一、超一領域的作用史の基盤研究」が平成 24 年度 3 月末で終了するに際し、その最終報告も兼ねた書籍『東西文化の磁場 日本近代の建築・デザイン・工芸における境界的作用史の研究』が国書刊行会から出版された(平成 25 年 3 月)。

(イ) 国立西洋美術館

青柳正規館長監修，国立西洋美術館編により「朝日おとなの学びなおし 美術 西洋美術史」(朝日新聞出版，平成 25 年 1 月 30 日)を刊行した。執筆には渡辺晋輔，高梨光正，陳岡めぐみ，村上博哉，大屋美那(以上主任研究員)，中田明日佳，新藤淳，川瀬佑介(以上研究員)，幸福輝(客員研究員)があたった。

(ウ)国立国際美術館

主任研究員植松由佳が，文部科学省平成 24 年度学芸員等在外派遣研修に採択され，「我が国の博物館政策の参考となる海外の実践活動・研究事例について」というテーマで研修を実施した。

(エ)国立新美術館

「セザンヌーパリとプロヴァンス」展では，記録集「シンポジウム『セザンヌーパリとプロヴァンス』展から見る今日のセザンヌ」を刊行した。

② 所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催

ア 東京国立近代美術館

(本館・工芸館)

セミナー・シンポジウム名	工芸館巡回展ギャラリートーク	開催日	平成 24 年 8 月 5 日
場所	益子陶芸美術館展示室	聴講者数	56 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	唐澤昌宏(東京国立近代美術館工芸課長)		
内容	工芸館巡回展に伴うギャラリートーク。当館所蔵作品の中から選び抜いて構成した「茶事にまつわる『うつわ』」展について，企画意図や出品作品を紹介した。		
セミナー・シンポジウム名	所蔵作品展「寿ぎ」のうつわ講演会	開催日	平成 25 年 1 月 12 日
場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数	約 150 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	講演者：室瀬和美(漆芸家)，横溝廣子(東京藝術大学准教授)，北村仁美(東京国立近代美術館工芸課主任研究員)		
内容	「所蔵作品展『寿ぎ』のうつわ」の関連イベントとして開催した講演会。特に，明治時代から様々に議論されてきた，漆芸技法「末金鏤」を中心に，時代ごとの理解の変遷と表現との結び付きをテーマとした。		

(フィルムセンター)

セミナー・シンポジウム名	「日本の映画ポスター芸術」監督映画上映記念 和田誠氏によるアフタートーク	開催日	平成 24 年 12 月 8 日
場所	京都国立近代美術館講堂	聴講者数	100 人

講師・パネリスト等の氏名(職名)	和田誠(イラストレーター・映画監督)、岡田秀則(フィルムセンター主任研究員)
内容	和田氏の監督作品と手がけた映画ポスターについてのトーク。

イ 国立西洋美術館

セミナー・シンポジウム名	平成 24 年度国立美術館巡回展「国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」ギャラリートーク	開催日	平成 24 年 10 月 5 日
場所	井原市立田中美術館	聴講者数	40 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	村上博哉(国立西洋美術館学芸課長)		
内容	国立美術館巡回展の岡山展に伴うギャラリートーク。所蔵作品により 19 世紀から 20 世紀中葉にかけてのヨーロッパ近代美術の流れを紹介した「国立美術館巡回展 国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」展について、企画意図や出品作品を紹介した。		
セミナー・シンポジウム名	平成 24 年度国立美術館巡回展「国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」講演会	開催日	平成 24 年 11 月 10 日
場所	井原市立田中美術館	聴講者数	47 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	陳岡めぐみ(国立西洋美術館学芸課主任研究員)		
内容	国立美術館巡回展の岡山展に伴う講演会。所蔵作品により 19 世紀から 20 世紀中葉にかけてのヨーロッパ近代美術の流れを紹介した「国立美術館巡回展 国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」展について、企画意図や出品作品を紹介した。		
セミナー・シンポジウム名	平成 24 年度国立美術館巡回展「国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」ギャラリートーク	開催日	平成 24 年 12 月 22 日
場所	島根県立石見美術館	聴講者数	30 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	新藤淳(国立西洋美術館学芸課研究員)		
内容	国立美術館巡回展の島根展に伴うギャラリートーク。所蔵作品により 19 世紀から 20 世紀中葉にかけてのヨーロッパ近代美術の流れを紹介した「国立美術館巡回展 国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」展について、企画意図や出品作品を紹介した。		
セミナー・シンポジウム名	平成 24 年度国立美術館巡回展「国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」講演会	開催日	平成 25 年 1 月 13 日
場所	島根県立石見美術館	聴講者数	56 人

○ 国内外の優れた研究者を招聘しシンポジウムを開催するなど、美術館活動に対する示唆が得られるよう取り組むとともに、人的ネットワークの構築を推進したか。

講師・パネリスト等の氏名(職名)	村上博哉(国立西洋美術館学芸課長)
内容	国立美術館巡回展の島根展に伴う講演会。松方コレクションを中心とした近代美術コレクションの形成の歴史や、「国立美術館巡回展 国立西洋美術館所蔵 ヨーロッパの近代美術」展の企画意図及び出品作品を紹介した。

【所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
セミナー・シンポジウム	11	5	14	12	12	7	7

所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催は、国内外の優れた研究者を招へいするなど人的ネットワークの構築に取り組んでおり、評価できる。

(2) 国内外の美術館等との連携

① シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築

ア 東京国立近代美術館  
(本館・工芸館)

セミナー・シンポジウム名	東京国立近代美術館 60 周年記念シンポジウム 近代美術館の誕生—前史から未来へ	開催日	平成 24 年 12 月 1 日
場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数	117 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	木下直之(東京大学教授), 五十殿利治(筑波大学教授), 高橋裕次(東京国立博物館学芸企画部博物館情報課長), 水沢勉(神奈川県立近代美術館長), 島田紀夫(ブリヂストン美術館長), 松本透(東京国立近代美術館副館長), 蔵屋美香(東京国立近代美術館美術課長)		
セミナー・シンポジウム名	戦後日本美術の新たな語り口を探る—ニューヨークと東京、二つの近代美術館の展覧会を通して見えてくるもの	開催日	平成 24 年 12 月 23 日
場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数	145 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ドリュン・チョン(ニューヨーク近代美術館アソシエイト・キュレーター), ガブリエル・リッター(ダラス美術館アシスタント・キュレーター), 林道郎(上智大学国際教養学部教授), 前山裕司(埼玉県立近代美術館首席学芸主幹), 鈴木勝雄(東京国立近代美術館主任研究員)		
セミナー・シンポジウム名	オリエンタル・モダニティ: 東アジアのデザイン史 1920-1990	開催日	平成 24 年 7 月 15 日
場所	東京国立近代美術館講堂	聴講者数	90 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	樋田豊郎(秋田公立美術短期大学学長), 菊池裕子(ロンドン芸術大学教授), リン・ウェッシー(ロンドン芸術大学准教授), リー・ユナ(ブライトン大学准教授), 菅靖子(津田塾大学准教授), 木田拓也		

(東京国立近代美術館主任研究員), 井口壽乃(埼玉大学教授)

(フィルムセンター)

セミナー・シンポジウム名	世界のアニメーション	開催日	平成 24 年 4 月 23 日, 24 日
場所	中国電影資料館劇場(中国・北京)	聴講者数	150 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	フィルムセンターから出席した岡島尚志(フィルムセンター主幹), 榎木章(フィルムセンター主任研究員), 岡田秀則(フィルムセンター主任研究員)を含む 11 の国・地域から参加した 26 名の講師・パネリスト		

イ 京都国立近代美術館

セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「近代日本画と工芸 1868-1945」	開催日	平成 25 年 2 月 26 日
場所	ローマ日本文化会館	聴講者数	約 50 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	尾崎正明(館長), 松原龍一(主任研究員)		

ウ 国立西洋美術館

セミナー・シンポジウム名	国際シンポジウム「時の作用と美学」	開催日	平成 24 年 4 月 14 日
場所	国立西洋美術館講堂	聴講者数	85 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	高階秀爾(大原美術館館長), 小佐野重利(東京大学教授), バルテレミ・ジョベール(パリ第 4 大学教授), ギョーム・ファルー(ルーヴル美術館キュレーター), 三浦篤(東京大学教授), 阿部成樹(中央大学教授), 陳岡めぐみ(国立西洋美術館主任研究員)		
セミナー・シンポジウム名	彩色文化遺産の有機物質の分析に関するシンポジウム	開催日	平成 25 年 1 月 7 日
場所	東京文化財研究所 地下会議室	聴講者数	70 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	谷口陽子(筑波大学・助教), Joy Mazurek(Getty保存研究所・Assistant Scientist), 島津美子(東京文化財研究所・特別研究員), 中澤隆(奈良女子大学・教授), 高嶋美穂(国立西洋美術館・研究補佐員)		

エ 国立国際美術館

セミナー・シンポジウム名	歴代館長によるシンポジウム「国立国際美術館のこれまでとこれから」	開催日	平成 24 年 4 月 28 日
場所	国立国際美術館地下 1 階講堂	聴講者数	68 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	司会:山梨 俊夫(国立国際美術館館長) パネリスト:木村重信(美術評論家・国立国際美術館元館長), 宮島久雄(高松市美術館館長・国立国際美術館元館長), 建島哲(京都市立芸術大学学長・埼玉県立近代美術館館長・国立国際美術館前館長)		
セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「写真の誘惑ー視線の行方」	開催日	平成 24 年 5 月 12 日・13 日
場所	国立国際美術館地下 1 階講堂	聴講者数	758 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	司会:植松由佳(国立国際美術館主任研究員), 竹内万里子(国立国際美術館客員研究員) パネリスト:青山勝(大阪成蹊大学芸術学部准教授), 五十嵐太郎(東北大学教授), 笠原美智子(東京都写真美術館事業企画課長), 加治屋健司(広島市立大学芸術学部准教授), 佐藤守弘(京都精華大学デザイン学部准教授), 島敦彦(国立国際美術館学芸課長), 管啓次郎(比較文学者, 詩人), 鈴木理策(写真家), 鷹野隆大(写真家), 畠山直哉(写真家), ブブ・ド・ラ・マドレーヌ(現代美術作家), 前田恭二(読売新聞文化部記者), 森村泰昌(美術家), ヨコミゾマコト(建築家), 米田知子(写真家)		

オ 国立新美術館

セミナー・シンポジウム名	『『セザンヌーバリオとプロヴァンス』展から見る今日のセザンヌ』	開催日	平成 24 年 5 月 26 日
場所	国立新美術館	聴講者数	188 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	永井隆則(京都工芸繊維大学准教授), 工藤弘二(国立新美術館アソシエイト・フェロー), 三浦篤(東京大学教授), 新畑泰秀(石橋財団ブリヂストン美術館学芸課長)		
セミナー・シンポジウム名	「現代ロシアとエルミタージュ美術館」	開催日	平成 24 年 6 月 3 日
場所	国立新美術館	聴講者数	166 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	沼野充義(東京大学教授, ロシア・東欧文学者), 鴻野わか菜(千葉大学准教授, ロシア文学者), 青木保(当館館長)		
セミナー・シンポジウム名	『『具体』再評価の過去と現在』	開催日	平成 24 年 7 月 14 日
場所	国立新美術館	聴講者数	105 人

○ 海外の美術館において、我が国の優れた作家や美術作品を世界に広く紹介する展覧会が活発に行われるよう、海外の美術館との連携・協力を積極的に取り組んだ。

国立美術館本部の ASEMUS (Asia-Europe Museum Network) 加盟や、京都国立近代美術館とローマ国立美術館との協力体制の確立など、諸外国にお

講師・パネリスト等の  
氏名(職名)

河崎晃一(インディペンデント・キュレーター), ミン・ティアンポ(カール  
トン大学准教授, グッゲンハイム美術館「具体」展共同キュレーター),  
マテイヤス・フィッサー(ゼロ・ファンデーション設立ディレクター), 萬  
木康博(美術評論家), 平井章一(当館学芸課主任研究員)

## ② 我が国の作家, 美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協 ア 東京国立近代美術館

本館では, 「Yayoi Kusama」(2012年2月1日-5月20日, テートモダン, ロンドン/6  
月20日-9月20日 ホイットニー美術館, ニューヨーク), 「William Klein + Daido  
Moriyama: New York + Tokyo + Film + Photo」(2012年10月10日-2013年1月13日,  
テートモダン, ロンドン), 「Drawing Surrealism, 1915-1945」(2012年10月21日-2013年  
1月6日, ロサンゼルス・カウンティ美術館/2013年1月25日-5月12日, モルガン  
図書館・美術館, ニューヨーク), 以上の海外展について, 日本人作家の作品を貸与し, そ  
の開催に協力した。

また, 広くアジアの近代美術を収集・展示する計画のシンガポール新美術館(2015年開  
館予定)と, 日本近代美術作品の展示について, そのコンセプト, 貸与の実現等に向け,  
協議を行った。

さらに, 「国吉康男展」開催準備のため, (公財)直島福武美術館財団, Smithsonian  
American Art Museum の作品調査に協力した。

工芸館では, 文化庁, イタリア・フィレンツェ国立美術監督局とともに主催したピッティ宮  
殿「白の間」における「日本のわざと美—近現代工芸の精華—」展開催に当たり, 同宮殿  
内の銀器博物館等と連携・協力を行った。

フィルムセンターでは, チネテカ・デル・コムエ・ディ・ボローニャ(FIAF 加盟機関)との  
共催による第26回チネマ・リトロバート映画祭・特集企画「日本が声を上げる! 陽が昇  
る地から来た最初のトーキー映画」において, レコードトーキーや活弁トーキーなどのユニ  
ークなサウンド形式を持つ作品を含む13本の映画フィルム(うち1本は, 外国映画に日  
本語による活弁を付したフィルム)を, すべて英語字幕付きで上映し, 映画の音に挑んだ  
日本の映画監督や技術者による多彩な試みについて, 映画祭に参加した世界各国の研  
究者やアービストの認識を高めることができた。本番組の一部はその後, ニューヨーク近  
代美術館(FIAF 加盟機関)からの貸与申請を受け, 同館が主催する第10回国際映画保  
存映画祭にて上映が行われた。

また, 平成23年度, 共催によりアメリカ及びフランスの3会場で実施した「『日活百年』  
海外巡回上映会」について, 平成24年度はオーストラリア国立映画音響アーカイブ(FIAF  
加盟機関)をはじめとして8カ国, 10会場に対し, 計38本の映画フィルムを貸与すること  
により, 上映会への協力を行った。

いて, 国際会議や所蔵作家の展覧会な  
どを通じた連携・協力体制の推進に取り  
組んでおり, 評価できる。

フィルム・センターにおける海外との連  
携活動は一貫しており, 評価できる。

ナショナルセンターとして今後, 国際交  
流に関する中期的な展望に向けた一層  
の努力を求めたい。

<p>○ 国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等と保存・修復に関する情報交換を図りながら、修復・保存活動の充実に取り組んだか。</p>	<p>イ 京都国立近代美術館 当館と国際交流基金との共催で、ローマ国立近代美術館において「近代日本画と工芸の流れ 1868-1945」展を開催し(2013年2月26日から5月5日まで)、当館の尾崎正明館長及び松原龍一主任研究員が、企画及び作品選定を担当した。これは当館をはじめ国内の美術館ほかが所蔵する我が国の日本画・工芸作品計 170 点によって構成されたものであり、我が国の近代美術作品を海外で紹介する貴重な機会となった。また、開会初日には、上記の国際シンポジウムも開催した(パネラーは日本から 3 名、イタリアから 2 名)。</p> <p>ウ 国立国際美術館 平成 25 年度開催予定の「あなたの肖像－工藤哲巳回顧展」の準備のため、ニューヨーク近代美術館で開催した企画展「TOKYO 1955-1970－A NEW AVANT」の調査を行い、成果を共有し連携協力した。</p> <p>③ その他海外の美術館との連携・協力 国立美術館本部では、ASEMUS (Asia-Europe Museum Network)に加盟するとともに、韓国国立中央博物館(ソウル)で開催された ASEMUS 執行委員会及び総会に青柳理事長代理として山梨国際美術館長が出席した。また、シルパカラ・アカデミー(バングラデシュ)で開催された第 6 回アジア美術館長会議(AAMDF)に小松理事、松本東近美副館長及び建畠埼玉県立近代美術館長が出席した。</p> <p>京都国立近代美術館では、日豪美術館学芸員交流に基づきオーストラリア国立美術館主任学芸員を招聘し、京都、大阪、神戸及び東京の美術館及び博物館を訪問し、美術関係者と交流した。また、我が国の古美術から近現代にいたる美術作品について理解を深めてもらうとともに、オーストラリア美術との交流を図った。</p> <p>(3)国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等との保存・修復に関する情報交換 ア 東京国立近代美術館 (本館) 平福百穂《丹鶴青瀾》の大規模修復するに当たり、東京藝術大学、横浜美術館、練馬区立美術館の専門家と意見交換を行った。また、鬚光《馬》について、東京文化財研究所の協力のもと、赤外線による撮影・調査を行った。 (フィルムセンター) 福岡市総合図書館(FIAF 加盟機関)、神戸映画資料館、映画保存協会、記録映画保存センター、日本動画協会、映画製作各社、現像所等より、映画フィルムに関する新たな所在情報を得た。</p>	<p>国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等との保存・修復に関する情報交換については、優れた水準で目標を達成しており、評価できる。</p>
--	---	--



○ 所蔵作品については、その保存状況や各館における展示計画等を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に行ったか。

また、中国電影資料館、ミュンヘン映画博物館、チネテカ・デル・コムーネ・ディ・ボローニャ（以上 FIAF 加盟機関）、京都府京都文化博物館、日本動画協会、記録映画保存センター、大手映画製作会社、現像所、映画フィルム製造会社、映画関連機器メーカー等との間で、映画フィルムの保存・復元に関する調査や情報交換を行った。

さらに、釜山シネマフォーラム、「映画の復元と保存に関するワークショップ」、記録映画アーカイブ・プロジェクト、明治学院大学、企業史料協議会等が主催するシンポジウムやワークショップに参加することで、参加者との情報交換に努めた。

#### イ 京都国立近代美術館

東京国立近代美術館フィルムセンターとの共催で、同館等が収蔵する日本のポスター作品によって構成した展覧会「日本の映画ポスター芸術」を開催するとともに、展示に際してポスター等の保存・修復についても情報交換を行った。

#### ウ 国立西洋美術館

平成 24 年度はゲッティ保存研究所研究員の Joy Mazurek 氏との共同で動物性タンパク質の分析に関するワークショップ及びシンポジウムを実施し、膠や卵テンペラ技法の分析技術の向上に努めると同時に、その重要性を内外にアピールした。なお、上記のシンポジウムは筑波大学西アジア文明研究センターとの共催で実施した。

#### エ 国立国際美術館

欧米では「time-based media」とされる映像、インスタレーションやパフォーマンスなどの新しい表現様式による作品を美術館の収蔵作品としていかに受け入れ、それを管理、保存、修復するかをテーマに調査研究を進めているが、当該分野では先進国である英国のテート・モダンや V&A, LUX, ブリティッシュ・カウンシルなどの機関と情報交換を行った。

### (4) 所蔵作品の貸与等

#### ① 作品の貸与

館名	貸出件数	貸出点数	特別観覧件数	特別観覧点数
東京国立近代美術館 (本館)	65	237	208	565
東京国立近代美術館 (工芸館)	23	233	36	81
京都国立近代美術館	54	351	83	189
国立西洋美術館	15	53	66	208
国立国際美術館	23	431	25	39
計	180	1,305	418	1,082

東京国立近代美術館本館では、特に震災復興支援として、「二年後。自然と芸術、そしてレ

所蔵作品の貸与等については、全体として適切な水準にあり、特に、震災復興支援として、重要文化財を特別貸与したことは、評価できる。

ただし、国立西洋美術館における貸し出しについては、貸出先等の事情などの問題もあるが、より一層の努力が求められる。

クイエム」展(茨城県近代美術館,平成25年2月5日-3月20日)に横山大観《生々流転》(重要文化財)を特別貸与した。また、「東山魁夷展」(宮城県美術館,平成24年7月20日-9月9日,北海道立美術館,平成24年9月22日-11月11日)には、「出品協力」名義とし,代表作18点を貸与した。また,「Yayoi Kusama」(2012年2月1日-5月20日,テートモダン,ロンドン/6月20日-9月20日 ホイットニー美術館,ニューヨーク),「William Klein + Daido Moriyama: New York + Tokyo + Film + Photo」(2012年10月10日-2013年1月13日,テートモダン,ロンドン),「Drawing Surrealism, 1915-1945」(2012年10月21日-2013年1月6日,ロサンゼルス・カウンティ美術館/2013年1月25日-5月12日,モルガン図書館・美術館,ニューヨーク),以上の海外展について,日本人作家の作品を貸与し,その開催に協力した。

工芸館では,文化庁が主催した徳島県立博物館「日本のわざと美展」をはじめ,愛知県陶磁資料館,石川県立美術館,うらわ美術館,大分県立芸術会館及び千葉県立美術館等への工芸作品,三菱一号館美術館ほかの巡回展「KATAGAMI Style」及び山口県立萩美術館・浦上記念館ほか巡回の「アール・デコ」展等に主要なデザイン作品を貸与した。海外では,文化庁が主催し当館も共催したフィレンツェ展「日本のわざと美—近現代工芸の精華—」では出品の多数を当館が貸与出品し,また,国際交流基金,京都国立近代美術館等が主催したローマ国立近代美術館「近代日本画と工芸の流れ 1868~1945」にも貸与した。

京都国立近代美術館では,イタリアのローマ国立近代美術館で,当館ほか主催して開催した「近代日本画と工芸の流れ 1968-1945」展に,所蔵作品日本画13点及び工芸21点を出品した。

国立西洋美術館では,平成23年度と比較し2件・21点増加した。バイエラー美術館(スイス)の「ドガの後期作品」展,グラン・パレ(フランス)及びマプフレ財団(スペイン)の「ボヘミアン」展,トリード美術館(アメリカ)及びロイヤル・アカデミー(イギリス)の「マネの肖像画」展,愛知県美術館及び宇都宮美術館の「マックス・エルンスト フィギュア×スケープ」展などに貸与を行った。

国立国際美術館では,「TOKYO 1955-1970—A NEW AVANT」展(ニューヨーク近代美術館(アメリカ)),「Re: Quest—1970年代以降の日本現代美術」展(主催:国際交流基金,ソウル大学美術館)などからの貸与依頼に対し,積極的に貸出しを行った。

② 映画フィルム等の貸与

種別	貸出		特別映写観覧		複製利用	
	件数	点数	件数	点数	件数	点数
映画フィルム	100	272	83	288	37	426

種別	貸出		特別観覧	
	件数	点数	件数	点数
映画関連資料	4	39	20	943

映画フィルムの貸与については、海外と国内への貸与、或いは共同主催事業における提供と通常の貸与とに分けられる。海外への貸与のうち、共同主催事業では、チネテカ・デル・コムーネ・ディ・ボローニャ(FIAF 加盟機関)との共催による第 26 回チネマ・リトロバート映画祭・特集企画「日本が声を上げる！ 陽が昇る地から来た最初のトーキー映画」において、日本における最初期のトーキー映画 13 本の映画フィルムを提供した。平成 23 年度、3 会場で共催した「『日活百年』海外巡回上映会」について、平成 24 年度はオーストラリア国立映画音響アーカイブ(FIAF 加盟機関)をはじめとして 8 カ国 10 会場で開催された上映会に対し、計 38 本の映画フィルムを貸与した。日本の初期アニメーション映画については、FIAF 北京会議を主催した中国電影資料館(FIAF 加盟機関)をはじめとして 3 カ国 5 会場で開催された上映会に対し、計 26 本の映画フィルムを貸与した。イギリス・エジンバラ国際映画祭をスタートに、シネマテーク・フランセーズ(FIAF 加盟機関)等フランス 2 会場を巡回した相米慎二監督回顧展には、計 14 本の映画フィルムを貸与した。また、平成 24 年度はエストニア、クロアチア、ベルギーなど、これまで貸与実績の少なかった国々に映画フィルムの貸与を行い、世界における日本映画のより広範な普及に寄与することができた。

国内への貸与のうち、共同主催事業では、平成 23 年度に引き続き京都国立近代美術館との間で開催した「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films@home」において、『雪崩』(1937 年)等日本映画 15 本と『朝から夜中まで』(1921 年)等外国映画 5 本を、国立国際美術館との間で開催した「第 5 回中之島映像劇場」においては、『地下鉄の出来るまで』(1938 年)等日本映画 6 本を提供し、関西における所蔵フィルムの上映拠点として、さらに堅固な地盤を築くことができた。また、平成 23 年度に引き続きコミュニティシネマセンターとの間で開催した「喜劇映画の異端児—渋谷実監督特集」巡回上映事業では、福岡市総合図書館(FIAF 加盟機関)及び神戸アートビレッジセンターに、同監督による日本劇映画 4 本を提供した。通常の貸与では、国立民族学博物館が主催する上映会に対しインド映画 4 本、ポーランド広報文化センターが主催するポ

ーランド映画祭に対しポーランド映画 3 本, NPO 法人那須フィルムコミッションが主催する那須ショートフィルムフェスティバルに対しフランス映画 6 本を貸与するなど, 新規の貸与先への協力が特筆される。また, 例年に引き続き, 福岡市総合図書館 (FIAF 加盟機関), 映画保存協会, 映画美学校, コミュニティシネマ大阪, 山口市文化振興財団等が主催する上映会や, 京都映画祭, カナザワ映画祭等の映画祭, 並びに神保町シアター, 新文芸坐, ラピュタ阿佐ヶ谷等の名画座における特集上映に対しては, 番組において欠くことのできない作品について, 所蔵プリントの貸与を行った。

特別映写観覧については, 大学等教育研究機関, 映画関連団体, 映画及びテレビ番組製作会社, 映画・映像に係る非営利法人等における調査, 研究, 研修等に, 所蔵プリントの試写を通して寄与した。

複製利用については, 著作権者による運用, 美術館等の収集作品や展示作品の充実, 映像作品や番組における資料としての映像提供等に寄与したが, とりわけ平成 24 年度は, 松本俊夫監督より平成 23 年度受贈した原版フィルム 25 本, テレビ朝日映像より 1980 年に受贈した『東映ニュース』の原版フィルム 300 本, 東京藝術大学より戦前の東京を記録した文化・記録映画 16 本等, 大量の複製利用申請を受けたことが特筆される。

映画関連資料の貸与としては, 4 つの公立文化機関に貸出しを行った。とりわけ鎌倉市川喜多映画記念館に, 女優高峰秀子の出演作ポスター 32 点を提供したことが特筆される。また, 出版社, 大学等教育研究機関, 新聞社, 映画配給会社等における事業や研究のため, 所蔵資料の特別観覧 (画像使用及び撮影等) を行った。

【作品の貸与 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
貸出件数	216	208	212	197	189	174	180
貸出点数	1,310	984	1,499	1,825	1,318	1,577	1,305
特別観覧件数	318	316	407	384	320	397	418
特別観覧点数	717	922	1,076	1,145	772	829	1,082

【映画フィルム等の貸与 (東京国立近代美術館フィルムセンター)】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
貸出件数	58	64	88	82	71	80	100
貸出本数	189	276	314	242	181	168	272

特別映写観覧件数	78	110	104	129	93	92	83
特別映写観覧本数	193	262	296	397	351	267	288
複製利用件数	41	31	50	39	38	39	37
複製利用本数	148	64	94	96	74	62	426

【映画関連資料の貸与(東京国立近代美術館フィルムセンター)】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
貸出件数	7	3	10	5	0	7	4
貸出点数	44	21	57	68	0	209	39
特別観覧件数	46	50	38	24	28	45	20
特別観覧点数	369	188	159	93	167	787	943

【(小項目)1-3-2】	ナショナルセンターとしての人材育成						【評定】			
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(5)-1 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして、全国の小・中学校等や公私立美術館における教育普及活動の充実に資するプログラムの開発・実施を行うとともに、前中期目標期間に作成した教材の普及に取り組む。</p> <p>(5)-2 全国の小・中学校等における鑑賞教育や、全国の美術館における教育普及活動の活性化を図るため、指導にあたる人材の育成を目指した全国レベルの教員、学芸員等の研修を実施する。</p> <p>(6) 大学院生等を対象としたインターンシップ等の事業を進め、今後の美術館活動を担う中核的人材を育成する。</p> <p>(7) 全国の美術館等の運営に対する援助、助言を適時行うとともに、企画展の共同主催やそれに伴う共同研究及びその他の研修制度を通じて、関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に取り組む。なお、学芸担当職員を対象とした研修制度については、当該館のニーズや実態等を十分に踏まえるとともに、これまでの実施方法等を含め、平成23年度中に見直しのための幅広い検討を行い、その結果に基づき、平成24年度から実施する。</p>							B			
							H23	H25	H26	H27
							B			
							実績報告書等 参照箇所			
							<p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P68～71</p> <p>(5) 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとしての活動</p> <p>① 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施</p> <p>② 先駆的・実験的な教材やプログラムの開発</p> <p>(6) 美術館活動を担う中核的人材の育成</p> <p>(7) 全国の美術館等との連携・人的ネットワークの構築</p> <p>① 企画展・上映会等の共同主催と共同研究</p> <p>② キュレーター研修</p>			
【インプット指標】										
(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24				
決算額(百万円)	42	46	48	59	62	68				
従事人員数(人)	65	61	62	60	60	57				
<p>1) 決算額はセグメント情報 本部 教育普及事業費を計上している。(5)-1 は本部の教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、本部の教育普及事業費全額を計上している。その他の事業については各館の教育普及事業費の一部であり、個別に計上できないため、本項目では計上していない。)</p> <p>2) 従事人員数は、すべての研究職員数及び研修担当事務職員数を計上している。その際、役員及び研修担当を除く事務職員は勘案していない。</p>										

評価基準	実績	分析・評価
<p>○ 全国の小・中学校等や公私立美術館における教育普及活動の充実に資するため、先導的・先駆的な教材やプログラムの開発・実施を行うとともに、前中期目標期間に作成した教材の普及に取り組んだか。</p> <p>○ 全国の小・中学校等における鑑賞教育や、全国の美術館における教育普及活動の活性化を図るため、指導にあたる人材の育成を目指した全国レベルの教員、学芸員等の研修を実施したか。</p>	<p><b>○ 先駆的・実験的な教材やプログラムの開発</b></p> <p>ア 国立美術館全体としての取組 鑑賞教材「国立美術館アートカード」を各館から学校へ貸出しを行ったほか、教員の研修などの機会をとらえて積極的に紹介した。</p> <p>イ 東京国立近代美術館 工芸館では、所蔵作品展「植物図鑑」開催に際してセルフガイドを対象年齢に応じて2種作成した。小学生以下を対象とする「こども工芸館 植物図鑑」では文字の大きさを小学校低学年以下と中学年以上の区分を示唆し、各学年に応じた難度で内容を構成した。中学生以上を対象とする「おとな工芸館 植物図鑑」ではより専門的な素材技法及び歴史的背景について情報提供に努めた。</p> <p>ウ 国立西洋美術館 ファン・ウィズ・コレクション『彫刻の魅力を探る』に関連して、原型となる塑像からそれを異なる素材(石膏, テラコッタ, ブロンズ, 大理石)に置き換えるための材料, その完成像及び制作過程の記録ビデオをセットにした資料教材を制作した。また、「手の痕跡」展会場においてこれらの資料教材の展示・上映を行った。</p> <p><b>○ 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施</b></p> <p>7年目となる平成24年度「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」は、より多くの方々と研修成果を共有するため、従来冊子として発行してきた研修記録を、ウェブサイトで公開した。</p> <p>また、本研修において平成24年度「教員免許状更新講習」を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加人数:100名(小中学校教諭61名, 指導主事8名, 学芸員31名)</li> <li>・会 期:平成24年7月30日, 31日(2日間)</li> <li>・会 場:国立西洋美術館(7月30日), 東京国立近代美術館(7月31日)</li> <li>・教員免許状更新講習:受講者13名(全員に履修証明書を授与)</li> </ul> <p>東京国立近代美術館及び国立西洋美術館では、東京都図画工作研究会, 東京都現代美術館との共催で教員研修を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成24年6月29日 鑑賞授業(於:工芸館)</li> <li>・平成24年7月12日 公開授業・研究協議会(於:世田谷区立花見堂小学校)</li> </ul> <p>ここ数年は、学習指導要領及び学校の授業とつながる美術館利用についての試験的な研修を実施しているが、平成24年度は東京国立近代美術館工芸館において、花見堂小学校の児童を対象にタッチ&amp;トークによる鑑賞授業を行い、後日、同小学校で鑑賞とリンクした公開授業と研究協議会を実施した。</p> <p>京都国立近代美術館では、京都市教育委員会及び図画工作教育研究会と共催で、図画</p>	<p>鑑賞教材「アートカード」を各館から学校へ貸し出したほか、東京国立近代美術館工芸館では、所蔵作品展の開催にあわせ、セルフガイドを対象年齢に応じて2種類作成するなど、教材開発と普及に取り組んでいることは、評価できるが、今後は、ナショナルセンターとしての人材育成の戦略については、より根本的に検討する必要がある。</p> <p>研修成果を共有するための研修記録のウェブサイトの公開は評価できる。また、学校における鑑賞教育の充実は、総合的学習とともに必須であり、指導者研修は、成果も上げており、今後も継続すべきである。</p>

<p>・ 修了後の活動状況等、業務の成果・効果が出ているか。</p> <p>・ 業務の効率化について、教材作成作業等の効率化、研修施設の有効活用、施設管理業務の民間委託等の取組を行っているか。</p> <p>・ 受益者負担の妥当性・合理性があるか。</p>	<p>工作科指導講座「京都国立近代美術館との連携による鑑賞教育の充実に向けて」を開催し（平成 24 年 8 月 3 日）、京都市内の小学校教員及び総合支援学校教員 70 名が参加した。また、「高橋由一」展及び「山口華楊展」の会期中にも、小学生から大人までを対象としたワークショップを計 5 回開催した。</p> <p><b>【業務の成果・効果】</b> 平成 24 年度「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」に参加した指導者に対しアンケートを実施し、その評価等の測定を行った。その結果、当該研修の総合評価として「満足計」（「非常に満足」・「満足」の合計）は 97.0%、「不満計」（「やや不満」・「不満」の合計）は 0.0%であった。研修への参加によって能力（知識・スキル）が向上したかについては、「思う計」（「大いに思う」・「そう思う」の合計）は 89.9%、「思わない計」（「そう思わない」・「全く思わない」の合計）は 1.0%であった。研修内容は職場で活用できるかについては、「思う計」（「大いに思う」・「そう思う」の合計）は 91.9%、「思わない計」（「そう思わない」・「全く思わない」の合計）は 1.0%、研修内容を地域の学校や美術館に広く還元できるかについては、「思う計」（「大いに思う」・「そう思う」の合計）は 82.8%、「思わない計」（「そう思わない」・「全く思わない」の合計）は 1.0%であった。</p> <p><b>【業務の効率化についての取組状況】</b> 国立美術館が実施している「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」は、座学や講義形式ではなく、体験型プログラムを中心に構成しているため、毎年度継続的に使用する受講者向けの教材等を作成していない。また、厳重な温湿度管理、作品管理が必要とされる展示室内でのプログラムも組み込んでいることから、外部への業務委託は行っていない。そのため、外部委託による効率化は図ることができていないが、実施に当たっては常に業務効率化の観点を意識し、計画・実施している。</p> <p><b>【受益者負担の妥当性・合理性】</b> 国立美術館では有料の人材育成業務を行っていない。国立美術館が実施する人材育成業務は、国立美術館のナショナルセンターとしての役割を踏まえ、研修の成果が全国へ普及するような対象者を各地域の中核的な指導者として育成することに重点を置いている。したがって、研修受講生本人のスキルアップを主目的とし、その費用を受益者負担とする人材育成業務とは異なり、費用を公費負担としているものである。</p>	<p>アンケート結果も評価が高く、今後もナショナルセンターの責務として継続すべきである。</p> <p>業務の効率化については、適切であると認められる。</p> <p>受益者負担については、今後検証が必要である。</p>
--	--	--



○ 大学院生等を対象としたインターンシップ等の事業を進め、今後の美術館活動を担う中核的人材を育成したか。

**○ 美術館活動を担う中核的人材の育成**

館名	インターンシップ受入数	博物館実習受入数
東京国立近代美術館	本館	6
	工芸館	4
	フィルムセンター	2
京都国立近代美術館	3	—
国立西洋美術館	15	—
国立国際美術館	6	—
国立新美術館	8	—
計	44	15

今後の美術館活動を担う大学院生等を対象としたインターンシップ、博物館実習受入れは実施され、目標が達成された点は評価できるが、参加者数増加に向けたより一層の努力が望まれる。

**【インターンシップ・博物館実習受入数 過去の実績】**

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
インターンシップ受入数	47	41	38	31	29	35	44
博物館実習受入数	27	19	17	15	17	17	15

○ 全国の美術館等の運営に対する援助、助言を適時行うとともに、企画展の共同主催やそれに伴う共同研究及びその他の研修制度を通じて、関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に取り組んだか。

**○ 全国の美術館等との連携・人的ネットワークの構築**

**① 企画展・上映会等の共同主催と共同研究**

館名	共同主催件数	共同研究件数
東京国立近代美術館 (本館・工芸館)	0	3
東京国立近代美術館 (フィルムセンター)	7	8
京都国立近代美術館	8	5
国立西洋美術館	1	2
国立国際美術館	2	2
国立新美術館	6	7
計	24	27

企画展・上映会等の共同主催と共同研究については優れた水準で実施されており、他館との連携・協力は今後とも期待される。

【企画展・上映会等の共同主催と共同研究 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
共同主催件数	26	31	31	18	27	21	24
共同研究件数	52	55	34	17	29	26	27

特記事項(共同研究によって特に得られた成果等)

(ア)東京国立近代美術館

(本館)

「フランス・ベーコン展」を開催するに当たり、豊田市美術館と共同研究を行った。

(工芸館)

「越境する日本人－工芸家が夢みたアジア 1910s-1945」では、埼玉大学、津田塾大学及びロンドン芸術大学、「寿ぎの『うつわ』」展では、日本工芸会漆芸部会との共同研究を行い、展覧会を開催した。

(フィルムセンター)

・「EU フィルムデーズ 2012」: 駐日欧州連合代表部及び EU 加盟国各大使館・文化機関と協議し、近年の EU 加盟各国の映画動向や作品の評価を踏まえながら作品選定を行った。

・「ロードショーとスクリーン ブームを呼んだ外国映画」: 一般社団法人外国映画輸入配給協会と協議し、上映作品の選定を行った。

・「第 34 回 PFF ぴあフィルムフェスティバル」: PFF パートナーズ及び公益財団法人ユニジャパンと協議し、招待作品部門の作品選定を行った。

・「NFC 所蔵作品選集 MoMAK Films@home」: 京都国立近代美術館と協議しながら作品の選定、提供を行った。

・「第 5 回中之島映像劇場」: 国立国際美術館と協議しながら作品の選定、提供を行った。

・展覧会「ロードショーとスクリーン 外国映画ブームの時代」: 一般社団法人外国映画輸入配給協会と共同で開催した。

・展覧会「日本の映画ポスター芸術」(会場 京都国立近代美術館): 京都国立近代美術館と共同で開催した。

・映画美術資料を調査及び整理するとともに、その画像をデジタル化し、若手美術監督等の育成及び映画美術の研究に活用することを目的とする「日本映画美術遺産プロジェクト」を協同組合日本映画・テレビ美術監督協会と共同で進めた。

(イ)京都国立近代美術館

東京国立近代美術館フィルムセンターと共催で「日本の映画ポスター芸術」展を開催(2012年10月31日から12月24日まで)したほか、同館と共催の映画会「MoMAK

○学芸担当職員を対象とした研修制度について、当該館のニーズ・実態等を十分踏まえ、これまでの実施方法等を含め見直しのための検討を行ったか。また、結果に基づき行ったか。

Films@home」を、5回(計10日)開催した。

(ウ)国立西洋美術館

「ベルリン国立美術館展 学べるヨーロッパ美術の400年」については、ベルリン国立美術館及び九州国立博物館と共同研究を行った。「ラファエロ」展についてはフィレンツェ文化財・美術館監督局との共同研究及び共同主催により、展覧会及び講演会を開催した。

(エ)国立国際美術館

「エル・グレコ展」では、東京都美術館と、「<私>の解体へ: 柏原えつとむの場合」では、東京都現代美術館及び千葉市美術館と情報交換を行った。

(オ)国立新美術館

「セザンヌ—パリとプロヴァンス」展では、パリ市立プティ・パレ美術館と共同研究を行った。「大エルミタージュ展 世紀の顔・西欧絵画の400年」展では、エルミタージュ美術館、京都市美術館及び名古屋市美術館と、「リヒテンシュタイン 華麗なる侯爵家の秘宝」展では、高知県美術館及び京都市美術館と、それぞれ共同研究及び共同主催を行った。「カリフォルニア・デザイン 1930-1965—モダン・リヴィングの起源—」展では、ロサンゼルス・カウンティ美術館と共同研究及び共同主催を行った。

○キュレーター研修

館名	受入人数
東京国立近代美術館(本館・工芸館)	2
京都国立近代美術館	1
国立西洋美術館	1
国立国際美術館	0
国立新美術館	1
計	5

【キュレーター研修 過去の実績】

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
受入人数	4	5	2	5	2	5	5

平成23年度7月から9月までの間に各都道府県教育委員会及び美術館等約400件に対してキュレーター研修に関するアンケート調査(回答約50%)を実施した。その結果、派遣元の「人員(研究員)不足」「旅費等の予算不足」、また、「公募時期」や「受入館の情報不足」等が当該研修への参加を困難にしている主な要因であることが判明した。

アンケート調査の結果に基づき課題事項について検討を行っているが、アンケート結果を踏まえた、再検討が急務である。

	<p>アンケート調査の結果を踏まえ、当該研修への参加者を増員すべく、参加環境を整備するために、国立美術館として対応が可能な「受入館の情報提供」「公募時期の適正化」等について検討を行った。</p>	
--	---	--

【(小項目)1-3-3】	フィルムセンターの取組状況						【評定】			
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(8)-1 フィルムセンターは我が国の映画文化振興の中核的機関として、国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員として、引き続き国際的な事業等に取り組み、「所蔵映画フィルム検索システム」を拡充する等、各種情報の収集・発信を行う。さらに、映画団体が行う映画資料の保存に関するプロジェクトや大学等が行う映画フィルム調査等の各種取組について連携・調整の役割を積極的に果たすため、当該団体等との連絡会議を年に3回程度主宰する。</p> <p>(8)-2 フィルムセンターが、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、東京国立近代美術館の映画部門から、各館とならぶ独立した一館となることを引き続き検討する。</p>							<b>A</b>			
							H23	H25	H26	H27
							A			
							実績報告書等 参照箇所			
							<p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P71~72</p> <p>(8)我が国の映画文化振興の中核的機関としてのフィルムセンターの活動</p> <p>①国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員としての活動</p> <p>②日本映画情報システムの運営</p> <p>③所蔵映画フィルム検索システムの拡充</p> <p>④映画関係団体等との連携</p> <p>⑤フィルムセンターの東京国立近代美術館からの独立の検討</p>			
【インプット指標】										
(中期目標期間)	H19	H20	H21	H22	H23	H24				
決算額(百万円)	1,384	1,365	1,306	1,490	1,370	1,441				
従事人員数(人)	11	11	11	10	11	9				
<p>1) 決算額はセグメント情報 東京国立近代美術館 経常費用を計上している。(本項目は、フィルムセンターの経費を個別に計上できないため、東京国立近代美術館の経費全額を計上している。)</p> <p>2) 従事人員数は、フィルムセンターの職員数を計上している。その際、役員は勘案していない。</p>										
評価基準	実績					分析・評価				
<p>○ 引き続き国際的な事業等に取り組み、「所蔵映画フィルム検索システム」を拡充する等、各種情報の収集・発信を行ったか。さらに、映画団体が行う映画資料の保存に関するプロジェクトや大学等が行う映画フィルム調査等の各種取組について連携・調整</p>	<p>① 国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員としての活動</p> <p>フィルムセンター主幹が、FIAF 運営委員(副会長)として、2度の運営委員会(北京とブリュッセルで開催)に出席した。平成24年4月23日から28日まで中国電影資料館(北京)で開催された第68回FIAF会議では、そのシンポジウム「世界のアニメーション」において、フィルムセンター主幹が基調講演、フィルムセンター主任研究員2名がそれぞれ個別のプレゼンテーションを行った。</p>					<p>フィルムセンター主幹が国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の副会長を務めるとともに、センター自身も正会員として中心的な活動をしており評価できる。</p> <p>フィルムの収集・保存・修復、上映会や展覧会の企画・実施、教育・研究活動の展開、国内外諸機</p>				

の役割を積極的に果たすため、当該団体等との連絡会議を年に3回程度主宰したか。

## ② 日本映画情報システムの運営

文化庁が実施する「日本映画情報システム」については、文化庁主導で民間へ委託することで運営管理を行っている。当館としては平成24年度も当館公開データベースへの接続に関する協力を行っている。平成24年度は3,073件が登録され、平成25年3月末時点で登録されている件数は45,407件となった。これにより旧作の遡及登録はほぼ終了した。

## ③ 所蔵映画フィルム検索システムの拡充

NFCD(フィルムセンターデータベース)においては、所蔵フィルムを平成24年度中に1,770件を登録し67,287件となった。そのうち公開データベース「所蔵映画フィルム検索システム」については、日本劇映画のレコード88件を新たに公開し、公開件数は6,116件となった。

## ④ 映画関係団体等との連携

・国内団体との連携は、デジタル復元事業を通じて、復元フィルムの元素材を所有する映像文化製作者連盟への協力、共催上映事業を通じて、コミュニティシネマセンターへの協力を行った。映画フィルムの貸与を通じては、福岡市総合図書館(FIAF加盟機関)、広島市未来都市創造財団、山口市文化振興財団、川崎市文化振興財団、能美市立博物館、映画美学校、映像産業振興機構、映画保存協会、田中絹代メモリアル協会等への協力を行った。特別映写観覧を通じては、日本映画撮影監督協会、早稲田大学演劇博物館、京都大学、東京藝術大学、筑波大学、新潟大学、早稲田大学、明治学院大学、桜美林大学、成城大学、専修大学、日本映画映像文化振興センター等への協力を行った。また、複製利用を通じて、神奈川県立美術館、久万美術館、坂の上の雲ミュージアム、山梨県立博物館等への協力を行った。

・海外団体との連携は、チネテカ・デル・コムーネ・ディ・ボローニャ(FIAF加盟機関)との共催事業において、番組編成、カタログへの執筆、プリント提供、フィルムセンター研究員による実施会場での解説等を通じて、協力を行った。映画フィルムの貸与を通じては、中国電影資料館、韓国映像資料院、オーストラリア国立映画音響アーカイブ、英国映画協会、シネマテーク・ド・グルノーブル(フランス)、パシフィック・フィルム・アーカイブ(アメリカ)、ノルウェー映画協会、シネマテーク・ケベコワーズ(カナダ)、ニューヨーク近代美術館、エストニア・フィルム・アーカイブ、シネテカ・ナショナル(メキシコ)、シネマテーク・フランセーズ、ガリシア映像芸術センター(スペイン)、ベルギー王立シネマテーク(以上FIAF加盟機関)、エジンバラ国際映画祭(イギリス)、サンパウロ国際映画祭(ブラジル)、ナント三大陸映画祭(フランス)、フィルム・ミュージーションズ(クロアチア)、バード大学(アメリカ)等への協力を行った。また、特別映写観覧を通じてイエール大学、テンプル大学(以上ア

関との積極的な連携など、ナショナルセンターとして高く評価される。

また、日本映画情報システム、所蔵映画フィルム検索システムの拡充を図り、情報収集・発信に努めており、映画関係団体や大学等との連携強化にも積極的に取り組んだ。

<p>○ フィルムセンターが、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、東京国立近代美術館の映画部門から、各館とならぶ独立した一館となることを引き続き検討したか。</p>	<p>メリカ)等、複製利用を通じて、ミュンヘン映画博物館(FIAF 加盟機関)、上海音像資料館(中国)、ジョルジュ・ポンビドゥ芸術文化センター・メス(フランス)、ニューミュージアム(アメリカ)等への協力を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・マックス・ランデー国際シンポジウム(スイス)、釜山シネマフォーラム、高麗大学韓国史センター(以上韓国)、「映画の復元と保存に関するワークショップ」、明治学院大学、東西研、カナザワ映画祭、横浜キネマ倶楽部等が主催するシンポジウム、講演会等にフィルムセンター研究員が参加し、研究成果の発表やディスカッションを通じて協力した。</li> <li>・一般社団法人外国映画輸入配給協会と共同で上映会「ロードショーとスクリーンブームを呼んだ外国映画」及び展覧会「ロードショーとスクリーン 外国映画ブームの時代」を開催した。</li> <li>・日本映画・テレビ美術監督協会と連携して「日本映画美術遺産プロジェクト」を行い、映画美術資料のデジタル化と保存を進めた。</li> </ul> <p>○ <b>フィルムセンターの東京国立近代美術館からの独立の検討</b></p> <p>独立の可能性を探る内部打合せを、平成 24 年 4 月 12 日、13 日、22 日、26 日及び 5 月 8 日に実施した。</p>	<p>東京国立近代美術館フィルムセンターの独立に関しては、引き続き検討されているが、国内唯一のフィルムアーカイブとして国内のみならず国際的にも注目、期待されているナショナルセンターであることから、今後は、フィルムセンターの独立に向けた本格的な検討が期待される。</p>
--	---	--

<b>【(大項目)2】</b>	Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	<b>【評定】</b>			
		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			

<b>【(小項目)2-1】</b>	業務の効率化の状況	<b>【評定】</b>			
		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			
		<b>実績報告書等 参照箇所</b>			
<p><b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b>          収蔵品の安全性の確保、快適な観覧環境の提供、入館者サービスの充実及びその他業務の質の向上を考慮しつつ、業務運営全般について、次の取組を行い、事務及び事業の改善を図る。</p> <p>1 一般管理費等の削減          運営費交付金を充当して行う事業については、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の効率化を図る。ただし、美術作品購入費、美術作品修復費、土地借料等の特殊要因経費はその対象としない。また、人件費については次項に基づき取り組むこととし、本項の対象としない。          具体的には下記の措置を講ずる。</p> <p>(ア)情報通信技術を活用した業務の効率化          (イ)使用資源の削減            ・省エネルギー（エネルギー使用量を5年計画中に5%削減）            ・廃棄物減量化            ・リサイクルの推進</p> <p>3 契約の点検・見直し          (1)業務運営の効率化を図るため、美術作品の購入など随意契約が真にやむを得ないものを除き、契約については引き続き競争性のあるものへ移行する。また、契約が一般競争入札等による場合であっても、真に競争性が確保されているか等の観点から点検し、見直しを行う。          (2)施設の管理・運営(展示事業の企画等を除く。)については、東京国立近代美術館本館及び工芸館、東京国立近代美術館フィルムセンター及び国立新美術館で民間競争入札を実施している。          (3)施設内店舗の賃貸については、現契約終了の同意を得たうえで、快適な観覧環境の提供及び入館者サービスの充実に留意し、より一層の鑑賞環境の向上と効率化のため、企画競争の導入を含めたより良い方途の検討を行い、順次措置する。</p> <p>4 保有資産の有効利用          保有する美術館施設等の資産については、利用実態を把握し、保有の目的・必要性に鑑み、一層の有効利用に資するための方策を検討・実施する。</p>		<p>&lt;実績報告書&gt;          P73～78          Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置          1 業務の効率化のための取り組み          (1)各美術館の共通的な事務の一元化          (2)使用資源の削減          ①省エネルギー(5年計画中に5%の削減)          ②廃棄物減量化          ③リサイクルの推進          (4)民間委託の推進          ①一般管理部門を含めた組織・業務の見直しと民間委託の推進          ②広報・普及業務の民間委託の推進          (5)競争入札の推進</p>			



評価基準	実績	分析・評価																																																																												
<p>○ 収蔵品の安全性の確保、快適な観覧環境の提供、入館者へのサービスの充実及びその他業務の質の向上を考慮しつつ、業務運営全般について、次の取組を行い、事務及び事業の改善を図ったか。</p> <p>(一般管理費等の削減)</p> <p>○ 運営費交付金を充当して行う事業については、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の業務の効率化を図ったか。</p> <p>具体的には下記の措置を講じたか。</p> <p>(ア) 情報通信技術を活用した業務の効率化</p> <p>(イ) 使用資源の削減</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・省エネルギー(エネルギー使用量を5年計画中に5%削減)</li> <li>・廃棄物減量化</li> <li>・リサイクルの推進</li> </ul>	<p>(ア) 引き続き理事長の指示による事務局長のトップマネジメントの下、各館の事務組織が有機的に連携し、効果的・効率的な業務を遂行するとともに、各館で行っていた出版物のうち年報について法人本部において一元的に実施した。また、法人内で採用しているVPN(Virtual Private Network: 暗号化された通信網)を用いたグループウェア及びテレビ会議システム、特にテレビ会議システムについては、定期的な会議等に積極的に活用している。</p> <p>(イ) 使用資源の削減</p> <p>使用量、使用料金の削減割合(対前年度比)</p> <table border="1" data-bbox="483 453 1747 1027"> <thead> <tr> <th rowspan="2">館名</th> <th colspan="3">使用量</th> <th colspan="3">使用料金</th> </tr> <tr> <th>電気</th> <th>ガス</th> <th>合計</th> <th>電気</th> <th>ガス</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館本館</td> <td>93.9%</td> <td>88.2%</td> <td>91.6%</td> <td>114.3%</td> <td>96.4%</td> <td>107.3%</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館工芸館</td> <td>96.4%</td> <td>—</td> <td>96.4%</td> <td>131.0%</td> <td>—</td> <td>131.0%</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター</td> <td>89.6%</td> <td>—</td> <td>89.6%</td> <td>127.4%</td> <td>—</td> <td>127.4%</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館</td> <td>90.7%</td> <td>—</td> <td>90.7%</td> <td>97.5%</td> <td>—</td> <td>97.5%</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>104.4%</td> <td>40.6%</td> <td>81.5%</td> <td>110.6%</td> <td>53.2%</td> <td>93.3%</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>100.1%</td> <td>98.8%</td> <td>99.6%</td> <td>113.6%</td> <td>109.5%</td> <td>112.0%</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>108.3%</td> <td>—</td> <td>108.3%</td> <td>106.4%</td> <td>—</td> <td>106.4%</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>108.6%</td> <td>105.4%</td> <td>107.6%</td> <td>114.2%</td> <td>113.6%</td> <td>114.0%</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>102.6%</td> <td>97.6%</td> <td>101.2%</td> <td>112.4%</td> <td>107.3%</td> <td>110.9%</td> </tr> </tbody> </table> <p>※東京国立近代美術館工芸館・フィルムセンター・フィルムセンター相模原分館及び国立国際美術館は、ガス設備を設置していない。</p> <p>※使用量の合計は、電気は一般電気事業者からの昼間買電を9.97GJ/千kWh、夜間買電を9.28GJ/千kWh、特定規模電気事業者からの買電を9.76GJ/千kWh、都市ガスを45GJ/千kWhに換算し得た熱量に0.0258kl/GJを乗じて得た原油換算量を、各施設の延床面積で除した値(原単位)を基礎とする(エネルギーの使用の合理化に関する法律施行規則に基づく。)</p> <p>●省エネルギー(増減の理由等)</p> <p>国立美術館においては、業務の特殊性から、展示会場や美術作品収蔵庫において一定の温湿度維持等が必要とされ削減が難しいものの、引き続き、美術作品のない区画における設定温度の適格化(夏季28℃、冬季19℃)、夏季における服装の軽装化、不使用設備機器類のこまめな停止及び職員等の意識の啓発によりエネルギーの削減に努めた。</p>	館名	使用量			使用料金			電気	ガス	合計	電気	ガス	合計	東京国立近代美術館本館	93.9%	88.2%	91.6%	114.3%	96.4%	107.3%	東京国立近代美術館工芸館	96.4%	—	96.4%	131.0%	—	131.0%	東京国立近代美術館フィルムセンター	89.6%	—	89.6%	127.4%	—	127.4%	東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館	90.7%	—	90.7%	97.5%	—	97.5%	京都国立近代美術館	104.4%	40.6%	81.5%	110.6%	53.2%	93.3%	国立西洋美術館	100.1%	98.8%	99.6%	113.6%	109.5%	112.0%	国立国際美術館	108.3%	—	108.3%	106.4%	—	106.4%	国立新美術館	108.6%	105.4%	107.6%	114.2%	113.6%	114.0%	計	102.6%	97.6%	101.2%	112.4%	107.3%	110.9%	<p>情報通信技術を活用した業務の効率化をはじめ、民間委託の推進、契約の競争性・透明性の確保など、業務運営全般について業務の効率化の努力がみられる。</p> <p>グループウェア及びテレビ会議システムの利用により、情報の共有化、出張費等の削減、役職員の時間の有効利用など業務の効率化に努力している。</p> <p>省エネルギー化については、展示会場や収蔵庫を除く区画における設定温度の適格化や不使用設備機器類のこまめな停止、夏季における服装の軽装化など必要な努力を行い、省エネルギー対策がとられている点は評価できる。なお、電気・ガスの使用量及び使用料金の増加については、各館ごとに合理的な説明がなされている。</p> <p>また、廃棄物の減量化については、展示会の来館者数の増加、展示会に使用した部材の廃棄に伴う廃棄物排出量の一時的な増加があったものの、ペーパーレス化、古紙の分別回収による再資源化などを行って減量化に努力している。しかし、一時的な要因とはいえ、館によっては、廃棄物の排出量や廃棄料</p>
館名	使用量			使用料金																																																																										
	電気	ガス	合計	電気	ガス	合計																																																																								
東京国立近代美術館本館	93.9%	88.2%	91.6%	114.3%	96.4%	107.3%																																																																								
東京国立近代美術館工芸館	96.4%	—	96.4%	131.0%	—	131.0%																																																																								
東京国立近代美術館フィルムセンター	89.6%	—	89.6%	127.4%	—	127.4%																																																																								
東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館	90.7%	—	90.7%	97.5%	—	97.5%																																																																								
京都国立近代美術館	104.4%	40.6%	81.5%	110.6%	53.2%	93.3%																																																																								
国立西洋美術館	100.1%	98.8%	99.6%	113.6%	109.5%	112.0%																																																																								
国立国際美術館	108.3%	—	108.3%	106.4%	—	106.4%																																																																								
国立新美術館	108.6%	105.4%	107.6%	114.2%	113.6%	114.0%																																																																								
計	102.6%	97.6%	101.2%	112.4%	107.3%	110.9%																																																																								

また、エネルギーの使用の合理化に関する法律に基づき、エネルギー管理統括者の下で、省エネルギー計画策定等を行い、各館において可能な箇所から、施設設備の改修を行い、省エネルギー効果を高めた。特に、国立新美術館においては、引き続き、BEMS(Building and Energy Management System)により、詳細なエネルギーの使用量と室内環境の把握を行い、その情報を定例的に開催する省エネルギー推進会議へ報告し、省エネルギー対策に生かすなどの取り組みを行っている。

更に、平成 23 年度に引き続いて「今夏の電力需要対策について(24 文科施第 117 号)」及び「今冬の電力需給対策について(24 文科施第 355 号)」を踏まえた節電対策を施した。具体的内容は以下のとおり。

(1) 設備・機器等の使用抑制

① 空調に係る節電

- ・部分的な運用、時間的な運用など柔軟に対応
- ・設定温度夏季 28℃、冬季 19℃を徹底(展示室及び収蔵庫等を除く)
- ・節電にも役立つ服装の励行
- ・ブラインドを調節し、夏季は直射日光を遮光、冬季は暖気を確保
- ・空調機のフィルター清掃

② 照明に係る節電

- ・執務室の照明は、最低基準の照度を確保しつつ大幅削減
- ・廊下、ロビー、階段等は、安全確保を優先し極力消灯
- ・昼休みの消灯を徹底
- ・白熱電球の原則使用禁止(代替品のない場合を除く)

③ エレベータ、エスカレータ

- ・必要最小限度の運転、階段利用の促進

④ 衛生設備に係る節電

- ・給湯室、洗面台、電気温水器等の利用時間、設定温度の変更
- ・自動販売機の消灯、設定温度の変更
- ・暖房便座、温水洗浄の停止
- ・便所温風器(手乾かし器)の停止

⑤ OA機器等

- ・一定期間使用しない場合の電源の切断
- ・節電モードでの使用を徹底
- ・プリンタ、コピー機等の使用制限

⑥ その他

- ・ノー残業デーの推進
- ・冷蔵庫、電気ポット等、家電機器の使用制限
- ・冬季のハロゲンヒーター等の暖房機器の個人使用の禁止
- ・各テナントへの節電の協力要請

金は増加していることから、今後も法人全体として継続的な減量化の努力が必要である。

なお、廃棄物の排出量及び廃棄料金の増加については、各館ごとに合理的な説明がなされている。

エネルギー使用量については、法人全体で 1.2%増加、使用料金は 10.9%増加しているが、これは、供給会社の値上げが要因となっているが、引き続き法人全体として継続的な減量化の努力が必要である。

- ・サーバ室等個別空調機器の適切な温度設定
- (2) 夏季休暇等の確実な取得
  - 業務効率の維持等に留意しつつ、次の取組を推進
  - ・夏季休暇の完全取得、夏季における年次休暇の計画的長期取得
- (3) その他
  - ・超過勤務の一層の縮減
  - ・中長期の節電にも資する設備の設置等の検討及び着手
  - ・夏季及び冬期における全館一斉休業日の実施

京都国立近代美術館は、平成 23 年度末に空調機の熱源をガスから電気に更新したため、平成 24 年度における電気の使用量及び使用料金が増加し、ガスの使用量及び使用料金が減少している。

国立西洋美術館の電気使用量の増加は、夏季に開催した「ベルリン国立美術館展 学べるヨーロッパ美術の 400 年」の入館者数が目標入館者数 296,000 人に対し 399,312 人であったため、平成 23 年度以上に空調を稼働させたためである。

国立国際美術館の電気使用量の増加は、特殊な素材を用いた展覧会の開催に当たり、会期中全館で空調を 24 時間稼働させたためである。

国立新美術館の電気及びガスの使用量の増加は、企画展の延べ開催日数が、平成 23 年度の 350 日に対し平成 24 年度は 436 日と増加したためである。

なお、国立美術館全体ではエネルギー使用量は 1.2%増加し、使用料金は供給各社の値上げの影響により 10.9%の増加となっている。

排出量、廃棄料金の削減割合(対前年度比)

館名	排出量			廃棄料金	
	一般廃棄物	産業廃棄物	合計	一般廃棄物	産業廃棄物
東京国立近代美術館本館	101.3%	100.3%	100.9%	101.3%	100.3%
東京国立近代美術館工芸館	80.2%	78.4%	79.9%	80.2%	78.4%
東京国立近代美術館フィルムセンター	91.0%	127.9%	109.5%	58.0%	447.8%
京都国立近代美術館	103.4%	110.3%	106.5%	—	23.8%
国立西洋美術館	94.8%	92.0%	93.7%	82.5%	85.9%
国立国際美術館	80.7%	172.6%	111.9%	86.8%	100.5%
国立新美術館	97.5%	105.3%	99.2%	110.1%	176.2%
計	95.0%	104.6%	98.8%	98.2%	128.5%

※京都国立近代美術館は、一般廃棄物の処理を清掃業者に一括して委託しているため、廃棄料金が算出でき

ない。

※東京国立近代美術館フィルムセンターには、東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館を含む。

●廃棄物減量化(増減の理由)

国立美術館においては、開館日数や来館者数の増減による影響など、業務の性質上、廃棄物の計画的な削減が難しいものの、引き続き、事務・研究部門における電子メール、グループウェアの活用による通知文書の発信やサーバ保存文書の共同利用によるペーパーレス化、両面印刷の促進等による用紙の節減に努めるとともに、古紙の分別回収による再資源化を進めることにより、廃棄物の削減を図った。

東京国立近代美術館本館の一般廃棄物及び産業廃棄物の排出量の増加は、開館 60 周年記念事業として開催した「BEER MOMAT」における飲食提供に伴う廃棄物、「14 のタベ」の廃材及び「夏の家」搬入用資材の廃棄が生じたためである。

東京国立近代美術館フィルムセンターの産業廃棄物の増加は、保管していた蛍光管を廃棄したためであり、産業廃棄物の廃棄料金の増加は、民間競争入札により、会場管理、清掃及び廃棄物処理等を管理運営業務として包括的に契約したところ、契約総額では予定価格を下回っていたが、廃棄物の廃棄に係る単価は増加したためである。

京都国立近代美術館の一般廃棄物及び産業廃棄物の排出量の増加は、平成 24 年度に館内改修工事を行ったことに伴うものである。また、産業廃棄物の廃棄料金の減少は、廃棄に係る単価が廃棄物の容量に応じて決定されること、平成 23 年度は展示台等の大型の廃棄物があったことに対し、平成 24 年度は大型の廃棄物がなかったためである。

国立国際美術館の産業廃棄物の排出量の増加は、保管していた台座を廃棄したため及び特殊な素材を用いた展示会の開催に当たり、撤去時に一般廃棄物と産業廃棄物の分別が困難なことから、産業廃棄物と一般廃棄物の混合廃棄物として廃棄したためである。産業廃棄物の排出量に比し廃棄料金が安価となっているのは、混合廃棄物の一般廃棄物割合が大きかったためである。

国立新美術館の産業廃棄物の排出量の増加は、展示室の管球交換を実施したためである。また、一般廃棄物の排出量が減少し廃棄料金が増加したことは、単価の安い古紙等の排出量が減少し単価の高い紙類や食品廃棄物等が増加したためであり、産業廃棄物の廃棄料金の増加は単価の高い蛍光管の排出量が増加したためである。

●リサイクルの推進

前年度に引き続き、古紙含有率 100%のコピー用紙の利用、廃棄物の分別、OA機器等トナーカートリッジのリサイクルによる再生使用を行い、リサイクルの推進に努めた。

<p>【一般管理費の削減状況】</p> <p>○ 一般管理費の削減は順調に進められたか。</p> <p>【事業費の削減状況】</p> <p>○ 事業費の削減は順調に進められたか。</p> <p>○ 契約の点検・見直し</p> <p>(1) 業務運営の効率化を図るため、美術作品の購入など随意契約が真にやむを得ないものを除き、契約については引き続き競争性のあるものへ移行したか。また、契約が一般競争入札等による場合であっても、真に競争性が確保されているか等の観点から点検し、見直しを行ったか。</p> <p>(2) 施設の管理・運営(展示事業の企画等を除く。)については、既に東京国立近代美術館(本館及び工芸館)で実施している民間競争入札の検証結果等を踏まえ、当該館における対象範囲の拡大や他施設への導入に取り組んだか。</p>	<p>【一般管理費の削減状況】</p> <p style="text-align: right;">(単位:千円)</p> <table border="1" data-bbox="477 167 1740 252"> <thead> <tr> <th></th> <th>H22 年度実績</th> <th>H24 年度実績</th> <th>削減割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>一般管理費</td> <td>704,271</td> <td>700,101</td> <td>0.59%</td> </tr> </tbody> </table> <p>【事業費の削減状況】</p> <p style="text-align: right;">(単位:千円)</p> <table border="1" data-bbox="477 411 1740 496"> <thead> <tr> <th></th> <th>H22 年度実績</th> <th>H24 年度実績</th> <th>削減割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>業務経費</td> <td>3,201,573</td> <td>3,016,389</td> <td>5.78%</td> </tr> </tbody> </table> <p>※中期計画において、中期目標期間中、一般管理費については 15%以上、業務経費については 5%以上の効率化を図ることとしているため、前中期目標期間最終年度の平成 22 年度比としている。</p> <p>①一般管理部門を含めた組織・業務の見直しと民間委託の推進</p> <p>次のとおり民間委託を行い業務の効率化を図った。</p> <p>(ア)会場管理業務、(イ)設備管理業務、(ウ)清掃業務、(エ)保安警備業務、(オ)機械警備業務、(カ)収入金等集配業務、(キ)レストラン運営業務、(ク) アートライブラリ運営業務、(ケ)ミュージアムショップ運営業務、(コ)美術情報システム等運営支援業務、(サ)ホームページサーバ運用管理業務、(シ)電話交換業務、(ス)展覧会アンケート実施業務、(セ)省エネルギー対策支援業務、(ソ)展覧会情報収集業務</p> <p>「競争の導入による公共サービスの改革に関する法律」に則り民間競争入札を行った東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理運営業務(展示事業の企画等を除く。以下同じ。)並びに東京国立近代美術館フィルムセンターの管理運営業務は、契約事務の軽減、統括管理業務導入による事務と委託業務の効率化、民間事業者の相互連携の推進による適確な業務の実施とともに、それぞれの業務の専門的知識を活かした適確な提案による施設設備維持管理と観覧環境の向上に寄与した。</p> <p>この結果を踏まえ、国立新美術館の平成 25 年度以降の管理運営業務について、平成 24 年度に民間競争入札を実施した。</p> <p>②広報・普及業務の民間委託の推進</p> <p>次のとおり民間委託を行い業務の効率化を図った。</p> <p>(ア)情報案内業務、(イ)広報物等発送業務、(ウ)交通広告等掲載、(エ)ホームページ改訂・更新業務、(オ)インターネット検索サイト、(カ)ラジオCM等を利用した総合的な広報宣伝業務、(キ)講堂音響設備オペレーティング業務</p>		H22 年度実績	H24 年度実績	削減割合	一般管理費	704,271	700,101	0.59%		H22 年度実績	H24 年度実績	削減割合	業務経費	3,201,573	3,016,389	5.78%	<p>一般管理費について、前年度と比べて削減割合が悪化しているが、これは、光熱水道料金の値上げなどが要因となっている。引き続き継続的な削減の努力が必要である。</p> <p>事業費の削減は順調に進められている。</p>
	H22 年度実績	H24 年度実績	削減割合															
一般管理費	704,271	700,101	0.59%															
	H22 年度実績	H24 年度実績	削減割合															
業務経費	3,201,573	3,016,389	5.78%															

(3) 施設内店舗の賃貸については、現契約終了の同意を得たうえで、快適な観覧環境の提供及び入館者サービスの充実に留意し、より一層の鑑賞環境の向上と効率化のため、企画競争の導入を含めたより良い方途の検討を行い、順次措置したか。

【契約の競争性、透明性の確保】

○ 契約方式等、契約に係る規程類について、整備内容や運用は適切か。

③競争入札の推進

一般競争入札の実績

ア 契約件数及び契約金額(少額随契を除く) 198 件、11,483,507,821 円

イ 契約種別毎の年間契約数

① 競争性のある契約 100 件(50.5%)、3,153,694,147 円(27.5%)

【内訳】

- ・一般競争入札 79 件、2,471,218,152 円
- ・企画競争、公募 14 件、287,791,208 円
- ・不落随契 7 件、394,684,787 円

② 競争性のない随意契約 98 件(49.5%)、8,329,813,674 円(72.5%)

【内訳】

- ・同一所管公益法人等 3 件、5,590,614,497 円
  - うち土地の購入、賃借に係る随意契約 3 件、5,590,614,497 円
- ・同一所管公益法人等以外の法人等 95 件、2,739,199,177 円
  - うち美術作品の購入に係る随意契約 58 件、2,417,838,470 円
  - うち電気・水道・ガスの供給に係る随意契約 8 件、116,096,381 円
  - うち美術作品等の運送・保管に係る随意契約 11 件、44,299,987 円
  - うちその他の随意契約 18 件、160,964,339 円

【契約に係る規程類の整備及び運用状況】

以下の規程類等を整備し、適正に運用している。

○契約に係る規程類等

- ① 独立行政法人国立美術館会計規則
- ② 独立行政法人国立美術館会計規程の特例を定める規程
- ③ 独立行政法人国立美術館契約事務取扱細則
- ④ 独立行政法人国立美術館契約公表基準
- ⑤ 独立行政法人国立美術館食堂及び店舗貸付取扱要領
- ⑥ 独立行政法人国立美術館における「企画競争・公募」並びに「総合評価落札方式」の取扱いについて

○国の契約基準と異なる規程の有無

「独立行政法人等における契約の適正化について(通知)」(平成 20 年 12 月 3 日付け 20 文科会第 583 号)を受け、国と同様の契約基準としており、国と異なる規程はない。

契約に係る規程類の整備は適切と判断される。

<p>○ 契約事務手続に係る執行体制や審査体制について、整備・執行等は適切か。</p>	<p><b>【執行体制】</b>          契約事務手続における一連のプロセスは、次のとおり。          調達に当たっては、業務の実施担当部署（発注部署）と会計担当係（契約担当部署）とが仕様書案の作成や入札方法等のあり方を協議の上で行っている。</p> <p>&lt;一般競争入札の場合の例&gt;</p> <p>① 実施担当部署と会計担当係との協議、価格調査等          ↓          ② 仕様書等の作成・精査・調整          ↓          ③ 契約伺（入札）起案（会計担当係）・決裁（契約担当役又は分任契約担当役）          ↓          ④ 入札公告の公示（公告期間は 10 日以上）          ↓          ⑤ 必要に応じて、入札説明会や技術審査会を実施          ↓          ⑥ 入札の実施、開札、落札者決定          ↓          ⑦ 契約伺（締結）起案（会計担当係）・決裁（契約担当役又は分任契約担当役）          ↓          ⑧ 契約締結</p> <p><b>【審査体制】</b>          各館に分任契約担当役を設置し、契約手続等が会計規則等に則り適正に行われているかの審査を行い、契約を締結する体制をとっている。また、随意契約の場合は、当該契約を随意契約とすることが適正かを十分に精査した上で、契約を行うよう本部からの指導の徹底を行っている。</p> <p>各館での契約手続等が適正に行われているかについては、監事監査（平成 24 年度は臨時監査を含め 7 回実施）及び内部監査（平成 24 年度は 4 回実施）においても確認を行っている。</p> <p>なお、契約監視委員会（平成 24 年度は 1 回実施）において、監事及び外部有識者の意見を踏まえ、契約の点検見直しを行っている。</p> <p><b>【契約監視委員会の審議状況】</b>          ○実施状況          実施回数1回（平成 25 年 2 月 4 日）</p>	<p>契約事務手続に係る執行体制や審査体制は整備されている。また、監事監査及び内部監査においても確認を行なうとともに契約監視委員会による契約の点検見直しが行われており、特段の問題はない</p>
---	---	--

審議内容

- ・平成 23 年度契約監視委員会後の契約について
- ・平成 24 年契約点検結果について
- ・平成 25 年契約事前点検結果について

指摘事項

特になし

【随意契約等見直し計画】

- 「随意契約等見直し計画」の実施・進捗状況や目標達成に向けた具体的取組状況は適切か。

【随意契約等見直し計画の実績と具体的取組】

	①平成 20 年度実績		②見直し計画 (H22 年 4 月公表)		③平成 24 年度実績		②と③の比較増減 (見直し計画の進捗状況)	
	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)
競争性のある契約	82	2,430,355	101	2,639,329	100	3,153,694	△1	514,365
競争入札	81	2,426,890	98	2,623,745	79	2,471,218	△19	△152,527
企画競争、公募等	1	3,465	3	15,584	21	682,476	18	666,892
競争性のない随意契約	119	9,955,158	100	9,746,184	98	8,329,814	△2	△1,416,370
合計	201	12,385,513	201	12,385,513	198	11,483,508	△3	△902,005

【原因、改善方策】

競争性のない随意契約に関して、平成 24 年度実績が見直し計画に比し、件数及び金額ともに減少している。引き続き少額随契又は真にやむを得ない場合を除き競争性の確保に努めるものとする。

【再委託の有無と適切性】

なし

【個々の契約の競争性、透明性の確保】

- 再委託の必要性等について、契約の競争性、透明

法人の性質上、随意契約によらざるを得ない契約を除き、「随意契約等見直し計画」の実施・進捗状況等は適切と判断される。

また、随意契約にかかる契約情報は公開されている。

再委託はない。



性の確保の観点から適切か。

○ 一般競争入札等における一者応札・応募の状況はどうか。その原因について適切に検証されているか。また検証結果を踏まえた改善方針は妥当か。

【一者応札・応募の状況】

概要	①平成 20 年度実績		②平成 24 年度実績		①と②の比較増減	
	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)
競争性のある契約	82	2,430,355	100	3,153,694	18	723,339
うち、一者応札・応募 となった契約	29	1,404,497	37	2,150,361	8	745,864
一般競争契約	29	1,404,497	29	1,885,968	0	481,471
指名競争契約	0	0	0	0	0	0
企画競争	0	0	2	9,353	2	9,353
公募	0	0	6	255,040	6	255,040

【原因、改善方針】

一者応札・応募となった契約は、平成 20 年度に対し平成 24 年度は 8 件増加している。一般競争契約によるものは件数の増減はなく、企画競争 2 件及び公募 6 件が増加分である。引き続き、HPを活用した公告及び公告期間の 20 日以上確保など、平成 21 年度に定めた「一者応札・応募に係る改善方針について」の実施により、一者応札・応募の解消に努める。

「一者応札・応募に係る改善方針について」は以下のとおり。

- (1) 競争参加資格要件については、調達目的を確実に達成するための必要最小限度のものとするを徹底する。
- (2) 一者応札、一者応募となっている契約については、業務等の内容に応じ、早期執行に努めるとともに、契約（落札決定）後の準備期間を考慮した上で入札時期を設定するなど、履行期間及び準備期間の十分な確保を図る。
- (3) 現在、国の規則に準じて 10 日以上としている公告期間について、過去に一者応札・一者応募となった契約については、原則として 20 日以上公告期間を確保することとする。
- (4) 物品・役務の調達については、入札公告等の時点で調達内容が把握できるよう、原則として仕様書等についてもホームページから閲覧可能とし、競争参加手続の効率化に努めることとする。

【一般競争入札における制限的な応札条件の有無と適切性】

業務の特殊性に応じて、応札条件に制限を設けることがある。応札条件については契約監視委員会に諮り、特

一般競争入札等における一者応札・応募となった契約は増加しているが、一者応札・応募に係る改善方針は妥当と認められる。

<p><b>【関連法人】</b></p> <p>○ 法人の特定の業務を独占的に受託している関連法人について、当該法人と関連法人との関係が具体的に明らかにされているか。</p> <p>○ 当該関連法人との業務委託の妥当性についての評価が行われているか。</p> <p>○ 関連法人に対する出資、出えん、負担金等（以下「出資等」という。）について、法人の政策目的を踏まえた出資等の必要性の評価が行われているか。</p> <p><b>【実物資産】</b> （保有資産全般の見直し）</p> <p>○ 実物資産について、保有の必要性、資産規模の適切性、有効活用の可能性等の観点からの法人における見直し状況及び結果は適切か。</p>	<p>に問題ない旨の意見を得ている。</p> <p><b>【関連法人の有無】</b> なし</p> <p><b>【実物資産の保有状況】</b></p> <p>① 実物資産の名称と内容、規模</p> <p>有形固定資産 163,773 百万円 （内訳）</p> <p>建物 54,489 百万円 構築物 1,050 百万円</p> <table border="1" data-bbox="479 1094 1272 1469"> <thead> <tr> <th>建物名称</th> <th>延面積(㎡)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館</td> <td>17,192</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館工芸館</td> <td>1,867</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター</td> <td>6,912</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館</td> <td>9,437</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>9,762</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>17,369</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>13,487</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>49,710</td> </tr> </tbody> </table>	建物名称	延面積(㎡)	東京国立近代美術館	17,192	東京国立近代美術館工芸館	1,867	東京国立近代美術館フィルムセンター	6,912	東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館	9,437	京都国立近代美術館	9,762	国立西洋美術館	17,369	国立国際美術館	13,487	国立新美術館	49,710	<p>関連法人はない。</p> <p>実物資産の保有の必要性、資産規模の適切性、有効活用の可能性等については、減損もなく、特に指摘すべき点はない。また、資産除去債務については、財務諸表の注記事項において適切に開示されており、特に問題はない。</p>
建物名称	延面積(㎡)																			
東京国立近代美術館	17,192																			
東京国立近代美術館工芸館	1,867																			
東京国立近代美術館フィルムセンター	6,912																			
東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館	9,437																			
京都国立近代美術館	9,762																			
国立西洋美術館	17,369																			
国立国際美術館	13,487																			
国立新美術館	49,710																			

土地 45,382 百万円

敷地名称	面積 (㎡)
東京国立近代美術館フィルムセンター敷地	722
東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館敷地	14,997
京都国立近代美術館敷地	5,001
国立西洋美術館敷地	2,208
国立新美術館敷地	15,057

機械装置 299 百万円, 車両運搬具 3 百万円, 工具器具備品 506 百万円, 美術品・收藏品 62,030 百万円

無形固定資産 10 百万円

ソフトウェア 6 百万円, 電話加入権 3 百万円, 特許権仮勘定 1 百万円

・職員宿舎は保有していない。

② 保有の必要性(法人の任務・設置目的との整合性、任務を遂行する手段としての有用性・有効性等)

独立行政法人国立美術館は、東京国立近代美術館(本館・工芸館・フィルムセンター)、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館の五館で組織されているが、いずれの美術館も、国の文化政策の必要性から、その目的・名称・機能・施設・建設場所・運営形態等を国において検討し、国自らが建設し、独立行政法人国立美術館に現物出資されたものであり、その美術館が建設された意義、建設され場所等を最大限に尊重し、法人の目的を達成するためには、五館それぞれが設置された場所において設置目的に相応しい特色ある活動を展開することが必要不可欠である。

③ 有効活用の可能性等の多寡

遊休している建物及び土地等の固定資産はない。

④ 見直し状況及びその結果

整理合理化計画等において、個別に指摘された資産の見直しはない。また、監事監査において指摘された資産の見直しはない。

⑤ 処分又は有効活用等の取組状況／進捗状況

○ 見直しの結果、処分等又は有効活用を行うものとなった場合は、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。

見直しの対象となった保有資産はなく、処分等を行う必要はない。

<p>○ 「勧告の方向性」や「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」、「独立行政法人の職員宿舎の見直し計画」、「独立行政法人の職員宿舎の見直しに関する実施計画」等の政府方針を踏まえて、宿舎戸数、使用料の見直し、廃止等とされた実物資産について、法人の見直しが適時適切に実施されているか（取組状況や進捗状況等は適切か）。</p> <p>（資産の運用・管理）</p> <p>○ 実物資産について、利用状況が把握され、必要性等が検証されているか。</p> <p>○ 実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取組は適切か。</p>	<p>該当なし</p> <p>⑥ 政府方針等により、処分等することとされた実物資産についての処分等の取組状況／進捗状況 該当なし</p> <p>⑦基本方針において既に個別に講ずべきとされた施設等以外の建物、土地等の資産の利用実態の把握状況や利用実態を踏まえた保有の必要性等の検証状況 5 館とも年間を通して、展示会の開催、美術作品（映画フィルムを含む）の収集保管（国立新美術館を除く）、調査研究及び教育普及事業を実施しており、建物、土地等の保有が必要である。</p> <p>⑧見直し実施計画で廃止等の方針が明らかにされている宿舎以外の宿舎及び職員の福利厚生を目的とした施設について、法人の自主的な保有の見直し及び有効活用の取組状況 該当なし</p> <p>⑨ 実物資産の管理の効率化及び自己収入の向上に係る法人の取組 東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理・運營業務については、平成 21 年度より公共サービス改革法に基づく民間競争入札を導入している。他館への導入等については、平成 23 年度からの中期計画で「既に実施している東京国立近代美術館での検証結果等を踏まえ、当該館における対象範囲の拡大や他施設への導入に取り組む。」ことを明記した。</p> <p>（平成 24 年度に実施した業務の概要及び入札等の対象範囲）</p> <p>①東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理・運営・警備業務（対象範囲の拡大）</p> <p>②東京国立近代美術館フィルムセンターの管理・運營業務（新規）</p>	<p>「勧告の方向性」や「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等の政府方針において処分等することとされた実物資産はない。</p> <p>独立行政法人国立美術館の保有するすべての建物、土地等は有効に活用されており、保有の必要性があると認められる。</p> <p>実物資産の管理の効率化については、民間競争入札を実施している美術館での対象範囲の拡大及び他館での新規導入が行われており、適切に行われている。</p>
---	---	--

<p><b>【金融資産】</b>  (保有資産全般の見直し)</p> <p>○ 金融資産について、保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模は適切か。</p> <p>○ 資産の売却や国庫納付等を行うものとなった場合は、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。</p> <p>(資産の運用・管理)</p> <p>○ 資金の運用状況は適切か。</p> <p>○ 資金の運用体制の整備状況は適切か。</p> <p>○ 資金の性格、運用方針等の設定主体及び規定内容を踏まえて、法人の責任が</p>	<p>(平成 24 年度に平成 25 年度からの実施を決定した業務の概要及び入札等の対象範囲)  国立新美術館の管理・運営業務(新規)</p> <p><b>【金融資産の保有状況】</b></p> <p>① 金融資産の名称と内容、規模  現金及び預金(1,617 百万円)</p> <p>② 保有の必要性(事業目的を遂行する手段としての有用性・有効性)  平成 24 年度末における未払金(962 百万円)の支払い等</p> <p>③ 資産の売却や国庫納付等を行うものとなった金融資産の有無  利益剰余金は独立行政法人通則法第 44 条第 1 項による積立金として計上することとしており、中期目標期間終了後に、自己収入により取得した固定資産の価格相当額及びリース損益等影響額を除いた額を国庫に返納することとなっている。</p> <p>④ 金融資産の売却や国庫納付等の取組状況／進捗状況  中期目標期間終了後、文部科学大臣との協議の上、国庫納付額を決定し、速やかに国庫納付を行う。</p> <p><b>【資金運用の実績】</b>  当法人の金融資産は現金及び預金のみであり、国債や有価証券等の運用実績はない。</p> <p><b>【資金運用の基本的方針(具体的な投資行動の意志決定主体、運用に係る主務大臣・法人・運用委託先間の責任分担の考え方等)の有無とその内容】</b>  該当なし</p> <p><b>【資産構成及び運用実績を評価するための基準の有無とその内容】</b>  該当なし</p> <p><b>【資金の運用体制の整備状況】</b>  該当なし</p> <p><b>【資金の運用に関する法人の責任の分析状況】</b>  該当なし</p>	<p>金融資産の保有の必要性、事務・事業の目的及び内容に照らした資産規模については、特に指摘すべき点はない。</p> <p>資産の売却や国庫納付等を行う金融資産はない。</p> <p>資金は現金及び預金のみであり、資金の運用状況及び運用体制の整備状況について特段の問題はないと判断している。</p>
---	--	---

<p>十分に分析されているか。</p> <p>(債権の管理等)</p> <p>○ 貸付金、未収金等の債権について、回収計画が策定されているか。回収計画が策定されていない場合、その理由は妥当か。</p> <p>○ 回収計画の実施状況は適切か。i) 貸倒懸念債権・破産更生債権等の金額やその貸付金等残高に占める割合が増加している場合、ii) 計画と実績に差がある場合の要因分析が行われているか。</p> <p>○ 回収状況等を踏まえ回収計画の見直しの必要性等の検討が行われているか。</p> <p>【知的財産等】 (保有資産全般の見直し)</p> <p>○ 特許権等の知的財産について、法人における保有の必要性の検討状況は適</p>	<p>【貸付金・未収金等の債券と回収の実績】</p> <p>平成 25 年 3 月 31 日現在の債権は、未収入金 161 百万円、立替金 8 百万円となっている。</p> <p>なお、未収入金は当期に工事が完了した施設整備費補助金の未収入(149 百万円)が主な要因である。</p> <p>【回収計画の有無とその内容(無い場合は、その理由)】</p> <p>当法人は資金等の貸付を行っておらず、中期目標期間終了後に利益剰余金を国庫納付するため、回収計画及び運用方針は制定していない。</p> <p>【回収計画の実施状況】</p> <p>該当なし</p> <p>【貸付の審査及び回収率の向上に向けた取組】</p> <p>該当なし</p> <p>【貸倒懸念債権・破産更生債権等の金額／貸付金等残高に占める割合】</p> <p>該当なし</p> <p>【回収計画の見直しの必要性等の検討の有無とその内容】</p> <p>該当なし</p> <p>【知的財産の保有の有無及びその保有の必要性の検討状況】</p> <p>現在保有している特許権等の知的財産はない。</p> <p>なお、平成 24 年度末現在、特許権仮勘定(1 百万円)を計上しているが、これは国立西洋美術館において現在特許出願中である「展示用物品の免震台」に係る経費相当額である。本案件は平成 18 年度に出願を行い、これ</p>	<p>未収入金はその要因が明確であり、回収可能性に問題はない。また、貸付金はない。</p> <p>現在保有している知的財産はない。国立西洋美術館において特許出願中であるが、法人における保有の必要性を確認、検討の上行って</p>
--	---	---

<p>切か。</p> <p>○ 検討の結果、知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取組状況や進捗状況等は適切か。</p> <p>(資産の運用・管理)</p> <p>○ 特許権等の知的財産について、特許出願や知的財産活用に関する方針の策定状況や体制の整備状況は適切か。</p> <p>○ 実施許諾に至っていない知的財産の活用を推進するための取組は適切か。</p>	<p>まで特許庁と協議を行ってきたが、現状では特許取得の目処は立っていない。しかしながら、本装置を本法人で使用することはもとより、全国の博物館や美術館等で使用する際に他の者が特許を取得した場合、規制等を受けることが懸念されるため、出願を行っているものである。</p> <p>【知的財産の整理等を行うことになった場合には、その法人の取組状況／進捗状況】 該当なし</p> <p>【出願に関する方針の有無】 該当なし</p> <p>【出願の是非を審査する体制整備状況】 該当なし</p> <p>【活用に関する方針・目標の有無】 該当なし</p> <p>【知的財産の活用・管理のための組織体制の整備状況】 中期目標に定められた、当法人が実施する事業において、知的財産を出願する必要性が生じるものは想定されていない。今後、美術館活動の結果として特許取得が可能となるものが創出された場合は、その案件ごとに検討する。</p> <p>【実施許諾に至っていない知的財産について】 該当なし</p> <p>① 原因・理由 該当なし</p> <p>② 実施許諾の可能性 該当なし</p> <p>③ 維持経費等を踏まえた保有の必要性 該当なし</p>	<p>いるものと判断される。</p>
--	--	--------------------

	<p>④ 保有の見直しの検討・取組状況 該当なし</p> <p>⑤ 活用を推進するための取組 該当なし</p>	
--	---	--



【(小項目)2-2】 給与水準の適正化等		【評価】			
<p><b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b></p> <p>国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数の抑制を図り、各年度における対年齢・地域・学歴勘案の指数が引き続き100以下となるように取り組むとともに、対年齢勘案の指数についても100以下となるように努め、その結果について検証を行い、検証結果や取組状況を公表する。</p> <p>また、これまでの人件費改革の取組を平成23年度まで継続するとともに、平成24年度以降は、今後進められる独立行政法人制度の抜本的な見直しを踏まえ、取り組むこととする。ただし、人事院勧告を踏まえた給与改定分及び競争的資金により雇用される任期付職員に係る人件費については本人件費改革の削減対象より除く。</p> <p>なお、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額とし、退職手当、福利厚生費は含まない。</p>		<p><b>A</b></p>			
		H23	H25	H26	H27
		A			
		実績報告書等 参照箇所			
		<p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P79～80</p> <p>4 人件費の抑制、給与体系の見直し</p> <p>①人件費決算</p> <p>②給与体系の見直し</p>			
評価基準	実績	分析・評価			
<p>国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数の抑制を図り、各年度における対年齢・地域・学歴勘案の指数が引き続き100以下となるように取り組むとともに、対年齢勘案の指数についても100以下となるように努め、その結果について検証を行い、検証結果や取組状況を公表したか。</p> <p>また、これまでの人件費改革の取組を平成23年度まで継続するとともに、平成24年度以降は、今後進められる独立行政法人制度の抜本的な見直しを踏まえ、取り組むこととしたか。</p> <p><b>【給与水準】</b></p> <p>○ 給与水準の高い理由及び講ずる措置(法人の設定する目標水準を含む)が、国民に対して納得の得られるものとなっているか。</p> <p>○ 法人の給与水準自体が社会的な理解の得られる水準となっているか。</p>	<p><b>【ラスパイレス指数(平成24年度実績)】</b></p> <p><b>【事務】</b></p> <p>対国家公務員・・・101.0</p> <p><b>【研究】</b></p> <p>対国家公務員・・・95.9</p> <p>事務職員の給与水準については、年齢のみを勘案した対国家公務員指数は101.0と国家公務員を上回っているが、地域勘案の指数は91.5とな</p>	<p>給与水準は国家公務員に準じており、結果的に社会一般の情勢に適合する選択をしており、ラスパイレス指数に沿って見ても、適切な給与水準であると評価できる。</p> <p>法人ホームページにおいても取り組み状況が公表されており、適正に実施されていると評価できる。</p> <p>また、過年度から人件費の削減は順調に実施されており、引き続き、適正な水準の維持に努めていくべきである。</p> <p>ラスパイレス指数に関しては101.0となっているが、地域勘案指数は91.5であり、適切な水準である</p> <p>ラスパイレス指数を踏まえると、法人の給与水準は、社会的な理解の得られる水準となっていると考えられる。</p>			

<p>○ 国の財政支出割合の大きい法人及び累積欠損金のある法人について、国の財政支出規模や累積欠損の状況を踏まえた給与水準の適切性に関して検証されているか。</p> <p><b>【諸手当・法定外福利費】</b></p> <p>○ 法人の福利厚生費について、法人の事務・事業の公共性、業務運営の効率性及び国民の信頼確保の観点から、必要な見直しが行われているか。</p> <p><b>【会費】</b></p> <p>・法人の目的・事業に照らし、会費を支出しなければならない必要性が真にあるか(特に、長期間にわたって継続してきたもの、多額のもの)。</p> <p>・会費の支出に見合った便宜が与えられているか、また、金額・口座・種別等が必要最低限のものとなっているか(複数の事業所から同一の公益法人等に対して支出されている会費については集約できないか)。</p> <p>・監事は、会費の支出について、本見直し方針の趣旨を踏まえ十分な精査を行っているか。</p> <p>・公益法人等に対し会費(年 10 万円未満のものを除く。)を支出した場合には、四半期ごとに支出先、名目・趣旨、支出金額等の事項を公表しているか。</p>	<p>り国家公務員を下回る。本部事務局及び5館の美術館のうちの3館が東京都特別区内に所在し、1級地に勤務する事務・技術職員の割合が国を大きく上回る(国立美術館:72.9%, 国:29.5%)ため、年齢のみを勘案した指数においては国家公務員を上回ったものと考えられる。</p> <p>※国の勤務地の比率については、「平成24年国家公務員給与等実態調査」を用いて算出</p> <p><b>【福利厚生費の見直し状況】</b></p> <p>国以外のもは設けていない。また、レクリエーション費については、「独立行政法人のレクリエーション経費について」(平成20年8月4日総務省行政管理局長通知)を踏まえ支出していない。</p> <p><b>【会費の見直し状況】</b></p> <p>公益財団法人日本博物館協会に対し、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館から会費を支出している。当該協会では国内外の博物館等に関する調査研究を行っており、会議等への参加による情報収集及び意見交換によって業務の質の向上に資するものであり、会費の支出が必要である。</p> <p><b>【会費の支出実績】</b></p> <p>公益財団法人日本博物館協会 230,000 円(5 館合計)</p> <p>当該会費については、協会の規定に基づき、博物館(美術館を含む)の規模等によって金額が決められており、必要最低限のものである。</p> <p><b>【監事による会費支出の精査】</b></p> <p>監事監査において支出全般の点検を行った。</p> <p><b>【公益法人等に対する会費支出の公表】</b></p> <p>公益法人等に対する会費支出については、四半期ごとにHPで公表している。</p>	<p>業務運営の効率性の上からも必要な範囲と考える。</p> <p>会費は業務の質の向上に資する必要最低限のものと認められる。</p> <p>定期監事監査にて、前年度における公益法人等への会費支出状況について精査を行っており、適切と認められる。</p> <p>国立美術館のウェブサイトにて、公益法人等への会費支出状況の掲載、四半期ごとの更新を行っており、適切と認められる。</p>
---	---	--

【(小項目)2-3】 内部統制		【評定】			
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>5 内部統制・ガバナンスの強化</p> <p>(1) 組織を構成する人員・美術館施設及び国から交付される運営費交付金等を有効に活用し、常に健全で適正かつ堅実な管理運営環境を確保できるよう、理事長のマネジメントの強化や監査機能の充実について検討を行いつつ、その結果を逐次運営管理に反映させるなど内部統制の充実・強化を図る。</p> <p>(2) 外部有識者で構成する外部評価委員会を年1回以上開催し、当該委員会において、国立美術館の目標等を踏まえ、年度ごとに業務の実績に関する評価を実施する。また、評価結果については、公表するとともに、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。</p>		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			
		実績報告書等 参照箇所			
評価基準	実績	分析・評価			
<p>○ 組織を構成する人員・美術館施設及び国から交付される運営費交付金等を有効に活用し、常に健全で適正かつ堅実な管理運営環境を確保できるよう、理事長のマネジメントの強化や監査機能の充実について検討を行いつつ、その結果を逐次運営管理に反映させるなど内部統制の充実・強化を図ったか。</p>	<p>理事長の召集及び主宰で独立行政法人国立美術館館長等会議(以下「館長等会議」という。)を開催している。館長等会議は、国立美術館の業務の適正かつ円滑な執行を図るため、各館の館長及び理事で構成する会議である。</p> <p>館長等会議における審議事項は、国立美術館の運営に関する基本方針等であり、国立美術館の運営管理上の重要事項について協議した。原則として隔月に1回開催している。ただし、理事長が特に必要と認めた場合は、臨時に館長等会議を開催している。なお、平成24年度は、6回開催した。</p> <p>(平成24年度における主要な議題)</p> <p>平成23年度業務実績報告書について</p> <p>平成23年度決算について</p> <p>平成24,25年度国立美術館会計監査人候補者の選考について</p> <p>監事監査による監査報告及び監査意見に対する措置状況について</p> <p>美術作品購入計画について</p> <p>就業規則等の一部改正について</p> <p>館長等会議の開催に際しては、各館の館長の他、役員である理事及び監事、室長以上の職員の出席を求めており、説明又は意見を求めるとともに、同時に館長等会議における決定等について周知を図る場として活用した。</p> <p>定期開催以外に臨時館長等会議を開催し、平成24年度は本部に学芸調整役を置くため、独立行政法人国立美術館組織規則を改正した。</p> <p>(平成24年度 館長等会議開催日)</p>	<p>国立美術館の業務の適正かつ円滑な執行を図るため、理事長主宰による国立美術館館長等会議を開催し、運営に関する基本方針等の重要事項について協議するなど、内部統制の充実・強化について取り組んでいる。</p>			

<p>○ 外部有識者で構成する外部評価委員会を年1回以上開催し、当該委員会において、国立美術館の目標等を踏まえ、年度ごとに業務の実績に関する評価を実施したか。また、評価結果については、公表するとともに、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させたか。</p> <p>【法人の長のマネジメント】  (リーダーシップを発揮できる環境整備)  ○ 法人の長がリーダーシップを発揮できる環境は整備され、実質的に機能しているか。</p>	<p>第1回館長等会議(平成24年6月21日)  第2回館長等会議(平成24年9月20日)  第3回館長等会議(平成24年11月29日)  第4回館長等会議(平成25年1月17日)  第5回館長等会議(平成25年3月11日)</p> <p>(平成24年度 臨時館長等会議開催日)  第1回臨時館長等会議(平成25年8月3日～13日、書面による協議)</p> <p>外部評価委員会(設置根拠:独立行政法人国立美術館組織規則)は、単年度ごとの業務の実績について評価を行う組織で、平成24年度は、4月17日、5月23日、6月5日の3日間開催し、「平成23年度外部評価報告書」を取りまとめ、理事長に報告された。</p> <p>また、平成23年度業務実績報告書と合わせて、平成23年度外部評価報告書を法人ホームページ上で公開した。</p> <p>その外部評価報告書の中で、ナショナルセンターとして更に国際文化交流の推進を求められたことを踏まえ、平成24年度は、東京国立近代美術館工芸館(協力:京都国立近代美術館)が、文化庁、フィレンツェ国立美術監督局とともに、イタリア・フィレンツェにあるピッティ宮殿において「日本のわざと美ー近現代工芸の精華ー」展を開催した。本展は、日本の近現代工芸作品の海外発信という点で有意義な展覧会であると同時に、その後国立西洋美術館において開催した「ラファエロ」の交換展としての意味を持ち、同展のための作品借用料等の低廉化にも寄与しており、企画展を実施する上での新たな工夫を実現したものである。また、文化施設を訪れる大学生が少なくなっていることから大学との連携強化が必要との指摘を受けたことを踏まえ、平成24年度から新たにフィルムセンターにおいて大学等連携事業を始め、キャンパスメンバーズの加盟校がフィルムセンターの所蔵映画フィルムと施設を利用して講義等を実施できるようにした。</p> <p>【リーダーシップを発揮できる環境の整備状況と機能状況】</p> <p>原則、隔月1回(1年度内5回)開催される館長等会議により、法人における予算、人員等の決定手続きは行われている。(詳細は既述)</p> <p>原則として、各館における美術作品の収集、展覧会の開催計画は、各館の館長の主導で行われている。なおこれらの情報交換の場として、学芸調整役、各館の副館長、学芸課長、事務局長(理事兼務)が出席する学芸課長会議が開催されている。</p>	<p>外部評価委員会を3回開催し、業務の実績に関する評価を実施するとともに、その結果をホームページにおいて公表している。評価結果については、事務、事業等の改善に活かしている。</p> <p>館長等会議、事務局長を長とする本部事務局や理事や独立行政法人国立美術館運営委員会による理事長の補佐体制の整備を通じて、理事長がリーダーシップを発揮できる環境は整備され、実質的に機能していると認められる。また、これらの体制を通して理事長は組織にとって重要な情報等</p>
--	--	---

<p>(法人のミッションの役職員への周知徹底)</p> <p>○ 法人の長は、組織にとって重要な情報等について適時的確に把握するとともに、法人のミッション等を役職員に周知徹底しているか。</p> <p>(組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)の把握・対応等)</p> <p>○ 法人の長は、法人の規模や業種等の特性を考慮した上で、法人のミッション達成を阻害する課題(リスク)のうち、組織全体と</p>	<p>法人の長である理事長の補佐体制として、理事を3名任命するとともに、各館に館長を配置し、各館の館務を掌理させている。また、本部に理事を兼任する事務局長を置き、本部事務局の企画立案機能の充実を図るとともに、各館横断的な調査研究業務及びその他の学芸に係る専門的な重要事項に係る事務を掌理する学芸調整役を新たに配置し、各館が有機的に連携し、効果的・効率的な業務を遂行し得る体制を整備した。</p> <p>これらのほか、理事長のマネジメントを補佐するため、引き続き、外部の有識者で組織する、独立行政法人国立美術館運営委員会及び独立行政法人国立美術館外部評価委員会を開催した。</p> <p>運営委員会(設置根拠:独立行政法人国立美術館組織規則)は、理事長が諮問する国立美術館の管理運営に関する重要事項について、理事長の諮問に応じて審議し、理事長に対して助言する組織で、平成24年度は、7月3日及び平成25年3月5日の2回開催し、第1回では、平成23年度事業実績、独立行政法人通則法の一部改正等について、第2回では、平成24年度事業の中間報告、平成25年度事業計画、行政改革の動き等について、意見を求めたところである。</p> <p><b>【組織にとって重要な情報等についての把握状況】</b></p> <p>理事長、理事、監事及び各館の館長で構成する独立行政法人国立美術館館長等会議を原則として隔月に1回開催し、法人として対処すべき課題や各館における現状等について意見交換を行い、その対処方針等を決定している。その後、各館における定例会議等を通じ全職員への情報周知を行っている。平成24年度の館長等会議では、5館合同での企画展、美術作品購入計画、文化関係3法人統合への対応等について検討した。また、外部有識者で構成する独立行政法人国立美術館運営委員会や独立行政法人国立美術館外部評価委員会の開催を通じても重要な情報等の把握に努めている。</p> <p>監事監査において指摘された法人本部及び各館における課題(リスク)のうち法人として取り組むべき課題(リスク)について、その原因を分析し、監査意見に対する措置状況において対応策を明らかにし、館長等会議において各館に周知した。</p> <p><b>【役職員に対するミッションの周知状況及びミッションを役職員により深く浸透させる取組状況*】</b></p> <p>独立行政法人国立美術館館長等会議、独立行政法人国立美術館運営委員会、独立行政法人国立美術館外部評価委員会の開催に際しては、役員及び各館の館長はもとより、各館の副館長・部長・課長・室長が常時出席しており、これらの会議を</p>	<p>について適時的確に把握していると認められる。</p> <p>館長等会議により、法人における総合調整機能、資源の戦略的配分とその効果が検討・決定されている。また、各館における美術作品の収集、展覧会の開催計画の情報交換の場として、学芸課長会議が開催されている。</p> <p>館長等会議、運営委員会及び外部評価委員会並びに学芸課長会議及び運営管理会議に一定の管理職又は職員が参加することによって、法人のミッション等を役職員に周知させている。</p> <p>組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)として、主に実績に記載されている項目を把握するとともにその対応策を適切に行っていると判断される。</p>
---	--	--

<p>して取り組むべき重要なリスクの把握・対応を行っているか。</p>	<p>通じて、ミッションの周知等を行っている。毎年度秋(11月)に開催される合同会議(拡大館長等会議)については、特定の課題やその他の課題等について、副館長・学芸課長も参加し意見交換を行う場としている。平成24年度は美術作品の購入に関して意見交換を行った。</p> <p>このほか、研究系職員を中心とした学芸課長会議や事務系職員を中心とした運営管理会議を開催し、これらを通じてミッションの周知等を実施している。平成24年度においては、それぞれ5回開催した。</p> <p><b>【組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)の把握*状況】</b></p> <p>独立行政法人国立美術館の事務事業に係る政府としての決定を遵守するとともに、外部の有識者で構成する独立行政法人国立美術館運営委員会や独立行政法人国立美術館外部評価委員会の開催を通じて、組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)の把握に努めている。また、独立行政法人国立美術館館長等会議、運営管理会議・学芸課長会議における状況聴取のほか、監事や会計監査人との意見交換を通じて把握に努めている。</p> <p><b>【組織全体で取り組むべき重要な課題(リスク)に対する対応*状況】</b></p> <p>平成24年度において取り組んだ課題に対する対応としては、主に次のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 理事長が法人又は国立美術館各館に係る諸課題に適切、かつ迅速に対処するために必要な経費として、理事長裁量経費を計上した。</li> <li>○ 十分な人件費の確保が望めない現在の状況において、常勤職員の増加は困難を極める中、運営委員会委員の意見書を外部に発信するとともに、平成23年度より、限られた人件費の中で、人材の採用、開発、育成に支障を来たさないよう設計した任期付研究員及びアソシエイトフェロー制度を有効に活用した。 なお、同制度のうち、任期付研究員制度については、将来、研究員への登用も考慮したものとなっている。</li> <li>○ 館長等会議及び学芸課長会議において、平成24年度及び平成25年度の美術作品購入費の用途について協議し、海外への流出可能性など緊急度の高さ、作品の品質と希少性等の観点から、美術作品の購入を検討した。</li> <li>○ 「今夏の電力供給対策について(24文科施第117号)」及び「今冬の電力需給対</li> </ul>	<p>人員の不足は、将来の法人の目的達成に支障を来したり、職員の心身の健康維持に悪影響を及ぼすことが懸念される。任期付研究員及びアソシエイト・フェローの制度導入については、人件費の有効活用という観点だけでなく、美術館の使命を全うするための人材の確保・養成という観点からも、適正な運用に努め、必要に応じて常勤職員の増加等を図る必要がある。</p>
-------------------------------------	--	--

<p>○ その際、中期目標・計画の未達成項目（業務）についての未達成要因の把握・分析・対応等に着目しているか。</p> <p>（内部統制の現状把握・課題対応計画の作成）</p> <p>○ 法人の長は、内部統制の現状を的確に把握した上で、リスクを洗い出し、その対応計画を作成・実行しているか。</p>	<p>策について（24文科施第355号）」を踏まえ、使用電力の抑制に取り組んだ。</p> <p>○ 5館の横断的・総合的事業プロジェクトとして、平成 22 年度に初めての合同企画展「陰影礼讃—国立美術館のコレクションによる」を開催し高評を得た。平成 24 年度は、「記憶と想起—コレクションとリコレクション（仮称）」を企画案として採択し、担当者を決定した。平成 27 年度の開催に向けて、平成 25 年度においても準備を進める予定である。</p> <p>○ 台風等自然災害時及び急病人（来館者）の発生等の不測の事態において、臨時閉館や救急処置等適切に対応できるよう体制を構築している。</p> <p>○ 地震発生による転倒防止のため、彫刻等立体作品に免震台を適宜、導入した。</p> <p><b>【未達成項目（業務）についての未達成要因の把握・分析・対応状況】</b></p> <p>文部科学省評価委員会による評価結果では、第 2 期中期目標の未達成項目はなかったが、ナショナルセンターとしての人材育成については中期計画の達成度が B 評定（達成度 70%～100%）であった。特にキュレーター研修について、応募者側の事情を勘案した上で、参加者数増加に向けた改善が求められたことから、キュレーター研修の参加希望者及び派遣元の事情を考慮し、募集の時期を早めるとともに、当該研修年度の展覧会開催予定について情報提供を行った。</p> <p><b>【内部統制のリスクの把握状況】</b></p> <p>各館における定例会議等や法人としての運営管理会議、学芸課長会議及び館長等会議を通じて、内部統制のリスクの把握に努めている。</p> <p>また、監事監査要綱や監事監査実施基準による監査のほか、独立行政法人国立美術館会計規則に基づく会計監査、独立行政法人国立美術館内部監査実施規則に基づく資産及び会計に係る事務全般の監査、独立行政法人国立美術館競争的資金等取扱規則に基づく内部監査、独立行政法人国立美術館文書管理規則に基づく監査等を通じて内部統制のリスクの把握に努めている。</p> <p>なお、平成 24 年度における監事監査報告書において、法人全体での課題として、次のことが指摘された。</p> <p>○ 人件費削減に伴う人員不足及び勤務状況について</p> <p>人員の不足については、平成 23 年度に制度化した「任期付研究員」及び「アソシエイトフェロー」の有効活用により研究員を確保するとともに、職員の心身の健康維</p>	<p>中期目標・計画の未達成項目ではないが、指摘された項目については参加者募集の時期を早めるとともに展覧会開催予定について情報提供を行い、適切に対応している。</p> <p>内部統制の整備・運用状況は、有効に機能を発揮していると判断される。</p> <p>また、各館における定例会議等や法人としての運営管理会議、学芸課長会議を通じて、内部統制のリスクの把握に努める体制が確立していると考えられる。</p> <p>内部統制リスクへの対応については、適宜、運営管理会議及び館長等会議において協議するとともに各館に周知することにより、適切に対応している。</p>
---	---	--

<p><b>【監事監査】</b> ○ 監事監査において、法人の長のマネジメントについて留意しているか。</p>	<p>持のために、これまで、産業医による個別面談及びメンタルヘルスケアに関する研修等に加え、一斉休業日を試行的に設けた。</p> <p><b>【内部統制のリスクが有る場合、その対応計画の作成・実行状況】</b> 監査結果報告書を受けて、法人本部において、「監査報告書の監査意見に対する措置状況について(通知)」を作成し、運営管理会議及び館長等会議において協議の上、監事に送付した。措置状況に記載した法人としての対処等については、会議を通じて各館に周知の上、今後具体的な対策を検討していくこととした。</p> <p><b>【監事監査における法人の長のマネジメントに関する監査状況】</b></p> <p>1. 監査規程の整備状況</p> <p>(1) 監事監査</p> <p>①独立行政法人国立美術館監事監査要綱(平成13年4月2日制定 国立美術館規程第4号)</p> <p>②独立行政法人国立美術館監事監査実施基準(平成13年4月2日制定 国立美術館規程第5号)</p> <p>③独立行政法人国立美術館監事監査要領(平成13年4月1日制定)</p> <p>(2) 内部監査</p> <p>①独立行政法人国立美術館内部監査実施規則(平成23年3月30日制定 国立美術館規則第7号)</p> <p>②独立行政法人国立美術館平成24年度内部監査計画</p> <p>(3) 独立行政法人国立美術館職員倫理規則(平成18年3月31日制定 国立美術館規則第26号)</p> <p>2. 監査体制の整備状況</p> <p>(1) 監事監査</p> <p>①監事(文部科学大臣任命)2名(非常勤2名)</p> <p>②監査の事務補助(監事監査要綱第6条)平成24年度実績 3名 兼務:局長1名・室長2名(独法移行後、毎年3~4名体制)</p> <p>(2) 内部監査</p> <p>①監査員(内部監査実施規則第4条) 職員のうちから1名以上 平成24年度実績 7名(兼務:室長1名・係長2名・係員2名)</p> <p>②総括及び調整等(内部監査実施規則第11条) 総括及び調整:事務局長</p> <p>3. 監査実績(実施項目, 実施時期, 監査手法 等)</p> <p>(1) 監事監査の実績</p>	<p>監事は、館長等会議その他重要な会議への出席、役職員からの事業の報告の聴取、重要な決裁書類等の閲覧、及び会計監査人からの説明などを通して、理事長のマネジメントに留意した上で、監査を実施していると判断される。</p>
---	---	---



①監事監査の概要

独法移行後(平成13年4月以降)各年度において、館長等会議(隔月1回)その他重要な会議に出席するほか、役職員から事業の報告を聴取し、重要な決裁書類等を閲覧し、本部において、財務及び業務についての状況を調査した。さらに、会計監査人から会計監査人の監査方法及びその結果について説明を受け、会計帳簿等の調査を行い、財務諸表、事業報告書及び決算報告書について検討を加え、いずれも適正であることを確認するとともに、業務の執行に関する法令遵守等の状況についても確認した。

②定期監査スケジュール、報告書、指摘事項等

○ 監事監査計画作成(4月)→ 提出先:理事長

○ 定期監査(6月)

業務監査(毎年度1回)→ 監査結果報告書(提出先:理事長)

会計監査(年度決算時)→ 監査結果報告書(提出先:理事長)

監査結果報告については、運営管理会議、館長等会議で結果を報告することとしており役職員に対して具体的に周知している。また、監査で指摘を受けた事項がある場合、その事項に対する措置状況については、法人全体の取組として、運営管理会議、館長等会議に諮り、改善提案を「監査結果報告書の監査意見に対する措置状況について(通知)」として監事に報告している。

③その他の監査

館長等会議その他重要な会議への出席。聴取、意見交換等、重要な書類等の回付(監事監査要綱第13条)、出納計算内訳表等(月末)の回付、5館における臨時監査の実施。

臨時監査(毎年度1回)→監査結果報告書(提出先:理事長)

監査結果報告書については、各館に周知し、定期監査と同様に、運営管理会議及び館長等会議で結果を報告することとしており、役職員に対して具体的に周知している。また、監査で指摘を受けた事項がある場合、その事項に対する措置状況については、法人全体の取組として、運営管理会議及び館長等会議に諮り、改善提案を「監査結果報告書の監査意見に対する措置状況について(通知)」として監事に報告している。

○各館臨時監査実施状況

平成24年9月5日(国立西洋美術館)

平成24年10月25日(東京国立近代美術館(本館・工芸館))

平成24年11月8日(国立新美術館)

平成24年11月14日(東京国立近代美術館(フィルムセンター))

平成24年11月29日(京都国立近代美術館)

<p>○ 監事監査において把握した改善点等について、必要に応じ、法人の長、関係役員に対し報告しているか。その改善事項に対するその後の対応状況は適切か。</p>	<p>平成 24 年 11 月 30 日(国立国際美術館)</p> <p>④会計監査人との連携      会計監査人からの監査計画の報告(3月頃), 会計監査人からの監査報告(6月)</p> <p>⑤「独立行政法人、特殊法人等監事連絡会」総会及び第9部会への参加</p> <p>⑥会計検査院実施によるセミナー等 公会計監査フォーラム(8月)など年間数回参加</p> <p>(2) 内部監査の実績</p> <p>①内部監査の概要      内部監査実施規則に基づき平成13年度から実施した。平成24年度においては京都国立近代美術館, 国立西洋美術館, 国立国際美術館及び国立新美術館を対象として, 契約方法の妥当性, 見積徴収方法, 旅費・諸謝金の取扱い等について, 2人~3人の監査員が監査に当たった。</p> <p>②監査スケジュール, 報告書, 指摘事項等</p> <p>○内部監査計画の通知:平成24年7月26日</p> <p>○実地監査実施 :平成24年8月23日(京都国立近代美術館)      平成24年8月24日(国立国際美術館)      平成24年8月28日(国立西洋美術館)      平成24年8月30日(国立新美術館)</p> <p>○内部監査報告書の提出:監査実施後1か月以内</p> <p>【監事監査における改善点等の法人の長、関係役員に対する報告状況】      監査結果概要</p> <p>○法人監査      監査意見に対する措置状況について(平成24年9月2日館長等会議附議)      (1)関係諸法令の遵守状況及び諸規定等の整備及び実施状況(2)中期計画の進捗状況(3)年度計画の達成状況(4)事業の企画・実施状況(5)契約の締結及び執行の状況(6)給与水準の状況(7)情報開示の状況(8)財務諸表の法令準拠及び適正性(9)決算報告書の法令準拠及び適正性(10)事業報告書の適正性(11)上記に関連する会計関係帳簿, 証拠書類等の管理状況</p> <p>○臨時監査      監査意見に対する措置状況について(平成25年3月11日館長等会議附議)</p> <p>監事監査報告書</p>	<p>監事監査において把握した改善点等については、適宜報告がなされていると認められる。また、その改善事項への対応状況も適切に行われていると判断される。</p>
---	--	---

	<p>独立行政法人国立美術館監事監査要綱(平成13年国立美術館規程第4号)第9条第1項に基づき、平成24年7月9日、平成24年10月4日及び12月7日付けで監査結果報告書が提出されている。</p> <p><b>【監事監査における改善事項への対応状況】</b></p> <p>監査結果報告書を踏まえ、監査結果報告書における監査意見については、館長等会議(平成24年9月20日及び平成25年3月11日開催)において審議し、独立行政法人国立美術館監事監査要綱(平成13年4月2日国立美術館規程第4号)第10条第2項に基づき、措置状況等を監事に通知した。</p> <p>主な措置状況：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・引き続き、所蔵作品の適正な管理の実施</li> <li>・「任期付研究員」及び「アソシエイトフェロー」制度の有効活用</li> <li>・職員の心身の健康維持のため、産業医による個別面談及びメンタルヘルスケアに関する研修等に加え、平成25年度から一斉休業日の正式導入</li> </ul>	
--	---	--

【(小項目)2-4】	情報安全	【評定】			
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>(3) 保有する情報については、国民が適正な情報を円滑に得られるよう、ホームページにおける情報を充実させるなど、必要な措置を講じて、適切に情報を開示する。また、保有する情報の安全性向上のために、必要な管理体制の整備を図るとともに、情報セキュリティに配慮した業務運営の情報・電子化に取り組むなど、情報セキュリティ対策を推進する。</p>		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			
		実績報告書等 参照箇所			
		<p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P12~14</p> <p>(3)美術に関する情報の拠点としての機能の向上</p> <p>①情報通信技術(ICT)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等</p> <p>P79</p> <p>3 管理情報の安全性の向上</p>			
評価基準	実績	分析・評価			
<p>○ 保有する情報について、国民が適正な情報を円滑に得られるよう、ホームページにおける情報を充実させるなど、必要な措置を講じて、適切に情報を開示したか。また、保有する情報の安全性向上のために、必要な管理体制の整備を図るとともに、情報セキュリティに配慮した業務運営の情報・電子化に取り組むなど、情報セキュリティ対策を推進したか。</p>	<p>○ 保有する情報について、ホームページにおける情報の充実等、国民への適切な情報の開示についての本部及び各館の取組は以下のとおりである。</p> <p>&lt;各館の ICT 活用の特徴&gt;</p> <p>(ア)本部</p> <p>平成 20 年度にリニューアルした法人ホームページにおいては、引き続き国立美術館 5 館の開催展覧会及び各種催事等トピックスの一覧を維持した。</p> <p>「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」については、平成 23 年度より「指導者研修 Web 報告」のページを充実させて、平成 24 年度も継続してその記録を公開した。</p> <p>(イ)東京国立近代美術館</p> <p>平成 19 年度より稼働のコンテンツ・マネジメント・システム(CMS)を用いて、ホームページ・コンテンツの追加更新を迅速化し、平成 24 年度は特に「60 周年記念サイト」を設けてポスター・アーカイブも公開するなどして、記念事業の広報に努めた。</p> <p>独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムに新収蔵作品の文字画像データを追加するとともに、同システムへの著作権のある作品画像掲載を進めるため、許諾を得た水彩・素描その他の作品 237 点について画像を新規登録した。</p> <p>また、平成 24 年度から新たに工芸についての著作権者情報を整備するとともに、初年度として陶磁の著作権許諾申請手続を開始した。</p>	<p>本部及び各美術館においてホームページにおける情報の充実を行うとともに、保有する情報の安全性向上のためのセキュリティ対策が十分図られている。また、保有個人情報の管理状況について、監事監査も実施されている。</p> <p>今後もホームページを閲覧する人が増加していくようにさらなる充実を期待する。</p> <p>一方で、ホームページのみならず、機関リポジトリーや SNA が拡大している現在、慎重に検討すべき側面もある。</p>			

平成 23 年度に着手した東京国立近代美術館所蔵作品管理システム並びに独立行政法人国立美術館総合目録のデータ登録更新とインターフェースの改良を、他の国立美術館各館と連携して実装させた。

平成 23 年度に欧米主要美術図書館横断検索システムである artlibraries.net ([http://artlibraries.net/index\\_en.php](http://artlibraries.net/index_en.php))と国立美術館の図書検索システム(東京国立近代美術館及び国立西洋美術館)の連携可能性について、国立情報学研究所と連携して始めた受託研究の成果により、artlibraries.net への参加を実現させた。

フィルムセンターでは、事業関連の情報を提供する「NFC メールマガジン」の登録者が着実に増加している。NFCD(フィルムセンターデータベース)については、人物情報の統合を進めるとともに、フィルムの運用管理機能、資料整理の深化及びプレス資料(プレスシート、試写状他)をカテゴリーに加えるという重要な改造を行った。

さらに、映画関連資料へのアクセス希望に対しては、図版提供を速やかに行うため、また、識別を容易にするため、適宜デジタル・データへのスキャンや簡易撮影を行い、共有ファイル内に蓄積を進めている。

#### (ウ) 京都国立近代美術館

展覧会の内容や案内に関する情報、講演会及び教育普及関連のイベント案内、さらには「友の会」の行事報告に加え、コレクション・ギャラリー(所蔵作品展示)の展示替えごとに出品リストや小企画などのテーマ展示についても解説と出品リストをホームページに掲載し、情報発信に努めた。

また、「開館 50 周年記念特別展」の開催に際しては、展覧会広報の一助として、ホームページ上に、同館独自の展覧会として初めて「特設サイト」を開設した。さらに、美術館ニュースや研究論集についても、掲載内容をホームページ上に告知した。

#### (エ) 国立西洋美術館

収蔵作品情報管理システムに作品関連文書を管理する機能を新たに付加し、作品に関する多様な情報資源を蓄積・公開する基盤を強化した。また、平成 23 年度に引き続き科学研究費補助金を受け、収蔵作品データの充実に努め、平成 24 年度は署名・年記情報の充実に重点的に取り組んだ。ホームページ上に公開している所蔵作品データベース(「作品検索」)を時代の変化に即して改良し、スマートフォン及びタブレット等 Flash 非対応端末の表示不良等の問題解決を図った。さらに、本データベースが平成 25 年度開講の放送大学『博物館情報・メディア論』でデジタル・アーカイブ活用モデルとして取り上げられることとなり、取材に全面的に協力した。

収蔵品情報以外では、従来から要請の多かった松方コレクション関連情報の公開に関連し、その第一段階として科学研究費補助金の助成を受けて、大正から昭和期の松方コレクション展に関する調査を行い、その成果をホームページ上で公開する

準備を進めた。このほか急速に拡大しつつあるソーシャル・メディアへの取り組みとして、公式 facebook ページを開設した。「Google アートプロジェクト」への参画も果たし、所蔵品 164 点を同サイトにて公開した。

(オ) 国立国際美術館

平成 24 年度は、平成 23 年度に実施したホームページのリニューアルにより充実を図った展覧会情報、関連イベント情報、施設利用案内について、更なる充実に努めた。

また、引き続き、展覧会ごとに英語版ホームページを作成し、海外への情報発信、外国人来館者への情報提供に努めた。

(カ) 国立新美術館

展覧会情報検索サービス「アートコモンズ」において、引き続き日本国内の美術館、画廊、美術団体が開催する展覧会の情報を収集し、検索可能とすることに努めた。平成 24 年度においては 4,067 件の展覧会情報を 1,170 の美術館・美術団体・画廊の協力により収集・公開した。

また、ホームページを通じて、「活動報告」の公開を含め、当館の活動を紹介すると共に、これまでのメールマガジンの発行に加え、ソーシャルネットワークサービス (SNS) の活用により、昨今のインターネットの利用形態の変化に対応した幅広い情報発信の道筋について実践的に試行・検証した。

○ 保有する情報の安全性向上のために必要な管理体制の整備と情報セキュリティ対策についての法人全体での取組

個人情報の保護については、引き続き、個人情報保護に関する説明会への参加や情報漏えいの事例等の通知を行うとともに、個人情報ファイルの保有状況調査の実施等に合わせ、重要書類は鍵のかかる保管庫に納めること、個人情報を取り扱う業務中に離席する際は、当該書類やパソコン画面を他の職員等から見られないような措置を講じること、廃棄する際はシュレッダーにかけることなど、厳格に書類管理を行った。また、あわせてウィルス対応ソフトウェアの導入の徹底や最新のプログラムへの更新を随時行うなど、電子メール等による外部からのウィルス進入を回避する安全策を講じた。

なお、独立行政法人国立美術館保有個人情報管理規則第 50 条に基づき、当法人の保有個人情報の管理状況について、平成 24 年 10 月 25 日に監事による監査を実施した。

<b>【(大項目)3】</b>	Ⅲ 予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画	<b>【評定】</b>			
		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			

<b>【(小項目)3-1】</b>	財務の状況	<b>【評定】</b>			
		A			
		H23	H25	H26	H27
		A			
<p><b>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</b></p> <p>収入面に関しては、実績を勘案しつつ、自己収入を積極的に確保することにより、計画的な収支計画による運営を図る。自己収入については、入場料収入等の増額を目指す。</p> <p>また、外部資金については、寄附金や企業からの支援(協賛金等)の獲得のほか「キャンパスメンバーズ」等への加入者の増大などに取り組む。</p> <p>なお、管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に取り組む。</p> <p>1 予算(中期計画の予算) 別紙のとおり</p> <p>2 収支計画 別紙のとおり</p> <p>3 資金計画 別紙のとおり</p> <p>IV 短期借入金の限度額</p> <p>短期借入金の限度額は、15億円。</p> <p>短期借入金が想定される理由は、運営費交付金の受入れに遅延が生じた場合である。</p> <p>V 不要財産及び不要財産となることが見込まれる財産の処分に関する計画</p> <p>なし</p> <p>VI 上記以外の重要な財産の処分等に関する計画</p> <p>なし</p> <p>VII 剰余金の使途</p> <p>決算において剰余金が発生した時は、次の経費等に充てる。</p> <p>1 美術作品の購入・修理</p> <p>2 展覧会の充実</p> <p>3 調査研究事業の充実</p> <p>4 情報・資料の収集等事業の充実</p> <p>5 講演会・出版その他教育普及事業の充実</p> <p>6 研修事業の充実</p> <p>7 入館者サービス、情報提供の質的向上、老朽化対応のための施設・設備の充実</p> <p>VIII その他主務省令で定める業務運営に関する事項</p> <p>1 施設・設備に関する計画(別紙4)</p>		<p><b>実績報告書等 参照箇所</b></p> <p>&lt;実績報告書&gt;</p> <p>P81～84</p> <p>Ⅲ 予算(人件費の見積もりを含む)、収支計画及び資金計画等</p> <p>1 予算</p> <p>2 収支計画</p> <p>3 資金計画</p> <p>5 短期借入金</p> <p>6 重要な財産の処分等</p> <p>7 剰余金</p> <p>P86</p> <p>9 施設設備に関する計画</p> <p>P84</p> <p>(3)目的積立金の使用状況</p> <p>(4)積立金(通則法第44条第1項)の状況</p>			

(1) 施設・設備の老朽化への対応、入館者の安全確保及び利便性の向上等のため、長期的な視野に立った整備計画を策定し、施設・設備に関する計画に沿った整備を推進する。

(2) 国立新美術館の管理運営を適切に実施するため、用地(未購入の土地)について、施設・設備に関する計画に基づき、予算措置に応じて購入を進める。

3 中期目標期間を超える債務負担  
 中期目標期間を超える債務負担については、国立美術館の業務運営に係る契約の期間が中期目標期間を超える場合で、当該債務負担行為の必要性及び資金計画の影響を勘案し、合理的と判断されるものについて行う。

4 積立金の使途  
 前中期目標期間の期間の最終年度において、独立行政法人通則法第44条の処理を行ってなお積立金があるときは、その額に相当する金額のうち文部科学大臣の承認を受けた金額について、次期へ繰り越した経過勘定損益影響額等に係る会計処理に充当する。

評価基準	実績	分析・評価																									
<p>○ 収入面に関して、実績を勘案しつつ、自己収入を積極的に確保することにより、計画的な収支計画による運営を図ったか。</p> <p>○ 自己収入については、入場料収入等の増額を目指したか。</p> <p>また、外部資金については、寄附金や企業からの支援(協賛金等)の獲得のほか「キャンパスメンバーズ」等への加入者の増大などに取り組んだか。</p> <p>○ 管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に取り組んだか。</p> <p>【収入】</p>	<p>自己収入については、目標入館者数を上回る入館者数を得たことなどから、予算額1,095百万円に対して決算額が1,172百万円であり、予算額を77百万円上回ったことから、計画的な収支計画による運営を行うことができた。</p> <p>外部資金については、平成24年度以降の各種事業の実施に際し、協賛金等を得た(平成24年度実績16百万円)。</p> <p>キャンパスメンバーズについては、平成24年度加入数は78校であった。</p> <p>中期計画に定めたとおり、運営費交付金を充当して行う事業については、業務の効率化を進め、中期目標期間中、一般管理費については15%以上、業務経費については5%以上の効率化を図る(ただし、美術作品購入費、美術作品修復費、土地借料等の特殊要因経費はその対象としない。また、人件費については別に定める。)こととしている。この計画に基づき、一般管理費△3.02%、業務経費△0.371%の効率化を行い、年度計画予算を策定している。平成24年度については、年度計画予算に基づき執行し、特殊要因経費を除いた削減率は、一般管理費△0.59%、業務経費△5.78%となった。</p> <p>【平成24年度収入状況】(単位:千円)</p> <table border="1" data-bbox="638 1214 1599 1465"> <thead> <tr> <th>収入</th> <th>予算額</th> <th>決算額</th> <th>差引増減額</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>運営費交付金</td> <td>7,783,702</td> <td>7,701,187</td> <td>△82,515</td> <td></td> </tr> <tr> <td>施設整備費補助金</td> <td>5,347,281</td> <td>5,317,871</td> <td>△29,409</td> <td></td> </tr> <tr> <td>事業等収入</td> <td>1,095,092</td> <td>1,188,698</td> <td>93,606</td> <td></td> </tr> <tr> <td>受託収入</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	収入	予算額	決算額	差引増減額	備考	運営費交付金	7,783,702	7,701,187	△82,515		施設整備費補助金	5,347,281	5,317,871	△29,409		事業等収入	1,095,092	1,188,698	93,606		受託収入	0	0	0		<p>外部資金の導入が難しい状況にあるが、協賛金の獲得に努め実績を上げており、キャンパスメンバーズの増加は法人の営業努力として評価される。</p> <p>予算、収支計画及び資金計画については、計画額と実績額との乖離について概ね説明がされており、当該乖離の要因が法人の業務運営に問題があることによるものではなく、特に指摘すべき事項はないと判断される。</p> <p>今後も入館者数が増加する良い企画を期待するとともに、前期より減少した協賛金等の獲得に努められたい。</p>
収入	予算額	決算額	差引増減額	備考																							
運営費交付金	7,783,702	7,701,187	△82,515																								
施設整備費補助金	5,347,281	5,317,871	△29,409																								
事業等収入	1,095,092	1,188,698	93,606																								
受託収入	0	0	0																								



計	14,226,075	14,207,757	△18,317
---	------------	------------	---------

金額は単位未満切り捨てのため、合計が合致しない場合がある。

【主な増減理由】

運営費交付金は、国家公務員の給与の改定及び臨時特例に関する法律(平成 24 年法律第 2 号)に基づき減額されている。

事業等収入は、展覧会の入館者数が目標入館者数を上回ったことから、予算に比べ収入増となった。

施設整備費補助金は、入札等による工事価格の抑制により、予算に比べ収入減となった。

【支出】

【平成 24 年度支出状況】(単位:千円)

支出	予算額	決算額	差引増減額	備考
一般管理費	1,512,903	1,443,368	69,534	
うち、人件費	330,642	282,649	47,992	
うち、物件費	1,182,261	1,160,718	21,542	
事業経費	7,365,891	6,938,836	427,054	
うち、人件費	773,457	717,507	55,949	
うち、物件費	6,592,434	6,221,328	371,104	
施設費	5,347,281	5,317,871	29,409	
受託経費	0	0	0	
計	14,226,075	13,700,076	525,998	

金額は単位未満切り捨てのため、合計が合致しない場合がある。

【主な増減理由】

人件費については、国家公務員の給与の改定及び臨時特例に関する法律(平成 24 年法律第 2 号)に準じた抑制を行ったことから支出減となった。

一般管理費及び事業経費のうち物件費は、美術作品購入費の運営費交付金債務の平成 25 年度以降への繰越等により支出減となった。

施設整備費補助金は、入札等による工事価格の抑制により、予算に比べ支出減となった。

【収支計画】

【平成 24 年度収支計画】(単位:千円)

区分	計画額	実績額	差引増減額
費用の部			
経常費用	5,424,726	5,501,092	76,366
管理部門経費	1,470,814	1,577,714	106,900
うち人件費(注1)	330,642	420,825	90,183
うち一般管理費(注2)	1,140,172	1,156,888	16,716
事業部門経費	3,791,858	3,762,084	△29,774
うち人件費(注3)	773,457	579,022	△194,435

うち展示事業費(注4)	1,853,762	1,981,342	127,580
うち調査研究事業費(注4)	211,859	208,479	△3,380
うち教育普及事業費(注4)	952,779	993,240	40,461
減価償却費	162,923	161,294	△1,629
収益の部			
経常収益	5,424,726	5,509,364	84,638
運営費交付金収益(注5)	4,167,581	4,133,941	△33,640
展示事業等の収入(注6)	1,095,092	1,172,042	76,950
資産見返運営費交付金戻入	146,585	144,626	△1,959
資産見返寄附金戻入	1,678	3,258	1,580
資産見返物品受贈額戻入	13,789	12,212	△1,577
寄附金収益	—	29,290	29,290
施設費収益(注7)	—	13,991	13,991
経常利益		8,271	
臨時損失		227	
臨時利益		1,454	
当期純利益		9,498	
前中期目標期間繰越積立金取崩額		1,611	
当期総利益		11,110	

金額は単位未満切り捨てのため、合計が合致しない場合がある。

**【主な増減理由】**

(注1)退職手当の支出による。

(注2)施設整備費補助金による費用への計上が見込より多かったことによる。

(注3)人員の削減等の効率化及び「国家公務員の給与の改定及び臨時特例に関する法律(平成24年法律第2号)」に準じた抑制による。

(注4)支出経費の見直しを行ったことによる。

(注5)運営費交付金による固定資産の取得が見込より多かったため、資産見返運営費交付金又は資本剰余金に計上されたことによる。

(注6)入場料収入等の増加による。

(注7)年度計画に基づいた工事の完了による。

【資金計画】

【平成 24 年度資金計画】(単位:千円)

区分	計画額	実績額	差引増減額
資金支出	14,226,075	14,011,150	△214,925
業務活動による支出(注1)	8,789,786	8,370,446	△419,340
投資活動による支出(注2)	5,436,288	5,640,704	204,416
財務活動による支出	—	—	—
資金収入	14,226,075	14,328,120	102,045
業務活動による収入	8,878,794	8,937,890	59,096
運営費交付金による収入(注3)	7,783,702	7,701,187	△82,515
展示事業等による収入(注4)	1,095,092	1,236,703	141,611
投資活動による収入	—	—	—
有形固定資産の売却による収入	—	1,641	1,641
施設整備補助金による収入(注5)	5,347,281	5,388,588	41,307
資金増加額		316,969	
資金期首残高		1,300,199	
資金期末残高		1,617,168	

金額は単位未満切り捨てのため、合計が合致しない場合がある。

【主な増減理由】

(注1)美術品・収蔵品の購入に係る運営費交付金の平成25年度以降への繰越による。

(注2)平成23年度に完了した工事代金の平成24年度における支出による。

(注3)国家公務員の給与の改定及び臨時特例に関する法律(平成24年法律第2号)に基づく減額による。

(注4)入場料収入等の増加による。

(注5)平成23年度施設整備費補助金の精算に伴い、一部が平成24年度の収入となったことによる。

【財務状況】

(当期総利益(又は当期総損失))

【当期総利益(当期総損失)】

当期総利益 11,110,237 円

○ 当期総利益(又は当期総損失)の発生

【当期総利益(又は当期総損失)の発生要因】

財務状況については、自己資本比率が高く、当期総利益を計上しているなどから、特段の問題はないと判断される。

当期総利益の発生要因は、自己収入の増加に

<p>要因が明らかにされているか。</p> <p>○ また、当期総利益(又は当期総損失)の発生要因は法人の業務運営に問題等があることによるものか。</p> <p>(利益剰余金(又は繰越欠損金))</p> <p>○ 利益剰余金が計上されている場合、国民生活及び社会経済の安定等の公共上の見地から実施されることが必要な業務を遂行するという法人の性格に照らし過大な利益となっていないか。</p> <p>○ 繰越欠損金が計上されている場合、その解消計画は妥当か。</p> <p>○ 当該計画が策定されていない場合、未策定の理由の妥当性について検証が行われているか。さらに、当該計画に従い解消が進んでいるか。</p> <p>(運営費交付金債務)</p> <p>○ 当該年度に交付された運営費交付金の当該年度における未執行率が高い場合、運営費交付金が未執行となっている理由が明らかにされているか。</p>	<p>自己収入の増加による収益。</p> <p><b>【利益剰余金】</b>  前中期目標期間繰越積立金 379,366,049 円  積立金 89,483,260 円  当期未処分利益 11,110,237 円</p> <p><b>【繰越欠損金】</b>  計上なし</p> <p><b>【解消計画の有無とその妥当性】</b>  該当なし</p> <p><b>【解消計画に従った繰越欠損金の解消状況】</b>  該当なし</p> <p><b>【解消計画が未策定の理由】</b>  該当なし</p> <p><b>【運営費交付金債務の未執行率(%)と未執行の理由】</b>  運営費交付金債務の未執行率 8.13%(626,104,024 円)  未執行の理由  美術作品購入に係る事業は業務達成基準としているが、平成 24 年度に予定していた当該事業の一部が実施できなかったため、当該費用が未執行の債務として計上された。</p>	<p>よるものであり、法人の業務運営に問題等はないと判断される。</p> <p>利益剰余金はインセンティブになるようにする必要がある。</p>
--	--	---

<p>○ 運営費交付金債務(運営費交付金の未執行)と業務運営との関係についての分析が行われているか。</p> <p>(溜まり金)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ いわゆる溜まり金の精査において、運営費交付金債務と欠損金等との相殺状況に着目した洗い出しが行われているか。</li> </ul> <p>【短期借入金の限度額】</p> <p>○ 中期目標期間中の短期借入の実績はあったか。有る場合は、その額及び必要性は適切であったか。</p> <p>【重要な財産の処分等に関する計画】</p> <p>○ 重要な財産の処分に関する計画は有るか。ある場合は、計画に沿って順調に処分に向けた手続きが進められているか。</p> <p>【剰余金の使途】</p> <p>○ 利益剰余金は有るか。有る場合はその要因は適切か。</p>	<p>【業務運営に与える影響の分析】</p> <p>次年度以降に当該業務が実施でき次第、債務は解消する予定である。</p> <p>【溜まり金の精査の状況】</p> <p>当法人は運営費交付金以外の財源で手当すべき欠損金が発生していないことから、運営費交付金債務と相殺されているものはない。 また、当期総利益がキャッシュフローを伴わない費用と相殺されているものはない。</p> <p>【溜まり金の国庫納付の状況】</p> <p>該当なし</p> <p>【短期借入金の有無及び金額】</p> <p>該当なし</p> <p>【必要性及び適切性】</p> <p>該当なし</p> <p>【重要な財産の処分に関する計画の有無及びその進捗状況】</p> <p>重要な財産の処分に関する計画はない。</p> <p>【利益剰余金の有無及びその内訳】</p> <p>前中期目標期間繰越積立金 379,366,049 円 積立金 89,483,260 円 当期未処分利益 11,110,237 円</p> <p>【利益剰余金が生じた理由】</p> <p>前中期目標期間繰越積立金は、自己収入で購入した固定資産、リース資産の残存価格によるものである。 積立金は平成 23 年度未処分利益によるものである。 当期未処分利益は自己収入の増加及び運営費交付金の節約による収益によるものである。</p>	<p>溜まり金はない。</p> <p>短期借入金はない。</p> <p>重要な財産の処分に関する計画はない。</p> <p>利益剰余金の要因は適切であり、法人の性格に照らし過大な利益剰余金ではなく、特に問題ないと判断される。</p>
---	--	--

<p>○ 目的積立金は有るか。有る場合は、活用計画等の活用方策を定める等、適切に活用されているか。</p> <p>○ 施設・設備の老朽化への対応、入館者の安全確保及び利便性の向上等のため、長期的な視野に立った整備計画を策定し、施設・設備に関する計画に沿った整備を推進したか。</p> <p>○ 国立新美術館の管理運営を適切に実施するため、用地(未購入の土地)について、施設・設備に関する計画に基づき、予算措置に応じて購入を進めたか。</p> <p><b>【施設及び設備に関する計画】</b></p> <p>○ 施設及び設備に関する計画は有るか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。</p> <p><b>【中期目標期間を超える債務負担】</b></p> <p>○ 中期目標期間を超える債務負担は有るか。有る場合は、その理由は適切か。</p> <p><b>【積立金の使途】</b></p> <p>○ 積立金の支出は有るか。有る場合は、その使途は中期計画と整合しているか。</p>	<p><b>【目的積立金の有無及び活用状況】</b></p> <p>目的積立金は計上していない。</p> <p>東京国立近代美術館本館の展示室及び収蔵庫の空調機について、24時間運転を行っていることから経年劣化が進行していたため、館内環境保全の必要性から更新工事を行った。</p> <p>京都国立近代美術館の電気設備について、設置から20年以上を経過し不具合の発生及び保守に必要な部品の調達が困難となっていることから、平成24年度から平成26年度までの3年計画で更新工事を行うものとし、平成24年度は監視カメラの更新を行った。</p> <p>国立新美術館の土地購入について、平成24年度は51億円が予算措置され、当該購入により、持分比率は59.8%となった。</p> <p><b>【施設及び設備に関する計画の有無及びその進捗状況】</b></p> <p>中期計画の施設・設備に関する計画に基づき、以下の施設整備が完了した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・東京国立近代美術館本館展示室・収蔵庫空調機更新</li> <li>・京都国立近代美術館電気設備等更新(3年計画1年目)</li> <li>・国立新美術館土地購入(平成24年度取得予定分)</li> </ul> <p><b>【中期目標期間を超える債務負担とその理由】</b></p> <p>中期目標期間を超える債務負担はない。</p> <p><b>【積立金の支出の有無及びその使途】</b></p> <p>積立金の支出はない。</p>	<p>施設及び設備に関する計画は中期計画に基づき適切に実施されていると認められる。</p> <p>中期目標期間を超える債務負担はない。</p>
---	--	---

【(小項目)3-2】	人事の状況	【評定】																																						
<p>【法人の達成すべき目標(計画)の概要】</p> <p>2 人事に関する計画</p> <p>(1)方針</p> <p>① 国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度の検討を引き続き行う。</p> <p>② 人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供に努める。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。</p> <p>(2)人員に係る指標</p> <p>給与水準の適正化等を図りつつ、業務内容を踏まえた適切な人員配置等を推進する。</p> <p>(参考)中期目標期間中の人件費総額見込額 4、729百万円</p> <p>但し、上記の額は、役職員に対し支給する報酬(給与)、賞与、その他の手当の合計額であり、退職手当、福利厚生費を含まない。</p>		B																																						
		H23	H25	H26	H27																																			
		A																																						
		実績報告書等 参照箇所																																						
		<実績報告書>																																						
		P83～85																																						
		8 人事に関する計画																																						
評価基準	実績	分析・評価																																						
<p>【人事に関する計画】</p> <p>○ 人事に関する計画は有るか。有る場合は、当該計画の進捗は順調か。</p> <p>○ 人事管理は適切に行われているか。</p> <p>○ 業務内容を踏まえた適切な人員配置を行っているか。また、有期雇用職員職制の活用を図ったか。</p>	<p>【人事に関する計画の有無及びその進捗状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>常勤職員の削減状況</li> </ul> <table border="1" data-bbox="645 831 1518 911"> <thead> <tr> <th></th> <th>19年度</th> <th>20年度</th> <th>21年度</th> <th>22年度</th> <th>23年度</th> <th>24年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>常勤職員数</td> <td>125</td> <td>125</td> <td>119</td> <td>114</td> <td>113</td> <td>103</td> </tr> </tbody> </table> <p>※各年度当初における職員数</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>常勤職員、任期付職員の計画的採用状況</li> </ul> <table border="1" data-bbox="645 1050 1518 1166"> <thead> <tr> <th></th> <th>19年度</th> <th>20年度</th> <th>21年度</th> <th>22年度</th> <th>23年度</th> <th>24年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>常勤職員</td> <td>1</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>0</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>任期付職員</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>4</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> <li>危機管理体制等の整備・充実に係る取組状況</li> </ul> <p>各館において消防訓練を実施し、地震や火災への対応を想定した準備を整え、危機管理の対策を講じ、不測の事態にも柔軟に対応できるよう危機管理の意識を持つように徹底した。</p>		19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	常勤職員数	125	125	119	114	113	103		19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	常勤職員	1	6	1	1	0	3	任期付職員	0	0	0	0	1	4	<p>人事計画に則しているものの、文化行政の中核を担う人事計画若くは人事管理として、常勤職員の削減は、もはや限界状況に達しており、国際的水準にてらしても、およそ適切とは言いがたい。</p>			
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度																																		
常勤職員数	125	125	119	114	113	103																																		
	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度																																		
常勤職員	1	6	1	1	0	3																																		
任期付職員	0	0	0	0	1	4																																		

<p>○ 職員の意識向上を図るため、次の職員研修を実施したか。</p> <p>ア 新規採用者・転任者職員研修</p> <p>イ 接遇研修</p> <p>ウ メンタルヘルスケアに関連する研修</p> <p>○ 外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図ったか。特に研究職職員への研修機会の増大に努めたか。</p> <p>○ 職員のメンタルヘルスケアの一層の推進を図ったか。</p>	<p>ア、イ 主に新規採用者(非常勤職員を含む)・外部機関からの転任者を対象として、接遇・クレーム研修を実施した。(H24. 12. 14実施 研修参加者・・・20名)</p> <p>ウ メンタルヘルスケアに関する研修を実施した。(H24. 12. 13実施 研修参加者17名)</p> <p>文部科学省・文化庁が主催する研修のみならず、他省庁等が主催する研修にも積極的に参加した。</p> <p>【平成24年度中の研究職員の主な研修受講実績】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文部科学省平成24年度学芸員等在外派遣研修生</li> <li>・全国美術館会議「学芸員研修会」</li> <li>・日本博物館協会日独青少年指導者セミナー</li> </ul> <p>産業医による個別面談を実施した。</p>	<p>新規採用者、転任者研修、接遇・クレーム研修、メンタルヘルスケアに関する研修は実施されている。</p> <p>文部科学省・文化庁主催による学芸員研修をはじめ他省庁等が主催する研修などに積極的に職員を派遣している。</p> <p>産業医による個別面談により、職員のメンタルヘルスケアを実施している。</p>
--	--	--